―文 芸―

草の丘

第 29 号

2025 年 12 月 印旛文学の会

URL https://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

文芸

草の丘　第二九号（二〇二五年　一二月）

目次　草の丘 第二九号

《詩》
冬を超えて　中川とら ……一
悲しい火花ほか３編　ねこまくら ……三
《エッセイ》
トワイライト世代 ―その７―　安達真魚 ……七
凡愚の戯言 二〇二五年冬　畑中康郎 ……二二
《連載小説》
熱血の蘭医 ポンペ ―第３回―　香取 淳 ……六四
この前・この間 ―第７回・完結編―　いんば華子 ……九七

冬を超えて

中川とら

一、

わたし達は
ハビタブルゾーンの惑星に生きている
太陽系で唯一　地球だけが
数えきれない生命の呼吸音を
かなでているのよ
なんて幸運な星でしょう
金星でもなく 火星でもない
地球の自転軸がぶれないのは
夜空に輝く月のおかげのよう
そう思うと
満月も半月も三日月も合掌したくなるほど
尊く美しい

二、

今、地球は
紛争も戦争も日常のもの
災害は、止むことなく地上に噴き出し
社会は矛盾に満ちている
春が荒れて、夏が沸騰して
秋の実りは、影を落とし始めている
冬はおそらく極寒であるかも

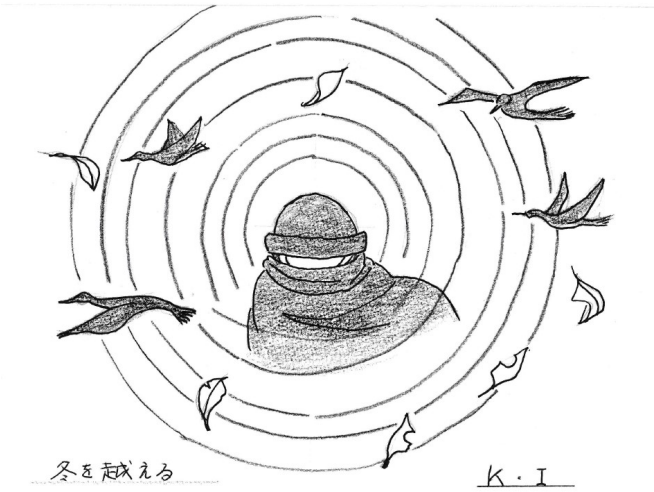
三、

あなたの病が
快復に向かっていることを知って
本当にうれしい
晴れた日は、少しでも外に出て
太陽の光を浴びてください
好きな事をし、生きている今を
楽しんでいかれますように

四、

今年も　そろそろ終わりです
日に日に寒さが厳しくなって
北風が老いた体に一段とこたえます
血圧が上がり、腰も膝も痛みます
でも、わたしは負けません
せっかく、この星に生を受けたのだから
強く生きる
うまく生きる
仲良く感謝して生きる
試練を乗り越えて
最後は
「ああ、いい人生だった」と思って終わります
幸運な星に生まれたのだから

◇



悲しい花火

ねこまくら

戦争を知らない私には
爆撃の轟音にしか聞こえない
美しい光のあと追うように
悲しくとどろく
その瞬間にどこかでまた
尊い命たちが
花火のひとひらになるのかと
失われた命を
美しい光に乗せて
光が星になるというのだろうかと
無心のまま
花火を見ることのできる喜びを
まわりの人々と分かちあえずに
背を向ける
ますます激しく爆音が
悲惨な映像になって私の背後を襲う
逃げたい
走って逃げたい
逃げることのできるうちに
逃げることのできない人をおもいながら
逃げる

こんな自分も悲しくて
自分からも逃げたくなる
何も考えず
なにも見ず
見ても考えず
風に流されるまま
重力に任せたまま
落ちるべきところに堕ちるのだろう
燃えかすのように
そんなの嫌だ
戦争は嫌だ

優しい猿

優しい人になりたいけれど
優しい人になれないのは
優しくないからなのではなく
優しくするやりかたがわからない
がんばれという言葉しかでてこないので
これ以上どうやってがんばるのかと反論されて
逃げ帰ってしまうだけ
言葉を知らないので
言葉が足りずに傷つけて
何も言わずに立ち去っては

冷たい人だとなじられる
優しくされた記憶はあるけれど
同じやりかた同じ言葉で
手を差し伸べたところで
パズルのピースは見当違い
いっそのこと
誰にもかかわることをせず
独りを決め込む
旅先ではうまくいくんだ
道端で困っている人も
助けることができるんだ
やっかいなのは

言葉を交わさねばならない人か
もうそろそろ
孤高を決め込むのが賢いようで
視線を外に振り向けず
冷たい人と覚悟を決めて
見ざる言わざる聞かざると
私は猿になる
心根優しい猿になる

◇

あざとい

たとえば詩を書き手紙を書き
ブログやもろもろＳＮＳや
ありのままの私を描こうとしても
そこには悲しいあざとい心
どこまでが真実で
どこまでが嘘っぱち
おのれでさえもわからない
私はいったい誰なのか
私を名乗る私の言葉
私はワタシとワタクシと
きのう得たワタクシメが
混在し合って私になる
かくしてあざとい私がいる

トワイライト世代 その７

安達 真魚

由布岳（狭霧台より）2025.06

伊勢、鳥羽旅行

今年（２０２５年）４月、子供を含む数人の家族旅行で伊勢参りに行くことになった。私自身は、前の式年遷宮のころにお参りに行ったこともあって、あまり気が進まなかったが、参加することにした。宿泊は鳥羽のリゾートホテルで、初日は外宮、２日目は内宮、三日目は鳥羽周辺観光の３泊４日の旅程であった。

往復には、新幹線、近鉄を利用し、現地はレンタカーを利用することにして、それらの手配は私にまかされることになった。基本的にネットで予約するのであるが、不慣れな私にとっては、かなりきつい作業だと感じた。新幹線と近鉄を利用していくことになったが、予約するのにそれぞれの鉄道会社に会員登録をする必要があった。ＪＲ東海と近鉄では、予約の方法は全く違っている。ＪＲ東海は交通系カードなどによるチケットレスが利用できるが、不安なため紙のチケットに交換したくらいだ。余談だが、現在、新幹線各社の複数エリアをまたい

で、旅行するときは、それぞれ別途に申し込み、購入しなければいけない。将来的には、各社のサイトを統合して１回のログインで予約できるように利便性を向上していくとの発表があったようだ。（２０２５年９月）

鳥羽市は、志摩半島の北東端にあり、西を伊勢市、南を志摩市と接する。北と東は海に面し、伊勢湾と太平洋を分ける位置にある。半島部のほか、神島、答志島、菅島、坂手島の４つの有人離島がある。（Wikipedia より）

鳥羽市の総人口は 16,127 人（市のＨＰ、令和７年７月末日現在）で、市の人口としては多くない。中世から戦国時代にかけて、九鬼一族などの海賊集が跋扈（ばっこ）していたように想像できる。

産業は農林水産業と観光業が中心で、変化に富んだリアス式海岸の海を利用したカキや真珠の養殖が有名だ。イセエビやアワビ、海苔なども産する。海にはいたるところに、養殖筏らしいものが見える。ミキモト真珠島は、真珠養殖の発祥地であり、真珠に関する展示や体験が楽しめる観光名所になっている。近くには島も多く、海水浴場も多いようだ。観光船も数多く就航し、マリーン産業が盛んである。鳥羽水族館も有名だ。

観光地だけにホテル、旅館などの宿泊業は多い。食事処も、さすがに海鮮を扱う店が圧倒的に多く、人気店も多かった。

鳥羽はアクセスもいい。鉄道はＪＲと近鉄がともに鳥羽駅まで乗り入れている。鳥羽駅から先の伊勢志摩サミットの開催で有名な賢島駅までは近鉄の路線のみだ。道路については、伊勢市から鳥羽駅の近くまで自動車専用道路が整備されている。なぜか無料区間になっている。ちなみに、この道路を伊勢から鳥羽方面に走ると、左手の山の上に派手なお城が見えた。後で調べると、「ともいきの国 伊勢忍者キングダム」というテーマパークで、その城は、安土桃山城を模したものらしい。

鳥羽一郎と山川豊は鳥羽市石鏡出身の有名な兄弟歌手だ。全国に鳥羽市の名を広めた功績は大きい。鳥羽展望台には、二人の歌碑が建立されているようだが、そこまでは立ち寄れなかった。

この地域にはこうした海の見える展望台が数多くある。ブラタモリで紹介された弘法大師の護摩岩のある青峯山もその一つで、伊勢湾を出入りする船を展望できる。青峯山正福寺は、行基の開基と伝わる古刹で、昔から漁師、海女など海で働く人々の安全を祈願してきた。

自然豊かな鳥羽市に宿泊して、この地に住んでいる人を羨ましいと思うとともに、爽やかな親近感を覚えた。

遊歩道

最近、健康のために散歩（ウォーキング）することが多くなった。ウォーキングは、健康維持、ダイエット、メンタルヘルスの向上、生活習慣病の予防などに、非常に効果があることが実証されている。

自宅の周辺は、歩道、公園内、遊歩道など、気分によって、コースを自由に選択できので、散歩の環境としては恵まれている。また、歩く道の両側は植樹されていることが多い。車道には、歩道が付帯され、街路樹が植栽されているのが普通で、街路樹の日影を利用できる道であれば、夏場での日中の散歩も可能だ。さらに、天候不順のときは、買い物のついでに、近くのショッピングモール内を歩くこともできる。

遊歩道は、歩行者が安全、快適に利用できるようにしたもので、メンテナンスを除き、車両などは入れないようになっている。周辺住民を中心に、通勤、通学、散歩などの生活道路として使用できる。千葉ニュータウンの域内には、周到に計画された多くの遊歩道がある。本文では、ローカルで恐縮だが、自身の居住地の近くの遊歩道の例を紹介する。

千葉ニュータウン中央駅の北ロータリーから大塚前公園、小倉台図書館、浦畑新田公園から浦畑公園通りに突き当たるまでの約２㎞の比較的長い遊歩道だ。駅からは北北西に真っすぐ向かうが、浦畑新田公園のあたりで左へカーブしていく。駅からイオンまでは、冬場イルミネーションイベント（イルミライＩＮＺＡＩ）が行われるところで、遊歩道というより、幅広の歩道だ。遊歩道と呼べるのは、大塚前公園から先になる。

この遊歩道は、木刈地区、小倉台地区から中央駅にアクセスする歩行者のための大動脈だ。利用している住民はかなり多い。自宅がこの遊歩道に面しているので、時間帯にもよるが、通行している人が多いことは自宅の室内からもよくわかる。

地形的には、戸神川の一つの支流の先端と亀成川の一つの支流の先端を結んでいる形になっている。小倉台図書館のやや北側には旧木下街道（注）があった。この街道は全体に尾根道であるが、このあたりも台地上を通っていた。この遊歩道と旧木下街道と交差していた小倉台図書館のやや北側のあたりが、戸神川水系と亀成川の水系の分水嶺といえる。小倉台図書館前の木刈峠（びょう）／大塚前遺跡説明板に、近くに「木刈峠遺跡」があったことが表記されている。このエリア全体が手賀沼と印旛沼の峠（とうげ）だったことを裏づけている。ちなみに、「大塚前遺跡」の地名の由来となっている大塚は、この場所から旧木下街道を東へ約２００ｍ先の左側にあった。

木刈方面への入口にあたる大塚前公園の東側付近から、この遊歩道の様子を案内してみる。

この遊歩道は全体に幅広であるが、大塚前公園の東側はとくに道幅が広くなっている。駅方面に向かって歩行者の通行量が多くなることに対応しているようだ。この公園と接している区間だけ遊歩道としては珍しく中央

分離帯が設けられていることが面白い。分離された

西側の歩道には、視覚障碍者用誘導ブロックが設置されていて、終点である浦畑公園通りと交差する地点まで続いている。それにしても、中央分離帯を設置した意図は、よくわからないが、建設当時の企画者または設計者の趣向があったのだと納得しておきたいと思う。大塚前公園を過ぎるあたりから、坂を少し下り、交差する一般道路をアンダーパスで通過して坂を上り、小倉台図書館に至る。その先から北環状線の近くまでは中央分離帯の代わりに大きめの木が歩道の中央に植樹されている。さらに進むと坂を下って北環状線をアンダーパスで通過する。

アンダーパスを抜けると、南西側が木刈中学校、北東側が浦幡新田公園となる。木刈中学校は全く視界に入らないので、自然の中の遊歩道という雰囲気になる。北東側の浦幡新田公園の池があり、道端にはちょっとしたベンチや東屋が設置されており、たまにバードウォッチングを楽しんでいる人もいる。この公園の池は、亀成川の支流の谷の先端部の一つで、堰き止めて、調整池や用水地として利用されていると思う。浦幡新田公園は、広場、東屋、公衆トイレなどがあり、地域の人のいやしの場所になっているようだ。この公園の一角には、大きな日時計があるのだが、それが日時計であることに気づかない人も多いように思う。自分も最近まで気づかなかった。

浦幡新田公園を過ぎると、左側（南南西側）は木刈の住宅地、右側（北北西側）は木刈小学校だ。木刈小学校は、一段高い敷地にあるので、この遊歩道からは見えない。小学校を過ぎるとすぐに交差する道路の下を通る。その少し先に左横に分岐する遊歩道がある。この遊歩道も距離が長く、そのまま道なりに進むと桜台の十余一公園の池にたどり着く。この遊歩道の木刈７丁目から十余一公園の池までは、戸神川支流の川床を利用している。この流れの水源は、二軒茶屋（現在ウエルシアがある場所）にあったようだ。

元の遊歩道に戻って、この分岐点から３００ｍくらい進むと、浦幡公園通りに突き当たり、この遊歩道は終わっている。

遊歩道の両側などには、人工的とはいえ、ほとんどが植樹されているので、野鳥も多く、自然を楽しむことができる。真夏でも時間帯によっては、植樹帯の日影を利用して歩くことができる。後で気づいたことだが、前述した視覚障碍者用誘導ブロックは、周辺の他の遊歩道にも設置してある。遊歩道には必ず設置することにしているようだ。ローカルな遊歩道ではあるが、歩いてみれば、いろいろ気づくことがあって面白い。

（注）ニュータウン開発前の旧木下街道は、二軒茶屋から泉地区経由で大森に向かい、できる限り亀成川支流と戸神川支流の谷を避けた道筋となっていた。途中、泉地区で大森方面と牧之原方面に分岐し、戦時中は、牧之原にあった印旛陸軍飛行場のアクセス道路としても使用されたので、当時軍用道路と呼ばれた時代があったようだ。いずれにしても、江戸期、このあたりの旧木下街道は印西牧（小金牧の一つ）の域内であった。

印西市木刈の遊歩道(ｲﾛﾊﾓﾐｼﾞ）2025.11

レーザー距離計

長く生きていると、激しい世の中の変化をつくづく感じるものである。街並みも変わるし、生活のスタイルも変わった。変化は技術革新によるものが多い。自分たちが生きてきた時代は、加速度的なスピードで技術革新が

行われてきた時代であったといえるが、将来も変わることがなく進歩し続けていくことは、容易に想像できる。

これまで親しんできたゴルフの世界でも同様だ。以前より乗用カートが採用されているゴルフ場が多くなっている。カートにはＧＰＳ距離表示できるナビゲーション用のタブレットが設置され、スコア入力ができて、集計までしてくれるようになっている。さらに、このところの夏場の暑さに対応するため、カートに４人分の固定式のファンが設置されたものや、クーラー付きのカートも現れたらしい。最近はゴルフプレーヤーも高齢化しているようであるが、乗用カートの導入と改良は、プレーヤーの高齢化対応に大いに寄与していると思う。ただ、高齢者でも健康維持のためにカートに乗らないという人もたまにいるが、それはそれで、個人の価値判断である。

ゴルフの距離計測は、２０１９年のルール改定で 高低差の計測を除き、距離を得るための計測機器などの使用が許されるようになっている。ただ、アマチュアが競技会以外などで使用することは改定以前から行われていたと思う。

ゴルフで使用される距離計は、乗用カートに設置されているもの以外にも、いろいろなタイプがある。測定方法で大きく分けると、ＧＰＳを利用するものと、レーザーを利用するものになる。乗用カート設置のものとウォッチタイプ（腕時計型）のものは、ＧＰＳを利用している。スマホアプリを使用するのもあるが、これもＧＰＳ利用だ。一方、レーザーを利用するものをゴルフレーザー距離計と呼ぶ。

ＧＰＳタイプの距離計は、利用するＧＰＳ衛星の数によって精度が決まるらしい。乗用カートの計測器での計測は、普及のはじめ頃に比べて、現在の方がより精度が良くなっているように感じるが、少しずつ改良されているのであろう。

しかし、個人で距離計を持つプレーヤーは年々多くな

っている。普及の背景は、全体に値段が安くなっていること、距離確認にカートに戻らなければならないこと、キャディのつかないプレイが多くなっていること、自分の計測距離を重視したい上級者がいることなど、いろいろな理由がある。また、一方で距離計を持たない人も多い。我々のような並みのアマチュアプレーヤーが、いくら精度の高い距離が分かったところで、距離通りには打てないことが多いのは、恥ずかしながらプレーヤー自身がよくわかっているという事情もある。

いずれにしても、個人で距離計を購入する場合、おおむねＧＰＳのウォッチ型か、光学式のレーザー距離計になる。そのなかで、ひと頃ＧＰＳのウォッチ型を所有している人が多かったが、最近では光学式のレーザー距離計の方が普及しつつあるように感じる。

レーザー距離計は、ルール改定以前から一定の需要があったと思う。レーザー距離計は精度が高く、プロや上級者は競技会の事前ラウンドで調査として使用していたことは、ゴルフファンとして気が付いている人も多い。一方で、一般アマチュアプレーヤーは、事前ラウンドの調査などはないのが当たり前であり、プライベートのプレイやコンペなどでも使用できないので、需要が少なかった。また、値段は数万円以上して高価だったので、一般アマチュアプレーヤーとすれば高値の花だったといえる。しかし、ルール改定を機に、状況が変わり、レーザー距離計は、普及を加速させることになった。普及の背景の要因になったことに、レーザー距離計に多くの点で優位性が高くなったことがあげられる。

・多くのメーカーがゴルフ用のレーザー距離計の販売に参入したため、価格競争で全体に値段が下がった。

・精度が向上した

・小型化し、軽量で持ち運びやすくなった。

・測定速度が向上した。

・バッテリー性能が向上した。

・機種により異なるが、その他の各種機能が充実してきた。（高低差測定、ピンサーチ機能、ブレ防止機能、長距離測定、３点計測機能、防水機能の向上、画面視認

性の向上など）

ゴルフクラブ１本を買うより安い価格で、小型で最新機能のレーザー距離計が買えるのであるから、普及して当然かもしれない。

ひと昔前、学校の授業で、巻き尺を使用しないで距離を測定する実習を体験したことがある。意外と計測の原理や機材の扱いが難しく、作業と測定結果の計算にも時間がかかり、さらに測定された値そのものも低精度であったことを記憶している。対象物に照準を当ててボタンを押すだけで測定値が表示される現在のレーザー距離計と比較すると、さすがに隔世の感がある。蛇足だが、その頃の授業はサボってばかりで、成績も悪かった。負け惜しみではあるが、あまり勉強しなくて良かったと思う。

レーザー距離計は、ゴルフに限らず、建築・土木工事、電気工事、ＤＩＹ、スポーツ、レジャーその他など様々な分野で利用されている。迅速かつ高精度で距離測定ができるレーザー距離計は、今後も活用分野を広げ、距離測定の効率化と作業品質の向上に貢献していくだろうと思う。

九州旅行

今年（２０２５年）は、例年になく宿泊付きの家族旅行が多かった。自分としては、年の初め頃から体調が悪く、遠方に出かけて、旅行を楽しむというような状況ではなかった。それでも「体調が悪くても外出した方がいい」とか言われ、留守番するのもいやなので、旅行に同行することにした。今回は、６月の２泊３日の九州旅行で、高千穂峡観光がメインであった。航空券や宿泊の手配をしなくてもよかったので、その意味では楽であった。

旅行プランは、初日、熊本空港着、高千穂峡、黒川温泉(泊)、二日目、延岡市北浦（泊）、三日目、宮崎空港発で、それ以外は、いつものようにノープランであった。

熊本空港でレンタカーを借り、宮崎空港で乗り捨てるアバウトな旅程であった。

最初に訪れた高千穂峡は、さすがにメジャーな観光地で、インバウンドもかなり多かった。峡谷は絶景である。遊歩道は整備されているが、アップダウンがあり、かなりの運動量となった。峡谷の谷底に降りて、手漕ぎのボードに乗ったが、コントロールが難しく、ボートの数も多かったので、ぶつかってばかりであった。あの有名な真名井の滝には近づけなかったのが残念であった。高千穂峡での昼食は、チキン南蛮をいただいた。多くの店にチキン南蛮の看板が出ていたが、チキン南蛮は宮崎県生まれの食文化であるらしい。

高千穂神社に寄った後、天岩戸神社西本宮に向かった。車で１０数分くらい、岩戸川の谷の北側に沿った道を走った。谷川の両側には低山が連なり、谷川に沿って多く棚田が見られた。ゆったり、のんびりしていて、交通量も少ない癒される道路だ。後でGoogleマップを見ると、「ひむか神話街道」と記載されていた。ちなみに、高千穂神社の近くで、備蓄米の失言で有名になった江藤拓元農水大臣のポスターを見かけたが、このような立派な棚田を見ると、「米を買ったことがない」という失言も、なぜか納得できるような気がした。

天岩戸神社西本宮から、さらに岩戸川に沿って１０分くらい歩くと、天安河原（あまのやすかわら）と呼ばれる大洞窟がある。天照大神が天岩戸にお隠れになったとき、困った神々が集まって話し合いをした場所と伝わっている。岩戸川の清流が印象的であった。

その日は、宮崎県の高千穂から熊本県に戻って、黒川温泉に泊まった。黒川温泉は、熊本県阿蘇郡南小国町にある温泉である。阿蘇山の北に位置する全国屈指の人気温泉地らしい。町場から離れた落ち着いた温泉地という雰囲気だ。

二日目は、ホテルを出て、やまなみハイウェイ（大分県道・熊本県道１１号別府一の宮線）と九州横断自動車

道を利用して湯布院、別府方面に向かうことにした。途中、九重夢大吊橋に立ち寄って、「天空の散歩道」３６５度の大パノラマ（歩道専用として『日本一の高さ』を誇る吊橋で、長さ３９０ｍ、高さ１７３ｍ、幅１．５ｍ）を体験した。

湯布院では、由布岳が真正面に見える露天風呂があるという日帰り温泉「由布岳温泉」に行ってみることにした。平日の昼前だったので、他に客がなく、貸切り状態であった。脱衣所などは昔ながらの雰囲気だ。しかし、露天風呂に出てみると、天気が良かったのも幸いして、由布岳の雄大な景色が広がっていた。昼食は、金鱗湖近くの「天井桟敷」というカフェですませた。江戸時代末期の造り酒屋を移築した建物の二階にあり、雰囲気が良く、かなり人気の高いカフェのようだ。金鱗湖の周辺は、平日でも人通りが多く、湯布院でも人気のあるエリアであることが想像できた。

湯布院からは、再度やまなみハイウェイを利用して別府に向かった。走り出して坂を上り始めると間もなく由布岳が見え始めた。すぐにパーキングエリアがあったので、そこに立ち寄ってみた。そこは狭霧台（さぎりだい）という展望所で、由布岳が間近に見え、眼下には湯布院の街が一望できる最高の場所であった。ちょうど時期がよく、由布岳は新緑に映えていた。由布岳は、ＮＨＫ朝の連続ドラマ『風のハルカ』のオープニングの映像に使われていたと記憶している。テーマソングは、森山直太朗の『風花』で、印象に残る曲であった。そんなことで、自分にとっては、ここで由布岳を眺望できたことは、予想外の感激であった。ちなみに、久住連山や由布岳もそうであるが、九州のこのあたりの山は、樹木が少なく草原のような山々が多いことに気づいた。後で調べたことだが、火山性の土壌のため大木が生えづらいこと、野焼きによる牧畜や防災に役立てていることなどが理由になっているようだ。

別府では、鉄輪(かんなわ)温泉の界隈で、再び日帰り温泉に入湯した。温泉好きの同行者がいるので、お付き合いだ。温泉の後、東九州高速自動車道を利用して宿泊地の北浦に向かった。

北浦は、宮崎県延岡市の北部にある漁港である。宿泊したのは、海と山に囲まれた少し高台にある小さな旅館であった。客室からは、北浦の海岸が一望できた。食事は、海鮮宿なので、地元の漁師から直接買い付けた鮮度の高い魚を堪能できた。また、家族ぐるみで対応に、好感をもてた。

三日目は、青島か、鵜戸神宮を参拝して帰るということにした。宮崎県は意外と南北に長く、北浦から高速で行っても時間がかかることが分かった。そこで、近い方の青島に向かうことにした。青島では、鬼の洗濯板の奇形を観賞し、青島神社を参拝した。帰りは、通りの店で買ったマンゴーを立ち食いし、宮崎空港に向かった。

今回はほとんど予備知識なしの旅行であったが、無事に帰って来ることができてよかった。元気で旅行できることが大切だと思う。

音楽再生考

昨今、アナログオーディオが復活し、人気があるようだ。アナログといえば、音源がレコード盤やテープということになるが、スクラッチやテープヒスなどノイズがあり、音質的に不利なものが、なんで今になって流行っているのだろうか。アナログ音源は、音の波形そのものを記録するため、表現に温かみがあり、自然で滑らかだと云われている。また、レコードに針を落とす作業過程の快感であったり、ノイズそのものも聴くことの対象だったりするなど、高音質なデジタル音源に比べて、心地よく感じる人が多いのかもしれない。楽しめるかどうかの評価基準はそれぞれの人によって異なる。

昔からオーディオ・ファンは多い。好きな音楽のジャンルは人それぞれであるが、音楽を高音質で聴きたいと思っている人は多いだろう。しかし、オーディオ・ファンの大半は男性でないかと思っている。突き詰めて考えたことはないが、男性は、メカニックなことを操作したり、揃えたりするのが好きな人が多いからではないだろうか。家族を含めた周囲の女性から、おおよそ推測できる。スマホのスピーカーから直接音を出し、それを楽しんでいる人も多い。オーディオへの志向は、音楽を観賞することの好き嫌いや、好みのジャンルの違いなどとは、別次元のもののように思える。

自分もオーディオには興味があったが、高価な機器を購入するほどマニアックではない。というより、オーディオに没頭する時間的や経済的な余裕はなかったと言った方がいい。それでも、ビデオデッキがＶＨＳだった頃から、ＴＶで放映される音楽番組などをいい音で聴ききたいと思っていた。ＶＨＳはテープ幅が広いため、ＴＶの音をカセットテープなどで録音するより高音質であることが体験上分かっていた。

ハイビジョンＴＶが普及し始めた頃、ＡＶアンプを購入して、２．１チャンネルのスピーカーをセットし、ＴＶの音を聞いてみた。この時点でビデオデッキはＨＤＤになっていたが、一応、ＴＶと録画したビデオデッキの音を高音質化することができた。

次は、ＰＣの音源をＡＶアンプに繋げて、スピーカーセットに音を出すことが課題となった。その頃はすでに、ｉＰｏｄやＳｏｎｙのウォークマンで、音楽をファイルで聴ける時代でもあった。ＰＣとＡＶアンプを単にＲＣＡ端子オーディオケーブル（ピンプラグ）を繋げただけでは、いい音が出せない。そこで、高音質を実現するためにCREATIVE社のSound Blasterというオーディオインターフェイスを購入した。この装置から、ＰＣへはＵＳＢ接続、ＡＶアンプへは角形光デジタルケーブルをそれぞれ接続して、スピーカーセットに音を出した。これで、ＰＣからの高音質出力も完成した。今

ならＤＡＣ（オーディオインターフェイスの音声入力などの機能を省いたもの）を利用すればいいだけだが、当時は何の知識もなく、ＤＡＣが存在していたのかもわからなかった。現在では、ワイヤレスイヤホンにもＤＡＣが付属されている状況だ。ちなみに、音楽制作や録音の機能を持つオーディオインターフェイスも、高性能なＤＡＣとして利用できる。

その後、音楽制作に取り組むことになったが、ＰＣを利用した一連のセット方法は、前述した方法と基本的に同じである。ただ音楽制作には、オーディオインターフェイスの他に、スピーカーやマイクが必要だ。音楽制作では通常、モニタースピーカーと呼ばれるアンプ内蔵のアクティブスピーカーが使用される。一般のオーディオで使用されるのはパッシブタイプのスピーカーが多いが、それらはアンプが必要だ。モニタースピーカーは、基本性能として解像度の高さを求められるが、一般のオーディオでは、高音質な音楽鑑賞に適した味付け（ニュアンス）が求められる。ただ、モニタースピーカーは、低価格でも高性能のものが多く、音楽鑑賞用としても選択肢の一つになると思う。

現在では、アナログオーディオを含めたコアなオーディオ・ファンがいる一方で、スマホの普及で Bluetooth を使用して音楽を楽しんでいる人が著しく増えている。Bluetooth であれば、イヤホンでも、スピーカーでもワイヤレスで利用できる。カーオーディオでも、いつのまにか Bluetooth 利用が当たり前になっている。

ワイヤレスイヤホンは、低価格なものから高価格でハイスペックのものまで各種の機種が販売されている。安くても音質が良く、高機能、高クオリティの機種を幅広く選択できる。ワイヤレスイヤホンで聴く音は、スピーカーとは別次元ではあるが、一般に解像度は高く、手軽さと使い勝手の良さが優れている。ワイヤレスイヤホンを求めるユーザーは選択肢が多く、選ぶのに困ってしまうが、ネット記事などを参考に予算に合った音質の良さ

そうなものを選べば、自分の好みに合った機種がきっと見つかると思う。

自分の場合、散歩のときには、Apple Music をワイヤレスイヤホンで音楽を聴いている。現在使用している機種は、EarFun Air Pro4 と EarFun Air Pro3 である。Pro4 の方が上位機種で新しく、少しだけ値段が高く解像度が高いが、音質は、低音が豊かな Pro3 の方が好みだ。いずれにしても、以前使用していた機種より、格段に音は良くなっている。とくに Apple Music のハイレゾロスレスで録音された曲を聴くと、音の良さを実感できる。

音楽を観賞するとき、ライブを含めてどんな音質で聴くかは非常に大切なことだとだと思うが、それと同じくらいにどんなジャンルの音楽を聴くかも重要だと思う。

最後に、近頃散歩でよく聴いている日本の好きな女性アーティストを、少し古びていて申し訳ないが、いくつか上げておきたい。中島みゆきと松任谷由美はメジャーなアーティストなので除いている。

宇多田ヒカル／坂井泉水／中森明菜／研ナオコ／安室奈美恵／BENI／JUJU／倉木麻衣／絢香／ADO

ブーゲンビリア（石垣島 2025.11）

凡愚の戯言　二〇二五冬

畑中康郎

●時事問題

石破茂の人生とは何か

自民党総裁に立候補すること五回。落選を続けていた石破氏は、昨年秋五回目の挑戦でやっと総裁になれた。高市早苗候補と争った末、前首相・岸田文雄氏そして元首相・菅義偉氏の支援を受けて総裁になったのだ。岸田氏は決選投票の際に自民党員を次のように説得した。「もしも高市氏を総裁にすれば中国と親交の厚い公明党が自民から離れてしまう。すると、公明党の選挙協力に頼っている自民党は今後選挙で大変な苦労を背負いこむ、場合によっては落選の憂き目にあうことになるが、それでいいのか」。これで多くの自民党員は怯んだ。もともと国家の行く末より自己の保身を優先する議員たちは石破氏への投票に傾いた。決選投票前は一位だった高市氏が僅差で石破氏に敗れた。議員は選挙が怖い。選挙に勝てばいいと思う議員ばかりで、政治の世界で権力を保持したい、ふんぞり返って世間を渡りたい、そういう人間が多すぎる。信念がなさすぎるのだ。加えて二世三世議員たちは、先代からの地盤と看板を守ることに汲々として何ら考えることなく目の前のエサに飛びつく。

石破茂も全く同じで、自分のヴィジョンとか他に譲れない確固たる信念を何ら持ち合わせていない。そんな人間が昨秋の総裁選を勝ち抜いてしまったから始末が悪い。自民党総裁は現状においてそのまま日本国首相に就任することを意味する。しかし彼はこのことの意味をまったく理解していない。首相たる者は単に権力の座に就くだけではもちろんダメだ。会社の社長になるのとはまったく意味が違う。日本に住む一億二千万人以上の国民の生命・財産を守る義務を負うのである。首相になる以上、まず日本をどんな国にしたいのかというヴィジョンがなければならない。そしてそれを達成するための信念や勇気、胆力、そして知力がなければならない。そうでなければ首相の重責を果た

せない。前述したように石破氏はそうした資質がない。

どうしてそういう人間になったのか。石破氏自身が首相就任前に出版した三〇〇ページを超える大著「保守政治家石破茂」を手掛かりに考えてみる。まさに自分の半生を自分の言葉で語った真実であるからだ。

それによると彼がいかに信念のない他に動かされやすい薄っぺらな人間であったことがよくわかる。彼は元鳥取県知事の石破二朗の息子として生まれた。石破茂にとって過ぎるほど偉大な父親だったらしく、逆らったことがない。逆らうことのできない存在だったのだ。石破二朗氏は建設事務次官から鳥取県知事に当選した人で、官僚としても政治家としても優秀だったことは容易に想像がつく。そういう父親であったからおそらく石破茂氏は議論して勝てると思わなかったに違いない。第一そんな気もない。

学歴から述べよう。高校は慶應義塾高校だ。この学校に入学したとき故郷の鳥取を離れ東京に来た心細さから居心地は良くなかった、と石破氏は告白している。鳥取に帰りたいと言っていた。ところが一学期が終わるころ、すぐに気持ちが変わり望郷の念は雲散霧消した。居心地が良くなったのだ。帰りたかったのは一時の気分だった。この人の場合、気分で考えがすぐに変わる。実に単純だ。おそらく仲のいい友人でもできたのだろう。

大学はそのまま慶應義塾に進学。受験勉強で苦労した形跡はない。一般にこの人の人生は楽な方向に簡単に流れる。悩みや葛藤には始めから解放されている人間のようだ。就職の時だった。鉄道オタクだったことから、当初国鉄を選ぼうとしたらしい。しかし父親に反対された。国鉄がなくなるからだ。民営化が間近のことを父親は知っていた。だから反対した。するといとも簡単に国鉄の就職は放棄した。私に言わせれば、自分の好きなことを親が言ったからという理由で簡単にあきらめるべきではない。自分の一生の問題を簡単に譲るな、と言いたい。次に全日空を選ぼうとした。するとまた父親が反対した。ロッキード事件の影がちらついていたからだ。父親に反対されるとすぐ自分の考えを引っ込める。そこには反対を押し切ってでも前に進むという意気込みが微塵も感じられない。ふつうは葛藤があり、悩みがあり、それを乗り越える苦しみがあるはずだ。これを自立と言う。ところが石破に限ってすべてあ

っさりと父親の意見に従って、何ら自分で決めることがない。決められないのだ。結局、当時の三井銀行に就職した。その理由がまたいい。三井銀行は東大閥と慶應閥があるからだった。慶應卒の石破氏は頭取を目指す気持ちがあったに違いない。いかにも皮相な考えの持ち主ではないか。そこには会社を発展させよう、あるいは自分も仕事を通じて一緒に成長したいという考えは全くない。三井銀行に入ってしばらくすると、今度は政治家になりたいと言い出した。そこで父親に相談するとまたも反対された。おそらく政治家としての資質がないと父親は見抜いていたのだろう。それで銀行員であることに一応は専念する。

ところが父親が比較的若くして亡くなると田中角栄氏が石破茂氏に言った。政治家になるべきだ。田中氏は石破二朗氏にかなりの支援を受けていたようだ。それで恩義に篤い田中氏は、恩返しを考えたのか石破氏を政治家の道に誘ったのだ。何事も他人の言葉に左右されやすい石破氏は、勢いのある田中氏の誘いにいとも簡単に従った。こうして三井銀行を辞めて政治の道を選択するのである。

このように一事が万事である。石破氏は自分の意志で自分の道を選択したことがないように私には思える。行き当たりばったりの生き方なのだ。あるのは絶対的な保身本能。そして権力志向。そこだけは強固だ。とにかく自分が傷つかないように安全圏に置きたがる。

親の七光りと田中角栄氏の影響で比較的順風満帆の政治家人生を送った石破氏は、いくつかの閣僚を経験した。防衛大臣のときだった。イラク前線にＰＫＯ部隊として自衛隊が派遣された。一歩間違えれば死の危険さえある。なにしろ目の前で戦闘が行われているからだ。最近の日本人がまったく経験していない世界だ。

当時の首相小泉純一郎の命令とはいいながら自衛隊員はよくそんなリスクを抱えながらイラクに行ったものだと私は感心する。そうした初めての経験に対し、隊員の士気高揚が是非とも必要となる。そこで前線部隊から士気高揚のためにその時防衛大臣だった石破氏にイラクに視察に来てほしいと要請があった。ところがこの石破氏、三回も出発寸前になってキャンセルした。ドタキャンである。その理由が何とも石破氏らしい。自衛隊トップの自分がもしイラクで死んだら取り返しがつかないことになる。だから自分

はイラクに行けない、と言った。何を言っているのか、私に言わせればいっとき混乱してもそれはすぐに収まる。代わりはいくらでもいるのだ。要するに自分の命が惜しいだけなのだ。

イージス艦あたごと漁船が衝突し二人の漁民が行方不明になる事故が起きた。石破氏が防衛庁長官の時だ。自衛隊が戦争の象徴のようにマスコミから捉えられていた時で、そうした時に起きた事故だから事後の処理はより慎重にしなければならなかったのだが、こともあろうにこの石破氏は事故原因の究明もせずにすぐに漁民宅に謝罪に行った。謝罪とは自衛隊側が悪いと表明することを意味する。そんなこともわからなかったのか。お悔みは当然だが、謝罪はNGだ。結局、事故原因は漁船側にあった。さらに石破氏は自衛隊幹部に原因究明を独自に調査するよう命じている。海難侵犯事故だから管轄は海上保安庁になる。それで問題になった。何を自衛隊は勝手なことをするんだ、との非難を各方面から浴びた。するとどうだ、このとき石破氏は自分が命じたにもかかわらず自衛隊幹部が勝手に動いたと逃げたのだ。これには幹部の人たちも唖然とした。とにかく石破氏は自分を安全圏に置くことの名人だ。自分では責任を絶対に取らない。そういう人間なのである。自衛隊員の心中はこんな人間にトップでいてほしくない思いでいっぱいだったに違いない。

石破茂という人間のいい加減さ無責任さはこの例に収まり切れない。他にも枚挙にいとまがないがこれ以上挙げても仕方あるまい。一事が万事だ。今回の選挙三連敗の責任も取ろうとしないことに世間が怒っても仕方ない。そういう人間だからこそ、石破氏に自主的に辞任を期待することは無理。したがって自民党会則六条四項の「両院議員総会は自民党国会議員総数の三分の一で開催できる」ことを運用して総会を開き、自民党総裁を改めて選出する機会を作るべきなのだ。そうしないとズルズルと際限なく総理総裁を続けさせることになってしまう。

亡くなった安倍元首相は「石破茂だけは内閣総理大臣にしてはいけない」と繰り返し語っていたそうだ。

（令和七年七月二五日）

価値の大逆転にどう立ち向かうか

ＮＨＫ朝の連続テレビ小説「あんぱん」を楽しみにみている。漫画家・やなせたかしの生涯を描くドラマだ。その中で主人公の一人「朝田のぶ」という女性のとった行動に私は賛同している。

彼女は戦時中、戦地に赴いた兵士たちの無事と戦勝を祈念して先頭に立ってその行動を賛美していた。日本は正しい、日本の戦争は聖戦なのだ。だから戦争に勝たなければならない。そしてきっと勝つ、と。子供たちに対してもその考え方を日々の授業で教え込んでいた。

しかし、結果はどうであったか。完膚なきまでの敗戦だった。国土は焦土と化し、国民の財産は失われ、また三〇〇万人を超す死者を出した。子どもをはじめ実に多くの国民が飢えに苦しめられることにもなった。戦争は結果として明らかに間違いだったのである。（もっともアメリカによって戦争に引きずり込まれたと考える方が妥当とも言える史実がある―ハルノートだ）

戦後、ここで日本を戦争に誘導し国民を塗炭の苦しみに叩き込んだ、指導者たちに価値の大転換が起こった。すべて正しいと考えて国民を導いていた指導層は完全に間違っていたのである。それは指導層ばかりではない。一般国民の中にも大声で国民を誘導し戦争の渦の中に誘導した人々がいた。実は「朝田のぶ」も同様だった。勝つことばかりに夢中になり敗者の立場になる国あるいは国民のことを考える余裕は一切なかった。

しかし、朝田のぶの人間として優れている点は戦争に加担した過去の言動を徹底的に反省したことだ。彼女は子どもたちに戦争を賛美したことを悔いて、教師の職を潔く辞めたのである。日本のインテリ指導層の中には、日本の敗戦を知るや否やそれまでの言動をいち早く隠蔽し、変わり身を早くして、自分は一切関わらなかったかのように振る舞い、次にはもともと平和を希求してきたかのような態度を取った人間がいたのだ。世論をリードしたマスコミも同様だ。戦時中は戦争を煽り、戦後の平和が求められる時代になると、一転して過去を糾弾するかのような反日のスタンスに変化し、自分たちは国民の絶対の味方であるかのように振る舞う。こういう、とくに新聞（例えば朝日新聞や

毎日新聞)、さらには反日の態度を鮮明にしている日教組に信を置くことが果たして出来るか。出来るはずもない。

朝田のぶは自分に誠実である。過去の言動に忠実である。これが人間本来の取るべき態度ではないのか。だから私は彼女を人間として心から信用する。

ここまで朝の連続テレビ小説の主人公について述べてきた。が、この一文を書き起こした狙いは別にある。それはいまの日本の首相・石破茂氏に言及したいがためだ。この人物、何ら政治家として信用に値する点はない。政治家という前に人間としてまったく信用できない。昨年一二月五日の衆議院予算委員会での答弁には唖然とした。「あなた、自民党総裁選の時に公約したことを何一つ実行していないではないか」という野党の質問に対し、「公約は実行するものでもない。これまでもそのようにやってきた」と嘯いたのである。何をかいわんやである。これでは一定の結論を導くための候補者同士あるいは与野党間でやっている討論の意味がまったくない。石破氏の考えるところがまったくわからない。平気で過去の言動をウヤムヤにして平気でいる感覚。こういう人間を政治家としてどう信じたらいいのか。石破氏という人間は自分自身に対してさえ信じていないのではないか。内面で何かが確立していない。行き当たりばったりで信念というものがない。だから他人の言葉に左右される。世間の評価では石破氏は幹事長の森山裕氏の傀儡だと言われている。何一つ自分で決められないのだ。また決める勇気も度胸もない。これで首相が務まるのか。トランプ関税の折衝も無任所大臣の赤沢氏に丸投げし自分では交渉の場にも出向かず、交渉がうまくいかないと陰で「なめられてたまるか」なんて過激なことを叫ぶ。喧嘩を売っているのか。これでは交渉には決してならない。そんなことは政治の素人でもわかる。ひとつひとつの出来事に感情的に反応する人間なのである。日本政界のいやしくもトップならばもっと戦略的に動けないのか。失望させられることばかりだ。

かつて石破氏が防衛大臣の時、石原慎太郎氏がまだ存命であられた時、東京ＭＸテレビで対談したことがあった。その際、石原氏の「尖閣は危ない状況だ。日本として尖閣に自衛隊を常駐することに言及すべきではないのか」との

質問に対し、石破はこう答えた。「私が首相なら中国が何と言おうと置くことに言及するでしょうな」と強い口調で言った。つまり設置する、と言ったのだ。この過去動画を引用して、日本維新の会の参議院議員・松澤成文氏が「このとおり実行してください」と迫ったが、法律上問題があるとか、中国を刺激したくないとか不測の事態が生じるので危険だとか、できない理由ばかりを挙げて結局何も実行しない。問題を逸らすことばかりで何もしない。万事がこの調子なのである。これが石破氏というウソで固められた政治家人生なのである。

物価対策が参議院選挙の争点になっているが、当初、石破氏自身も減税に傾きかけた。ところが森山幹事長に説得されて減税をやめたのだ。（その内容に驚く。三千万円の闇献金を申告しなかったためこのままでは税務署が動き脱税になるよと森山氏に脅かされたのだ）

減税は勿論、財務省にとってマイナスになるから、もしも石破氏が減税を実行するなら税務調査を実施し、それが即ち石破氏の命取りになる。だから減税を取り下げたのだ。

このように石破氏には信念がまったくない。他人に言われてすぐ同調する。もともとビジョンがないから簡単に同意できる訳だ。悩んだり、苦しんだりすることが一切ない。人は真剣に考えるから苦しむのだ。石破氏には苦しみというものが少しもない。

七月二〇日の参議院選挙の獲得目標は自公で五〇と言っているが、これに達しなくても首相を辞めることはないだろう。石破氏がやりたいことはただこの一点。内閣総理大臣を続けることだ。目的はそれ以外にない。こんな人間に政権の座を委ねた自民党議員に怒りを感じるとともに結局は自民党を政権政党に選んだわれわれ国民に責任があるということになる。

（令和七年七月一六日）

石破茂の真の狙いとは何か

七月二八日に自民党議員懇談会なる会合が開かれた。目的は参議院選挙敗北で議員たちに溜まっている不満のいわばガス抜きだった。執行部の第一の狙いはそこにあって開

催したと思われる。が、到底そんなことで収まるわけがなかった。議員たちは石破茂の首相辞任を期待していた。ここで辞めれば石破の恥ずかしい終焉を見ずに済む、と思っていた。石破の名誉を首の皮一枚守ってやれる。しかし石破はここでも首相続投宣言をした。多分そうなるだろうとは議員たちも内々考えていたとは思う。それまでの続投宣言で大体のところは予想していた。

ふつうなら総選挙で敗北した時点で辞任する。過去総選挙で敗れた首相は例外なくその責任を取って即刻辞任した。それでは、この粘り、首相の座にしがみつく真の狙いは何だろう。ここまで名誉を汚されて、首相を辞めろの大合唱にも耐えて日々闘う、この根底にある狙いとは何か。日本保守党の北村晴男議員によれば「醜い奇妙な生き物」とまで揶揄された、最低の評価。こんな悪評は過去まったくなかったことだ。これをものともせず頑張り通す。この粘りはどこから来るのか。私は石破の頭の中には八月一五日の戦後八〇年の「首相談話」がひとつはあると思う。石破は八月一五日時点において首相でいなければならないのだ。七〇年の首相談話は安倍晋三氏が行った。安倍氏はその談話を有識者一六人の様々な意見を十分にふまえ、さらに閣議決定を経て談話を発表した。談話発表までじつに慎重だった。その中でこう言った。「過去中国や韓国などに対して犯した罪を謙虚に反省するが、いつまでも過去に引きずられては双方の国にとってよりよい未来は訪れない。子や孫たちのためにそろそろ未来に目を転じるようにならなければならない」

私が想像するに石破はこの談話が悔しくてならなかった。もともと超リベラルなこの男、なんとかこの談話を全否定したい。首相を目指した理由のひとつはここにあったと思われる。国民のための政治を実行するヴィジョンなど何もなく、ただ首相の座にしがみつきたかった。石破は安倍氏が嫌いなのだ。それは憎しみに近いかもしれない。安倍氏の第一次政権の時、同じく参議院選挙で大敗したことがあった。その際の石破の安倍氏に対する退陣要求は熾烈だった。語気強く、首相続投など許されるはずもない。あなたの頭はどうかしている、というニュアンスだった。安倍氏が恨みに思わぬはずがない。第一安倍内閣の閣僚だったとき石破にはいくつかの失態があった。しかし閣僚なら

百歩譲って許されるが、絶対に首相にしてはならない、と安倍氏は考えた。その器にあらずと骨の髄まで知ったからだ。石破は自分で蒔いた種ながらこれを恨みに思った。首相就任後に実施した、総選挙の際の公認取り消しなど安倍派つぶしにその思いは顕著に表れている。

恥も外聞もなく首相の座に固執する理由は、ここまでくると安倍氏の七〇年談話の全否定にあることは容易に想像がつく。そしてさらにこれはまったく私の想像だが、中国共産党から命令されているのではないか。つまり談話によって中国、韓国に対して行った戦時中の反省を全面に出して謝罪せよ、というものだ。石破はハニートラップやマネートラップに引っかかっていると推測する。このことで脅迫を受けているのではないか。首相の座に居座るための様々なパフォーマンスはただ中国に対する阿りが最終目的なのではないか。不名誉なハニートラップとマネートラップを全世界に向けて公表されることこそが石破のもっとも警戒しているものではないのか。

しかも石破は首相談話を誰にも相談せず、単独でまったく自分だけの考えで出そうとしている。実に危険だ。これによってふたたび勢いを増すリベラル派の攻撃に日本は晒されることになる。

それを見届ける形になる石破は、したがって、八月一五日を過ぎれば肩の力が抜ける。間違いなく八月末までには辞任する。私はそう考えている。

（令和七年七月三一日）

石原慎太郎氏が引用した短歌

残念なことにすでに亡くなられた石原慎太郎氏は、かつて国会で安倍晋三内閣総理大臣に対し、現在の日本の風潮について、世間がどっぷりと浸かってしまっている、自分さえよければいい、自分や自分たち家族さえ金儲けができ、その金で幸せになればいいといった我欲に満ちた堕落についてどう思うか、とその考えを質したことがあった。

石原氏はその時、すでに九〇歳になっていた、ある戦争未亡人の短歌を引用した。

「かくまでも醜き国になりたれば　棒げし人の　ただに惜しまる」

端的に思いのすべてを表現した素晴らしい短歌だ。自分の夫をはじめ貴重な命を国のために捧げた多くの人々は今の日本が陥っている我欲に満ちた世界をどれほど嘆き残念に思っていることだろうか、という意味であろう。日本という、自分たち国民の生命と財産を守ってくれるよりどころである、この日本という国を愛すことなく、自分たちのことばかりがすべてと考える多くの日本人たちはどういう人たちなのだろうか、ということだ。

石原氏ほどかつての自民党員の中で国を守るために実行動に出た人はいなかったと思う。毎日のように領海侵犯を繰り返して尖閣諸島を乗っ取るために現れる中国海軍に対し、非常な危機感を覚え、都知事だったころ当時私有地だった尖閣の一部を都で買い上げる決定を表明した。立場をなくすと考えたのか、当時民主党政権の野田佳彦首相は急遽国有化することを宣言し、現在尖閣は国の所有物になっている。これに対し中国共産党は大反発をしたことは記憶に新しい。こうした行動を始めとして石原氏は他の自民党政治家には決して真似のできない国を憂える行動をしてきた。今にしてみれば石原氏のような国会議員は今の国会にどれだけいるのだろう。自民党政権を見ればよくわかる。党利党略に終始し、石破をはじめ党幹部は政権の延命ばかりを模索している。そこには国民不在の姿しか見えない。なんと醜いことであろうか。

自民党や公明党の与党をはじめ、野党全部がもっと団結し国を憂い、国難ともいえる日本の貧困化や到るところに存在する国の分断分裂等々に立ち向かっていかなければならない。党利党略に陥っている場合ではない。このままでは国は亡びる。無名無力の私でさえそのように思う。情けないことではないか。

（令和七年八月三日）

石破茂に影響される若い人たち

昨年の総選挙で大敗し、今年六月の都議会議員選挙でも歴史的大敗を食らい、そしてまた今年七月の参議院議員選挙でも大きく党員の数を減らした、その責任者たる自民党の現内閣総理大臣の石破茂はそれらに対し一切の責任を取ろうとしない。こんな人物はかつて歴代の内閣総理大臣で

誰ひとり存在しなかった。

しかもこの男、かつて国政選挙で大負けした民主党の菅直人氏、自民党の安倍晋三氏、近くは麻生太郎氏に対し、「あなたは選挙で負けた。どうして首相を辞めない。どうしてその地位にしがみつくのか。内閣を私物化してはならない」と口汚く罵って退陣を要求した。そのブーメランがいまこの男に強烈な勢いで戻ってきている。にもかかわらず、われ関せず、自分とはまったく関係ないように動いている。恋々としてその地位にしがみついている石破茂という男はウソの塊だ。これまでの政治家人生を見ればよくわかる。権力欲だけは異常なほど旺盛で公約をその場だけにする口先だけの男だ。安倍氏が石破だけは内閣総理大臣にしてはいけないと二〇年前から語っていた。さすがに安倍氏は見抜いていた。石破も安倍氏の自分に対する思いを当然ながら知る過ぎるほど知っていた。だから旧安倍派の議員たちに裏金問題を前面に選挙で公認を出さなかったし、自民党内の保守派、すなわち旧安倍派を追い落とすためにさまざまな画策もした。まさに内閣を私物化しているのは石破自身ではないか。この男は醜い。日本保守党の北村晴男参議院議員が石破を称して「醜い奇妙な生き物」といったが、実に言い得て妙ではないか。早く退陣させないと自民党は自壊する。もっとも時間とともにその時に相応しい政党人を選ぶことで世間は回っているのかもしれない。自民党はついに終わりの時を迎えているのかもしれない。

そして、日本という土壌、文にあって恋々と地位にしがみつくその態度は醜悪以外の何者でもない。私が心配するのはこの醜悪な態度を見ている若い人たちに与える影響だ。過去に主張したことはいまの自分には関係ない、責任を取る必要なんてさらさらない、自分に都合よく世間を渡れればそれでよい、このような考え方がしかも模範となるべき一国のリーダーが日々平気な顔をしてやっている。この厚顔無恥を見てまだ世間の汚さを十分に自覚していない青少年がどんな影響を受けるか。適当に自分に都合よく生きるのが、正しい生き方なのだ、と甚だしい誤解をしてしまったら日本の美しい伝統文化はどこに行ってしまうのだろうか。そのことを危惧する。

石破は日本をよくするために首相になったのではない。自己の野心を満たすためだけに首相になった。政治家にな

った目的は首相になることだった。

（令和七年八月二二日）

国内四都市をアフリカのホームタウン化する愚策

八月二一日、横浜で行われたアフリカ開発会議（通称TICAD）で石破政権は以下の政策実施を表明した。これを知って私は愕然とした。外国人移民政策で大きな失敗を犯した、イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン等ヨーロッパ諸国の二の舞ではないか。いまどれほど移民政策で各国とも苦しんでいるか、どうしてその現状を理解しようとしないのか。犯罪の横行多発、安い賃金で一部の仕事を奪われたことによる国民の生活水準の低下、文化習慣の違いに基づく軋轢や摩擦で国民が苦しんでいること等が石破政権にはわからないのか。実際埼玉県川口市で起きているクルド人問題を見るまでもない。

石破政権は先般の会議で、山形県長井市をタンザニア、また千葉県木更津市をナイジェリア、新潟県三条市をガーナ、愛媛県今治市をモザンビークのホームタウンに指定し、それぞれの政府と調印した。ホームタウンとは何を指しているのか判然としないが、おそらく労働力不足に悩む各都市にアフリカから移民を無制限に入れることではないか。これまでは優秀な頭脳あるいは特殊技能を持つ人々を日本に招き、日本の国力充実に役立つ人材のみを受け入れてきたと思う。ところが今回はそうした人々の他に単なる労働力強化のために受け入れの範囲を広げているらしい。差別発言につながる恐れはあるが、単なる労働力だけを期待する人々の人間性にはどうしても疑問符が付く。

それに木更津市をホームタウンとするナイジェリアは、例えばどういう国か、そこが問題なのだ。石破政権はどこまでそのことを理解していたか。ナイジェリアはアメリカのホワイトハウスが渡航危険として警告を発しているのだ。オバマ政権以降、現地のキリスト教徒が一二万五千人ほど虐殺されている。それにイスラム過激派の「ボコハラム」がテロを日常的に繰り返している。日本の外務省でさえ現地邦人に対し退避勧告を出している。そういう国なのだ。どうしてそういう国と友好関係を結び木更津市に呼び込もうとしたのか。これは木更津市だけの問題では勿論な

い。国内に住めばどこにでも移動する。東京にも横浜にもやってくる。日本全体の問題なのだ。しかもこれほど重大な政策を本家本元の木更津市民は知らされていなかった。政策が明らかになった後、木更津市役所には終日抗議の電話が殺到している。テロの頻発する国から無制限に受け入れたら、どんな異分子が紛れるか知れたものではない。結果、どんな犯罪が日常的に引き起こされるかわかったものではない。

このことは石破茂の極左グローバル政権のやりそうなことを証明している。石破デマゴーグ内閣は単に目先のことだけを判断して各国にいい顔をして人気取りを図る。その結果、どれほど国民が迷惑を被るなんてことは少しも考えない。その程度の頭なのだ。だからどうしても石破を一刻も早く首相の座から引きずり降ろさなければ日本がどんな目にあうか知れたものではない。こんな重大なことを自民党議員たちはわからないのか。国民のための政治なんてものは石破の頭の中に少しもない。石破の政治生命が延びれば延びるほど日本は亡国の道を歩むばかりだ。

いまネットは大炎上している。しかしテレビ・新聞のマスメディアは一切報道しない。この国は本当に危ない状態になっている。数日後、日本保守党の党首で参議院議員の百田尚樹氏がネットで恐ろしいことを言った。石破政権が終わろうとするこの時期にこうした施策を導入する目的としては勿論、金銭のキックバックや利権の確保があるだろうが、究極は日本に対する復讐、俺をここまで苦しめた自民党の内外、つまり政界全体そして国民全体に対し、アフリカからの暴力や不法を導入することで大混乱に落とし込もうとしているというのだ。これは行き過ぎた考えのように私は思う。しかし石破の人間性からまったく考えられないことでもない。これが正直に思うところだ。

（令和七年八月二八日）

結局、ＪＩＣＡは各地域住民の猛烈な抗議でホームタウン構想を九月二六日撤回した。

小泉進次郎について思うこと

ドイツの高名な社会学者マックス・ウェーバーの言葉に従うと、「人間はふつうに考えるほど賢くない」そうだ。

これを小泉進次郎のケースに当てはめてみたい。まずもって私は小泉を無能な政治家と考えている。ある政治評論家によると、彼は俳優であるという。台詞を完全に記憶する能力があり、それを忠実に役柄に合わせその人物になりきることができる。だから根っからバカでもない。つまり周囲は話すべき台詞を小泉に提供し、それをその通り十分理解せずにそのまましゃべることは得意なのだ。しかしそこを外れ、いったん討論という形になると途端に馬脚を露呈する。何を話すべきか急にわからなくなる。当然だろう。ふだんから何も考えていないからだ。信念もなくふだん勉強もしていないから話を突っ込まれるとすぐ立ち往生の状態になる。不勉強の証拠に衆議院議員を一六年やっていて議員立法が皆無。真剣に政治に取り組んでいないから当然だろう。

この程度の頭でトランプやプーチン、習近平と正面から議論ができるのか。それは誰が考えても容易にわかる。官僚の書いた原稿には限界があって、すべてのシチュエーションを想定して台詞を用意することは不可能だ。例えばＧ７の会合で各国首脳が顔を合わせたときどんな場面でフリーディスカッションに移行するか、そのときどんなトピックが出るか、そんなことは予想もつかない。そのときまともに話すこともできないとなればどんな恥をかくか知れたものではない。それは国家の恥と同時に小泉自身の恥ともなる。これが日本国家のトップの首相なのか。日本もレベルがダダ下がりだな、と笑われる。日本国民としてこれは耐えられない。日本人としてはトップの人間が恥をかいてほしくはない。これがふつうの思い。石破はＧ７の欧米の首脳との議論を避けた。その理由は単に怖かったからである。しかし日本より経済レベルが格下の発展途上国の首脳とは臆せずに対話できている。安倍元首相が道を拓いたＮＡＴＯの会議に参加せず、またＧ７に参加した時も欧米の首脳の輪に入ろうともしなかった。欧米への外遊もまったくなかった。勇気がなかったのだ。結果、日本の国益にまったく貢献できなかった。小泉も同じことになるのではないか。しかし能天気な小泉は平気かもしれないが。

前述のとおり小泉は自分の信念なり考えがないから石破同様財務省のいいなりになって相変わらず緊縮財政に走るだろうし、公明党や財界の言いなりになって中国に阿り、

領空領海を侵犯されても何ら毅然たる態度をもって対峙できないだろう。これまでと同様、遺憾であると単に騒ぐだけなのではないか。アメリカに対しても同様だろう。アメリカの方は、そのシンパだから言うなりになるだけだろう。父親の純一郎と同じだ。進次郎自身がＣＳＩＳ（戦略国際問題研究所）という米政権に影響を与える組織の研究員だったことからもアメリカの協力者になると思われる。とすると日本国民の貧困化に対応するよりも大企業優先の政策になりがちだ。物価高対策に目を向け、それを阻止する動きに出ることはまず考えられない。また企業献金に賛同を示していてこれからも裏金、闇献金に染まる状況を作りやすくするだろう。だから石破政権と同じ道を歩む。日本国民にとって最も迷惑なのは本人が政治的無能であることに気づいていないことだ。気づいていたら総裁選に出るなどという暴挙には出ない。時期尚早なのだ。あるいは石破同様に単なる厚顔無恥のレベルとも考えられる。

石破のときに衆議院、都議会選挙、そして参議院と三連敗したが、もしも小泉が首相になれば同じ轍を踏むことになる。自民党はさらに惨敗し党がなくなるかもしれない。にもかかわらず小泉を総裁選に持ち上げる一部の自民党議員の気が知れない。先を見通すことができない無能集団ともいえる。同じ失敗を繰り返そうとしているからだ。マックス・ウェーバーの言う通り、何度も人間は同じ誤りを繰り返すものらしい。人間の頭は思うほど賢くないということだ。

終わりに世間に小泉構文あるいは小泉ポエムと半ば笑われている言葉の一部を紹介してこの稿を終わりたい。かなりの数になるが一部にとどめる。

○このプレゼント、頂きものなんです。

○このエスプレッソ、飲んだらコーヒーの味がした。

○プラスチックって石油から作られているんです。これ意外と知られていないんですよね。

○朝目覚めてみたら、朝だった。

○誠実に答えないなんて不誠実ですよ。

○今日誕生日なんですね。私も誕生日に生まれたんです。

○力をパワーに。

○辞任するとは言ったが、辞任するとは言っていない。

なお、私は決して小泉氏に敵対感情はもっていない。ただ、心配なだけだ。

（令和七年九月一五日）

気の毒な小泉進次郎

小泉進次郎（敬称略）は本当に気の毒だ。神輿は軽くてパアがいい、なんて揶揄されながら自民党の総裁になろうとしている。財務省や親中派議員、そしてアメリカ、中国に利用されようとしていることにまったく気づいていない。これが軽いと言われる所以だ。

この人はとにかく自分の頭で物を考えるタイプではない。総裁選の立候補記者会見も総裁選が始まって以降の討論も他人が書いた原稿通りにしゃべっている。だから想定外と思われる質問にはすれ違いの回答か、無言でやり過ごす。あるいはトンチンカンな回答になる。これを恥と思わないことがすでに異常だ。

京都大学の特別准教授で文芸評論家の浜崎洋介という人がいる。私はこの人の分析力には敬服している。極めて論理的、説明も明快。その浜崎さんは進次郎を弟キャラ、あるいは後輩キャラと説明している。どういうことかというと、他人からどんなに揶揄批判されても少しも悪びれず、何事もなかったかのようにすり寄っていけるというのだ。そしてその相手を立てる。立てられた方は勿論悪い気はしない。ついつい可愛いやつだな、になってしまう。だから進次郎には敵がいない。大変な人望があるのだ。それも半端ではない。彼を悪く言う人がまったくいないのだ。自民党議員、さらには野党の議員にも絶大な人気がある。

どうしてこういうキャラクターが出来上がったのか、浜崎さんは次のように分析する。進次郎は真綿にくるまれたかのように周囲に温かく見守られて幼少時から育った。彼に冷たく接した人間は皆無だった。それによって進次郎は人を恨んだり、敵対したり、そういう感情を抱くことは一切なく、伸び伸びと他人を疑うことなく育ったのだという。大学は関東学院で小学校から大学までエスカレーターだった。関東学院は（言葉は悪いが）もともと偏差値の低い学校で、努力しなくてものんびり過ごせた。いわゆる青春を謳歌できる環境にあった。受験勉強で仲間といっとき

でも敵対する過酷な競争に身をさらしたことがなかった。いつも自分の思うとおりに何の障害もなく楽に進んでこられた。すべてに恵まれていたといっていいだろう。これほど運のいい人間も珍しい。

しかし小泉純一郎の息子にしては関東学院では物足りないということになった。そこで箔をつけるためにアメリカの名門コロンビア大学の大学院に留学することになるのだが、とても彼の実力では無理だった。にもかかわらず入学できた。そのわけは進次郎の父親が純一郎であったことだ。純一郎はそのとき日本の内閣総理大臣、その息子ということで将来は政治家になるだろう。そうであればアメリカにとって利用価値がある。将来国益のために働いてくれるとアメリカのある筋は考えた。こうしてＣＳＩＳ（戦略国際問題研究所）の一員として働き、アメリカの戦力になってもらうことが入学の条件となった。アメリカのために働くよう方向付けさせられ、そして完全に洗脳されたのだった。

また前述のように彼は素直に育っており、他人を疑うことを知らないから自分の味方になってくれる人の言うことには何の疑問も持たずに従う。このことは日本を陰で動かしたい人間にとっては進次郎ほど使いやすい人間はいないことになる。つまり進次郎はいくつかの集団に利用されるために自民党総裁選挙に立候補させられているのである。そしてどうしても総理総裁になってほしい人間なのだ。その辺の事情を進次郎はどこまで認識しているのか、私には疑問だ。仮に首相になれば党首討論や予算委員会等の審議にろくに答えられないし、外交交渉にも始めからボロを出すし、恥をかきまくるのが今から容易にわかる。どうしてそんなことが彼にわからないのか、私は進次郎のために心底気の毒だ、と思わざるを得ない。操りたい集団は勿論まずはアメリカ。アメリカの国益のためにどのように進次郎を利用するかいまから考えている。次に財務省。緊縮財政に一層舵を切るだろう。増税路線だ。親中派にとっても使いやすい。中国が日本を呑み込み易くなるようステルスに仕掛けてくるだろう。進次郎では絶対に気づけない。それほどの頭はないし、ふだんから考えてもいない。日本国をどう守るか端から彼の頭の中にはない。だから小泉進次郎が日本国の首相になったら日本国はますます衰退してい

く。いや、そのまえに自民党は壊滅する。自民党なら壊滅してもいいが、日本国が壊滅しては困る。なんとかして小泉進次郎の勝利を阻止しなければならないのだが、現時点の情勢を分析すると難しいように思える。このことを残念に思うのは私だけでは決してあるまい。

（令和七年一〇月二日）

小泉進次郎の落選

一〇月四日、自民党の総裁選挙が党本部で行われた。選挙前の予想通り、高市早苗と小泉進次郎の決選投票となった。一部では林芳正が二位に食い込む予想もあったが、ほぼ順当と言える結果だった。

ところで私は思う。どうして小泉はここまで強いのか。勿論、彼の弟キャラ・後輩キャラも影響しているだろう。人を立てれば人気は高まる。が、その前に彼の政治家としての資質が内閣総理大臣としての器に相当するか。これを小泉に投票した自民党員に考えてほしかった。彼は日本という国が現在直面している様々な困難や壁を乗り越えるための解決策を持ち、そしてその解決策を実行する能力があるか、そのための勉強をしているか、それらすべてが私には疑問だった。芸能界でＡＫＢ４８という人気グループがあるらしいが、そこでは人気投票が行われ、序列を決めているらしい。断じて異なるのは選挙が人気取りゲームではないことだ。場合によっては国家の運命さえ決定してしまう重要な選択なのだ。それを顔がいいとか、明るいとか、人を和やかにさせるとか、それらだけで決めてほしくない。

それにも関わらず、自民党の議員たちは何のためらいもなく、小泉進次郎に投票する。決選投票で結局は高市がわずかな差で勝利したが、これこそが不可思議なことだった。小泉が首相になったならば日本をどういう方向にミスリードすることになるかすでにはっきりしている。チームで対応するから問題はないと小泉は言うが、そんな甘いものではない。内閣総理大臣の職位を甘く見てもらっては困る。

決選投票は高市が議員票１４９、党員票３６。一方の小泉は議員票１４５、党員票が１１。つまり２９票差だっ

た。党員票でこれだけの差がつくのは党員こそよく高市と小泉の実力差を認識していたと言えるが、議員票ではわずか4の差しかなかった。

この事実をどう考えるか。小泉に投じた145人は一体何を見ていたのか、私にはまったく理解できなかった。多分、小泉につけば何らかのおこぼれがもらえて、党か内閣のいいポストに就けると計算したのだろう。145人は日本国家や自民党のことより自分の小さな利益を優先させただけなのだ。つまらない人間たちだ。しかしまあ、これが人間と言えば言えなくもない。

私は小泉自身も自分が見えていないと思う。兄の小泉孝太郎が選挙結果を見て、正直ほっとしていますと言ったが、その気持ちはよくわかる。もしも進次郎が総理総裁になれば日本国はもとより彼自身の人生を傷つけることになったであろう。私は艱難辛苦して努力を重ね、総理総裁の器に相応しい能力を身につけるのが先決だったのではないかと思う。まだまだ総裁選に立候補するなど、おこがましいと言わざるを得ない。

小泉進次郎も彼に投票した自民党議員も国を導き、守るという自分の立場をよく理解してさらに自分を磨く方がよい。

何はともあれ、高市氏が自民党総裁に当選してよかった。

（令和七年一〇月五日）

高市氏当選の裏事情

一〇月四日、自民党総裁選挙が行われ、大方の予想を覆して高市早苗候補が総裁に当選した。この裏事情を分析する。

この日、第一回目の投票が行われ、五人の候補者のうち過半数の票を得た人がなく高市候補と小泉候補の決選投票に持ち込まれた。ここまでは予想通りの結果だった。そして誰もが決選投票で小泉候補が議員票を多く得て当選するものと考えていた。実際、決選投票に臨んだ際の小泉候補の自信満々な表情がそれを物語っている。

そこでまず第一回目の結果から見ておこう。一位が高市氏で議員票64、党員票119、計183、二位は小泉氏

で議員票８０、党員票が８４、計１６４。以下三位林氏で議員票７２、党員票６２計１３４、四位小林氏が議員票４４、党員票１５計５９、五位茂木氏で議員票３４、党員票１５計４９だった。だから高市氏は党員票で圧倒的に小泉氏を引き離していた。しかし決選投票になれば党員票の比重は極端に減ぜられ、議員票の比重が圧倒的に大きくなる。そのうえ菅元総理や岸田元総理や石破前総理が小泉を支援している（石破の場合は小泉と林の双方を支援していたが）ことがはっきりしており、小泉氏有利は揺るがないところだった。

さて、ここで影響力が薄くなっていたと思われていた麻生元総理が陰で仕掛けた。前日麻生派の議員に党員票でトップを取った候補者に投票するよう指示を出していたのだ。ある意味これは当然と思われる。全国に散らばっている自民党員９１万人こそ党のいわば民意と言っていいものだったからだ。圧倒的に獲得した党員票を決選投票で覆せば、何のために党員票を反映させるために行われたフルスペックによる選挙の意味がないではないか。

さらにこれには伏線がある。一回目投票で麻生氏は小林候補と茂木候補にささやいていた。恰好がつくように麻生派の票を二人にまわすから決選投票になったらその見返りに党員票トップの高市に投票してくれと要請していたのだ。一回目投票で高市が党員票トップとなり決選投票に進むことを事前に予想していたことになる。議員票でメンツを施した小林、茂木陣営は決選投票で高市氏に投票したのだ。一回目投票で林候補が獲得した議員票７２が小泉議員票に加われば単純計算で１５２になり圧倒的に有利となる。これに他陣営の票が多少とも加われば小泉氏の勝利は揺るぎないものとなるはずだった。ところがここでも誤算が生じた。宏池会を牛耳っている岸田氏を面白く思っていなかった、かつての有力者がいたのだ。宏池会の元会長だった元幹事長の古賀誠氏である。古賀氏が林陣営に働きかけた。岸田氏にいつまでも舐められてたまるかという強い怨念だったと思われる。結果、林陣営のいくつかの票が高市陣営に流れ、逆転の構図を作った。岸田文雄は小泉氏の敗北により、従兄の税制調査会長の宮沢洋一氏とともに国民を増税で苦しめてきたが、ついに失脚し我々国民の目の前から消えることになる。正直なところ岸田氏はよほど悔

しかったのだろう、ふつう勝者に祝いの言葉を即座に寄せるものだが、彼は二日間も沈黙した。因みに石破の時は当選直後ＳＮＳに祝辞を投稿している。

政治は政策以上にドロドロした人間関係が影響する。高市氏はその狭間で総裁の座を勝ち取ったのである。これによって麻生氏は副総裁に返り咲き復権を果たした。しかしこんな裏事情はどうでもいい。とにかく日本のために高市総理総裁（総理大臣指名選挙で勝たねばならないが、これは多分達成される）に頑張ってほしい。心からそう願う。

（令和七年一〇月七日）

公明党の連立離脱

二〇二五年一〇月一〇日、公明党は二六年にわたって自民党と続けてきた連立政権から一方的に離脱した。この決定に至る直前に公明党は高市自民党執行部に三つの課題を提起した。①自民党の政治と金のあり方　②歴史認識、靖国神社参拝の問題　③外国人との共生の問題の三つだった。このうち②と③は公明党の納得を得られたようだが、①については政治献金の受け渡し先が本部と県連本部までは いいが、全国八千におよぶ支部にまで広げることは到底認められないということで、これを受けるか否か高市氏と鈴木幹事長に対して即答を求めた。回答の猶予を求めた高市氏に対し公明党はこれを拒否し、その場で連立離脱を申し渡したのだという。

私はこの報に接し、当初は意外なことだったから少しショックは感じたが、すぐにこれは自民党にとって朗報ではないかと考えた。従来から公明党と自民党はその政策にかなりの違いがあり、これまで自民党の政策に肝心なところで反対の立場をとってきたのが公明党だったからだ。公明党は創価学会が母体となってできた政党で、団体創始者の池田大作氏が強い影響力を保持してきた。池田氏の中国寄りの立場から必然的に公明党は中国共産党の代弁者となった。私に言わせれば、一九九九年にどうしてこんな政党と連立を組んだのか疑問に思わざるを得ない。石原慎太郎氏などは安倍晋三氏に対し「いずれ公明党は自民党の足手まといになる」と言っていた。麻生太郎氏も安保法制の議論の際、専守防衛に強い反対の立場をとった公明党に対し、

あれはガンだと言った。やりたい政策が反対され思うように政策が前に進まなかったのだ。間違いなく中国共産党の言わば出先機関のようなもので、例えば公明党は外国人に参政権を与える法案をそれまで二九回提出している。リベラル民主党の一五回、共産党の一一回に比べても圧倒的に多い。

中国共産党の新疆ウイグル自治区、チベット、さらには香港から自由を奪ったやり方を見てもよくわかる。もしも中国共産党に日本が併呑されたら同じ運命を辿ることになる。公明党がどうしてそんな国の手先になろうとするのか到底私には理解できない。確かに経済面での恩恵はある。しかし自由を奪われて何が恩恵か。少しくらい貧しくなったところで人権や自由を失った、香港になるよりはるかにましだ。第一、日本はそれに代わる方策を考えることができる。脱中国でいい。そこは大した国なのである。

だからそこを考えると、中国共産党の代弁者である公明党から一方的に離脱を言い渡されて高市自民党は実に幸運だった。これまでこちらから言い出せなかった問題だったからだ。これから高市氏は心置きなく自身の掲げる政策を実行していけばいい。

高市氏は公明党の斉藤代表に「もしも総裁が私でなかったならば離脱はあったのでしょうか」と訊いた。これに対し斉藤氏はこう答えた。「いやどなたが総裁になられても同じだったでしょう」。これはウソだ。政治と金の問題は以前からあったし、これについては石破政権の時には一言も触れていない。小泉進次郎が総裁になったなら、なおさら操り人形であるがゆえに一切離脱など考えなかったであろう。ひとえに高市氏が中国共産党に対し従来から強い姿勢を示してきたからにすぎない。

高市氏が総裁に選出された一〇月四日、それから二日後の六日、駐日中国大使の呉江浩氏が国会を訪れ斉藤氏と面会している。そのとき高市政権に対する何らかの指示を出したのであろう。そこから離脱に向けて議論が深まっていったのだ。完全に公明党は中国共産党の代弁者だ。だから繰り返すが、自民党にとって公明党離脱は吉報だったのである。

そして最後に一言、中国共産党は公明党の離脱によって高市氏が総理になれないように画策したつもりだろうが、

高市氏は必ず総理、すなわち首相になる。私は確信する。他に誰がいるというのか。自民党議員もほかの政党の議員も日本のことをもっと真剣に考えるべきだ。

（令和七年一〇月一三日）

玉木雄一郎の誤算

高市氏は自民党総裁に当選した後、野党各党にあいさつ回りをした。国民民主党を訪れた際、党首の玉木氏が「懸案のガソリンの暫定税率廃止と１０３万円の壁廃止についての三党合意を実施いただけますか」と訊いた。高市総裁はたった一言「御意」と答えた。極めて好意的だったし、これで国民民主党の政権入りは間違いないなと私は思った。勿論、これは公明党の連立離脱前のことだったが。このとき玉木氏は迷っていた。連合の芳野友子会長から自民党との連立はまかりならんと釘を刺されていたのだ。もともと優柔不断の玉木氏のことだ。なかなか前に進めなかった。フラフラしているうちに立憲民主党から野党三党（立憲、国民、維新）で連合して新たに政権を作らないかとの誘いを受けた。しかも首班指名には玉木氏の名前を書くと言われたのだ。ここで俄然色気が出てきた。それでも建前上、国民民主と立憲は安保法制とエネルギー対策で決定的な違いがあり、これでは一緒になれないと主張した。当然だろう。国民民主が当時の立憲民主党から離脱したのもこの二つの明確な違いがあったからだ。しかし立憲が国民民主に歩み寄ってくれることは無理と知りつつも色気を出し続けた。もし万一歩み寄ってくれたら立憲の提案に乗って、あわよくば自分が総理になると夢見たのである。それでも無理は残る。仮に野党連合が形成され、政権ができてもこれは烏合の衆であり、もともと目指すところが決定的に違うのだから早晩瓦解することは目に見えている。だから玉木氏をあまり賢くないと私は思った。高市総裁の思惑に沿って政権入りし、まず閣僚を務め、そこで実績を上げ、その後に内閣総理大臣を目指しても遅くなかった。それが待てないということは実際には国民に目を向けていないということだ。政権に入れば多分財務大臣のポストが用意され、比較的楽に懸案事項の解決がなされたのではないか。

余談だが、それでも高市自民党は二つの懸案事項は解決に向けて動くとは思う。

「公明党が離脱したから、我々が連立に合意しても意味がない」と玉木氏は後に主張した。しかしこれは明らかに言い訳だ。国民民主が連立を組めば、首班指名の一回目投票で過半数に届かなくても結局二回目で高市氏が総理に当選する。そうすれば国民民主の政権内の立場は確立する。そしてそれが国民のためにもなる。玉木氏は自分の総理になることを優先して国民を見捨てた格好になったわけだ。さらには維新の会が高市自民党と連立を組む情勢になったことで、あろうことか自民党を離れた公明党と連携を模索すると公言したのだ。玉木氏のこれまでの理念や信念はどこへ行ったのか。記者会見の場で玉木氏がそのように公言したとき、傍らにいた榛葉幹事長はその発言を制するように玉木氏の腕を抱え、別室に連れて行った。榛葉氏が公明党との連携を嫌っていることは明白だった。これでますます玉木氏は男を下げた。私も正直、玉木氏には失望した。国民の利益に直結するガソリン暫定税率や１０３万の壁より自分が総理になることを優先させたのだ。

（令和七年一〇月一八日）

城内実氏と片山さつき氏

一〇月二一日、高市内閣が発足した。四日、自民党総裁に就任して以来、一七日を要したことになる。自民党が衆参ともに少数与党に転落したためだ。ここではそれ以上は述べない。それより城内実氏と片山さつき氏の関係を私なりにやや危惧している。

というのも両者はかつて因縁の関係だったからだ。それは小泉純一郎内閣の時、郵政解散が行われたが、それに関係している。私も何度か記述しているように郵政民営化は全く意味がなかった。米国企業の日本参入を手助けするために実施したようなものだったからだ。城内氏は郵政民営化に疑問を持った。実際に民営化法案は衆議院で可決したが、参議院では否決された。小泉氏はどうしたか、衆議院を解散してこの法案の是非を国民に問うたのである。いわゆる郵政解散である。城内氏は衆議院で可決されたとき、反対し造反議員となった。勇気と決断力のある人といって

いい。激怒した小泉氏は城内氏を除名し、選挙では城内氏の選挙区に当時大蔵省職員だった片山さつき氏を刺客に立てたのだ。片山氏は当選し、城内氏は落選となった。わずか数百票の差だった。城内氏は次の選挙までただの人になったわけだ。しかし次の選挙では逆に片山氏を破り、見事再選を果たした。片山氏は後に参議院に鞍替えし現在に至っている。この過去があって二人に何らかの意趣がないはずがなかろう。ところがこの二人が今回、同じ高市内閣で城内氏が成長戦略担当大臣、片山氏が財務・金融大臣となったわけで政策的に積極財政が肝であり、うまく連携が取れるのか私は危惧している。片山氏はかつて大蔵省にいて緊縮財政に加担する立場だったが、今では積極財政に転向している。だから総裁選挙でも高市氏に応援し、今また内閣に入った。彼女は元主計局主計官までのぼりつめたエリート官僚だっただけに財務省の内情に極めて詳しく、様々な情報を高市氏に提供し内閣の一員として大いに活躍するだろう。そのことはいいとして、やはり城内氏との関係は十分に気を使っていかねばならない。しかし二人とも並外れた知能の人たちなので大丈夫だろう。私の危惧なんて余計なことかもしれない。そして案外、このことは高市総理の仲良くやってくれとの無言のメッセージのようにも思う。

（令和七年一〇月二二日）

ハンス・フォン・ゼークトの言葉

ゼークトはワイマール共和国の元上級大将。幾多の対外戦争で故国を勝利に導いた名将だ。

彼はこう言った。「無能な怠け者はそれでも使い道があるが、無能な働き者は死刑が相当である」。随分と上から目線であるが、それだけの実績を残した偉人であるから目を瞑る。この言葉の意味するところは、人間というのは真に有能と言える人物は数少ない。そして殆どが本質的に怠け者である。無能な怠け者は、無能であるがゆえに自分の力量なり立場をわきまえており、何ら疑問もなく流されるように日々を送っている。上司から言われた命令に対しては極めて従順でその指示内容をそのまま実行する。したがって使い道があるというわけだ。ところが、無能にもかか

わらずいろいろ口を出したり勝手に動いたりすると無用なトラブルになる。こういう人物は国家なり、企業なりの足を引っ張る。この人物は以下のような特徴を持っている。

① そもそも自分が無能であるという自覚がない。自分を客観視できていない。

② というよりも自分は優秀であると錯覚している。

③ 大概において高学歴のものが多い

この特徴に典型的に合致する人物を私は直近で見ている。前首相の石破茂である。どれほど世間から批判を浴び、さっさと辞任して首相の座から去ってくれ、それが国家のためになると言われても自分を理解していないから批判をどこ吹く風と受け流す。その厚顔ぶりは目に余った。テレビ・新聞（特にＴＢＳ、テレビ朝日、ＮＨＫ、朝日、毎日新聞）などのいわゆるオールドメディアと称されるマスコミはそろって左傾向だからちょうど石破に合致しただろう。オールドメディアは彼に比較的好意的だった。そのため、自分は有能であると完全に誤解した。一方、国民の大多数はその顔を見るのもウンザリだとネットで連日喧伝していたのにまったく気にしなかった。自分が有能で正しいことをしていると思っているからどうにもならない。公約の殆どを実行しなかった。物価は高騰し国民が生活に困窮していてもそれは自分が悪いからではないと信じていた。後を継いだ高市首相はその遅れを取り戻すべく連日大車輪で各種政策を実行しようとしている。健康を損ねないかと心配するほどだ。

石破のような人間はたまにいるが、こういう人間が国家を衰退させる。ゼークト大将のまったく言われたとおりだと思った。世界各国、人間という動物は共通して愚かな部分があるといってよいのだろう。

（令和七年一一月一一日）

橋下徹の阿り

一一月七日の高市首相の衆議院予算委員会における答弁で存立危機事態に言及した内容が中国を刺激した。過剰なまでの反応だった。やはり日本にいざというとき台湾への侵攻作戦には加担してほしくないのだ。ではどうしてこんな問題に発展したのか。立憲民主党の岡田克也議員が高市

さんから問題発言を引き出したからだ。そのとき執拗に質問を繰り返し、存立危機事態まで踏み込むよう誘導した。その目的は明白だった。高市内閣の退陣だ。高市内閣に危機意識を持っている中国の味方になって高市さんを引きずり下ろしたかったのだ。というのも岡田の一族がイオンのオーナーであって中国でビジネスを大々的に展開したい。すでに二〇箇所で展開済みであり、今回も湖南省長沙市で東京ドーム五個分の規模のイオンモールを新規開店予定なのだ。そうしたビジネスにとってマイナスとなりかねない高市内閣は早期に潰さねばならない。

この動きに呼応するかのように政治評論家の橋下徹が高市内閣批判を執拗にかつ強烈に繰り返している。その発言の趣旨はこうだ。日本は弱い、中国の軍事力に勝てると思っているのか、そんな状態で喧嘩を吹っ掛けるような言い方をして日本が戦争に巻き込まれたらどう責任を取るのか。

しかし高市首相は日本が中国に単独で立ち向かうなどとは一言たりとも言っていない。ましてや朝日新聞電子版が記事にしたような武力行使などは一切言っていない。発言の裏には万が一にも同盟国アメリカが中国と戦闘状態になった時には日本が存立危機事態に巻き込まれると言っているにすぎない。これまで確かに日本は台湾情勢についての明確な立場表明をしてこなかった。いつもあやふやにして逃げ回っていた。しかしいつまでも態度表明しないで済むはずもない。事態はそこまで切迫してきているからだ。日本がアメリカに加担しないとしたら次に尖閣や沖縄が中国に攻められたときにアメリカは日本を見捨てる。だからこれは逃れられない。これが同盟国というものだ。

しかしそれにもかかわらず橋下徹は高市内閣を責め立てている。橋下は保守だ、と以前の私は思っていた。ところが最近の橋下は反日姿勢が目立つようになり、左派リベラルに転向したとしか思えない。

つい最近、中国のＳＮＳで次の一文が載った。真偽はともかく、日本の政治家あるいは官僚でハニートラップやマネートラップの恩恵にあずかった者の氏名を近々公表する、というものだ。が、私はまず公表はないと思う。公表したなら効力がなくなる。公表せずに脅している方が効果は絶大なのだ。橋下徹はまず間違いなくハニートラップに

引っかかっていると思う。大阪市長のとき、審査基準は満たしていたとはいうものの上海電力という中国資本の会社を大阪に導入した。相手は中国。危険極まりない。電力事業などという都市機能を左右するインフラ事業に中国資本を使うなど政治家としてあり得ない。どうしてそういうことをやったのか、答えは明白。ハニートラップに引っかかっており、それが無言のプレッシャーになっていたのだ。今回の高市発言にしても同様である。習近平の顔色を窺って高市政権の少しでもマイナスイメージになるよう努力している。

私は誤解していた。橋下を損得にとらわれない信念の政治家と思っていたが、実はそうではなかった。あるいはマネートラップにも引っかかっているかもしれない。恐らくそうだろう。そうでなければ何ら間違った発言をしていない高市首相をここまで責めることはないはずだ。橋下にしてもそんなことはとっくに知っている。高市首相は言い訳ではなく反論も中国に伝えている。そして正しいから発言の撤回もない。至極真っ当だ。にもかかわらず橋下徹は執拗だ。そしてもう一言付け加えると橋下は石破政権の時は何ら批判らしい批判をしていない。理由は明白。石破は中国にとって毒にも薬にもならない、取るに足らない存在だったからだ。だからこそ高市首相にはこれからも日本のために頑張ってほしい。くだらない反日勢力に負けないでほしい。

（令和七年一一月二五日）

●歴史上の事実

誰袖の数奇な運命

今年のＮＨＫ大河ドラマにも登場した吉原の遊女・誰袖（たがそで）について、その数奇な運命を辿ってみたい。誰袖は大変な美形だったらしい。何しろ呼び出し花魁だった人だから容易に想像できる。本名は何でどこの生まれで没年はいつかなど一切記録に残っていない。しかし一七八〇年代が彼女の全盛期だったことはわかっている。その時に彼女は狂歌で名を挙げ、ついには呼び出し花魁にまでなった。花魁になるためには何か特技があって、それで客を

呼び寄せる。小唄、三味線、踊りといった諸芸だ。誰袖の場合は狂歌だった。これが江戸で流行したとき、狂歌の名手として客を引き寄せたのだった。

ところで考えてみたい。女郎がどうして江戸に生まれたのか。農民が人口の八割の時代、農家は少しでも労働力を必要としたからどの家でも子沢山だった。しかしこの状態で、もしも天変地異あるいは天候不順などで飢饉が起きればどうなるか。食い扶持を減らすために長男以外の男は家から追い出され、と同時に金に替えるために女子は売られることになる。一役買うのが女衒である。女衒が農家をまわり、片端から娘を買うのである。対価は五両から十両で一両が現代価値で十万円程度だからさほどの金額ではなかった。それでも飢え死によりましなため農民は涙を呑んで娘を売る。売り先は女衒が決める。器量の悪い娘は江戸に四つあった岡場所か、あるいはどこか宿場の飯炊き女（雑用兼女郎）として売られ、器量よしの娘は吉原に行く。吉原では一〇歳以下なら禿（かむろ）となり、一五歳くらいまで姉役の女郎から行儀や諸芸を習う。一五歳になった時、最初の選別が待っている。器量よしで筋がよさそうな者は振袖新造という花魁予備軍にされ、そうでない者は留袖新造という中級以下の女郎の道を歩まされる。留袖となればまさに苦界の道だ。何故なら客一人当たりの稼ぎが少ないので振袖に比べ客を多くとらねばならないからだ。

二七歳くらいになると身売り額の返済も済むので年季明けとなる。その前に金持ちに身請けされればよいが、それはまれでたいていの女郎は年季明けを待たずに病死してしまう。病死となるのは、年季明けまでにほとんどの体力を搾り取られるからだった。女郎の平均寿命は二二歳程度だったという。それもそのはず、妓楼の持ち主は掛けた金を回収できる前の逃亡を恐れ、体力を付けさせないよう運動をさせなかった。女郎たちは一様に「膳ひとつ運べない」くらいにひ弱だったという。まことに気の毒な運命だった。

さて戻って、誰袖のことだ。彼女は大文字屋に売られた。大文字屋は妓楼のうち、格付け最上位の大見世に分類されていた。主人は二代目大文字屋市兵衛で、誰袖にとって幸運だったことは市兵衛が狂歌に入れ込んでいたことだ。誰袖は三味線や踊りは苦手だったが、才があったのだ

ろう狂歌には秀でていた。市兵衛は金をかけて誰袖を育て上げたのである。

誰袖はこんな狂歌を謳った。

「色よりも　香こそあはれと　思ほゆれ　誰が袖ふれし宿の梅ぞも」

市兵衛はこの歌が気に入り、それで彼女の源氏名を誰袖とした。もっとも袖に入れる匂い袋を誰袖といったことから採用したとも言われている。

一七八三年ころには狂歌が江戸で大流行した。狂歌を詠む花魁が大文字屋にいるとの評判から誰袖は大変な人気者になった。彼女に会いたいと多くの男たちが列を作るような有様だった。さらにその年には二三二人の作家による七四八首の狂歌が掲載された万載狂歌集なるもの（千載和歌集の向こうを張ったものか）も発行された。歴史に残ったその歌集には誰袖の狂歌も掲載された。掲載を決定した選者は四方赤良と朱楽菅江の両名であった。

掲載された誰袖の歌が次の狂歌である。

「わすれんと　かねて祈りし　紙入れの　などさらさらに人の恋しき」

この時期が誰袖の全盛期といってよかろう。

だが、彼女の運命を一気に変えてしまう人物が現れる。老中・田沼意次の側近で勘定奉行だった土山宗次郎だ。土山は名門の出ではなかったが、実力でその地位に上り詰めた。なかなかの実力者でロシアの南下政策に対抗する案を幕府に提出するなどの動きも取っていた。一方でその立場を利用して賄賂を不正蓄財しているとの噂も絶えない人間でもあった。この男が誰袖に急速に接近しついには身請けするとまで言い出した。土山は彼女を自分の妻にしようとしたのである。勿論、この申し出を受けたとき大文字屋の市兵衛は反対した。旦那、この女にいくら金をかけたとお思いですか、半端な金では申し出を受けるわけにはいきませんぜ、というわけだ。土山は言った。

「一二〇〇両でどうだ。無論、手続き料まで含めた金額総量だが」

市兵衛には一も二もなかった。あまりの金額の多さに肝を潰したくらいである。この話は江戸中の噂になった。江戸庶民で知らないものはなかった。蔦屋重三郎の盟友で歌人の大田南畝はこの出来事を感動込めて狂歌にしている。

「わが恋は　天水桶の水なれや　屋根より高き　浮名にぞ立つ」

誰袖は狂喜した。これでやっと自由の身になれる。どれほど土山に感謝したことであろうか。どんなに自分の好きな歌を詠んだところで吉原の狭い空間での毎日の不自由さに比べれば、解放される自由はどんなことにも代えがたい。

しかし、この幸せは長くは続かなかった。自由になった二年後、将軍家治が死去し、それに伴って田沼意次が失脚し、世間は一気に自由享楽から緊縮に移行した。田沼に代わって老中になったのが松平定信だったからだ。定信はこれまでの奢侈贅沢を一切否定した。当然賄賂などの不正は絶対に許さなかった。定信の時代空気を謳った有名な狂歌がある。

「白河の　清きに魚の　すみかねて　もとの濁りの　田沼恋しき」

田沼の失脚に連動して土山が逮捕された。一時逃亡したが、すぐに捕縛され、コメ代金五〇〇両着服横領の罪で斬首された。誰袖にも追及の手が伸びた。解放されたいために土山をそそのかしたのであろうという疑いだ。勿論そうではなかった。が、そんなことは無視されて一方的に定信の裁定が下った。あろうことか身請けの事実が否定され、再び吉原に戻されたのだ。誰袖の屈辱は目に見えるようだ。そして以後、誰ひとりとして客がつかなかった。毎日が飼い殺しになったのだ。嫉妬の渦巻く吉原にあって彼女の居場所は花魁の時の個室だったのか、それとも大部屋に置かれたのか定かではない。他の女郎の手前もあって苦しい毎日であったろう。市兵衛は彼女をどのように扱ったのか記録がない。使い物にならなくなった彼女をそのまま解放したのか。しかし解放されても彼女は一文無しだった。それとも何か他のことに利用されたのか不明である。ただ、彼女は思ったことだろう。不自由であってもあのときのまま花魁の身分で人生を終えればよかった、と。

（令和七年八月九日）

四〇年を経過して筆者が初めて知った悲劇

四〇年前の八月一二日、東京発大阪行き日航一二三便が群馬県上野村の御巣鷹山山中に墜落し、乗員乗客五二〇名が命を落とした。有名人もおり、歌手の坂本九氏もその中に含まれていた。遺書を紙切れに残した人もいた。この人は死を目前にした切羽詰まった中で妻に対し、遺される子供の将来を託していた。立派だ。そういう人はマスコミが取り上げ、私も美談として記憶に強く残っている。一方、一度に三人までも愛する娘を失った夫婦が大阪にいた。四〇年が経ったいまになってマスコミが取り上げたのだ。私はこの理不尽を初めて知った。

亡くなったのは田淵陽子さん（二四）、満さん（一九）、純子さん（一四）の三姉妹だ。妹思いの陽子さんはいつもボーナスをもらうと妹たちに旅行のプレゼントをしていた。その時も三人で千葉の浦安にある東京ディズニーランドを訪れていた。さぞ三人で楽しかったことであろう。嬉しそうに微笑む写真が遺品の中から見つかった。

そのころ大阪の自宅では母親が帰宅する娘たちのために夕飯の準備で忙しかった。日航機は東京羽田を午後六時発（実際の離陸は午後六時一〇分）で大阪伊丹空港着は午後七時三〇分ころを予定していた。それに合わせて何日かぶりに夫婦ともども五人の楽しい食事が待っていたはずだった。ところが、午後七時少し前にテレビのニュース番組に日航機がレーダーから消えたとの情報が入った。勿論、娘たちがそれに搭乗しているとは気づいていない。飛行機は沢山飛んでいる。まさか娘たちの搭乗している機体とは決して思っていない。

しかし午後七時三〇分ころだったであろうか搭乗者名簿が発表された。テレビに娘たちの氏名が出たときはあまりの衝撃で言葉にならなかった。夫婦は文字通り目の前が真っ暗になった。これまで一生懸命に気立てのいい優しい娘になるように手塩にかけて育てた。その大切な娘たちの三人が三人ともすべて自分たちの前からいなくなったのだ。いや、そうではない。死亡するなんてあり得ない。絶対どこかで生きているはずだ。まだそう信じていた。

その時、夫の親吾さんは五六歳、妻の輝子さんは娘さん

たちの年齢を考えると夫の親吾さんよりもずっと若かったであろう。したがって、ご夫妻にはまだ何十年かの人生が残されていた。娘たちには幸せな結婚をしてもらい、孫の顔も見たい。そういう夢を描いていたに違いない。だが娘たちが未だ時間どおりに帰宅しないことから、日航機搭乗は間違いなかった。何という理不尽であろうか。神も仏もないと思った。自分たちがどんな悪いことをしたというのか。

もしもこの状況に自分が置かれたら私はどのように対処したであろうか。おそらく何もかも放棄したい気持ちになると思われる。生きていても仕方ないと思うかもしれない。こんな運命に自分たちを陥れた神仏を恨んだかもしれない。

四〇年前に発生したこの墜落事故以来、日本で大きな航空機事故は起きていない。勿論、小規模の事故はあった。しかし五二〇名もの死者が出た事故はない。文字通り空前絶後だった。どうして滅多に起きないそんな事故に自分たちの娘三人が巻き込まれねばならなかったのか。どれほど理不尽を感じ、この世の無常を感じたことであろう。

今年、夫の親吾さんが九六歳でこの世を去った。さぞ無念だったことだろう。そして妻の輝子さんは独り老いたまま残された。しかし夫婦はよくここまで生きたと私は思う。よく頑張った。私などは同じ立場だったら生きる気力を失ってとっくの昔に死んだであろう。夫婦は何を生きがいにしてここまで来たのであろうか。その強さに感服する。人生は理不尽である。神あるいは偉大なる存在は必ずおられると私は確信している。にもかかわらず神は人に時折こういう悪さをされる。何故なのか。どういう目的があるのだろうか。残された、その人の生きざまをじっと見ておられるのだろうか。運命とか宿命とか、そうした関連の書物をかなりの数、私は読んだ。しかしどれほど読んでも未だに理解できていない。

（令和七年八月一六日）

長嶋茂雄夫妻の闇

長嶋茂雄氏が今年の六月三日、この世を去った。肺炎だった。数日が過ぎて葬儀が行われたのだが、私にとって奇

異に思えたことは喪主が次女の三奈さんで、長男の一茂氏ではなかったことだ。

後になって長嶋家の過去に起きた出来事を知って合点が行った。一茂氏は長嶋氏が好きではなかったのだ。彼は母親を心から愛しており、父親にはそれほどの愛は感じていなかったようだ。明確な理由があった。茂雄氏にはかつて愛人がおり、一茂氏はそのことを許せなく思っていたのだ。茂雄氏が六八歳で脳梗塞に倒れた時、その場所が愛人宅だった。通報を受けた一茂氏は恥ずかしい思いに捉われ、世間体もあって一旦茂雄氏を自宅まで運び、そこから病院に搬送させた。そのことが結果的に茂雄氏の病状を悪化させたと思われる。右手の麻痺も呂律の回らない言語症状も病院への搬送が遅れたことが原因だった。搬送が早ければ症状はもっと軽かったに違いない。

妻亜希子さんは茂雄氏の愛人問題が明らかになったことで大変なショックに陥った。ということは亜希子さんが茂雄氏の不倫にそれまで気づいていなかったことになる。

二人の夫婦関係はそれまで必ずしもうまく行っていなかった。私の想像では二人は結婚を急ぎ過ぎて相手の性格や趣味、価値観などを十分に理解していなかったと思う。昭和三九年の東京オリンピックの際にＩＯＣ委員付のコンパニオン五人のうちのひとりに選ばれた亜希子さんに茂雄氏が一目ぼれをした。その時点からオリンピック会場内にいる亜希子さんをずっと追い回していたようなのだ。彼女は出版業界で成功を収めた父親によってエリート教育を受けさせてもらった。アメリカへの留学もあり、英語、フランス語、スペイン語に堪能だった。将来は外交官が夢だったようなのだ。それが茂雄氏の猛烈なアタックを受け、知り合ってわずか四〇日後には結婚の記者会見を行う有様だった。これでは相手を永遠の伴侶に相応しいかどうか、見極める時間がなかったのではないか。

茂雄氏は国民的英雄としての立場から日々多忙を極め、一般人のような安らかな家庭生活など夢のまた夢の状況だった。それは容易に想像できたはずなのだが、考える暇さえ亜希子さんにはなかった。プロ野球巨人のスーパースターの妻という想像もできない生活、すれ違いの生活は彼女に精神的負担を与えることになった。

六八歳で脳梗塞に倒れた茂雄氏、そのとき亜希子さんは

六二歳だった。もともと膠原病という病に苦しんでいた彼女は、ついに別居を決断する。表向きの理由は膠原病の身体が階段のある自宅では足腰に負担が大きいというものだったが、実際には茂雄氏の不倫が原因だった。別居してしばらく経った時、一茂氏夫妻が母親を久しぶりに自宅に招き、食事を共にした。亜希子さんにとっては久しぶりの安息な時間だったであろう。しかし悲劇はその直後に起きた。帰りのタクシーのなかで心不全を発症したのだ。病院にすぐ搬送されたのだが、そのまま帰らぬ人になった。六四歳だった。それまで体調はふつうで亡くなるような重い症状はなかったから、一部には自殺説も流れた。亜希子さんは優しい、潔癖な性格だったに違いない。旧姓西村亜希子さんはふつうの人と結婚し、夢だった外交官を一生の仕事にすれば彼女はまったく違った人生を歩めたはずなのだ。あの時、東京オリンピックで茂雄氏と出会うことがなかったならば彼女は自由で好きな道を歩けたに違いない。運命はどこに暗転の芽を抱えているかわからない。

以来、父親好きだった次女の三奈さんと母親好きの一茂氏は決定的な仲違いをするに至った。これから財産分与でも骨肉の争いも起きかねない状況なのだ。（一茂氏は資産家なのでその心配はないと思われるが、こと金銭問題は別かもしれない）

長嶋茂雄氏についても一言しておかねばならない。先日追悼番組を見た。録画の中で聞き手が「長嶋さん、プロ野球巨人のスーパースターとしての人生は楽しかったですか？」と訊いた。この問いにすぐ返事はなく、しばらく間をおいて「そうですね」と答えた。私はそのやり取りから、茂雄氏自身もスーパースターの役割を果たすのに仮面をかぶりつつ行わねばならなかったことが彼の人生を重いものにしたのではないか。常に人気者でファンを楽しませねばならない、弱気を見せてはならない立場は彼の人生を辛く厳しいものにしたのではないか、と感じた。

最後に付言したい。当然のことながら、長嶋氏の野球界に遺した偉大な功績と私生活とは切り離して考えねばならない。

（令和七年六月一二日）

●読後感

芦沢央氏「神の悪手」について

自分は幼少時から将棋が好きで小学生位まで夢中だった。身の回りにいるほとんどの人たち、すなわち親兄弟、学友、近所の大人たちとの将棋で負けることはなかった。それで結構おだてられた。将来、将棋で飯を食えるかもしれんぞ、と。これは親ばかだった。だが、さすがにその言葉を鵜呑みにしなかった。小学生の子どもでもその世界の厳しさはわかる。将棋で生活することは並みの努力で実現できることではない。

第一、無名の一般人に勝てたところでなにほどのこともなかった。やはり結局よかった。もし奨励会の組織にでも入り、真剣に取り組んでいたら恐らく自分の人生が地獄になったであろう。藤井聡太六冠のような人物は極めて稀で、多くの人々は奨励会にさえも入れないし、そこで四段に昇格することも困難。万一奨励会で四段に昇段したとしてもプロで一人前になることはさらに難しい。

奨励会とは棋士の養成機関だ。小学生将棋名人戦や中学生将棋王将戦などで優勝した全国各地の「天才将棋少年」たちが入会してくる。しかし最終的にプロになれるのは、その中で半年に二人しかいない。そして満二六歳の時点で三段リーグ終了までにプロにならなければ強制的に退会を命じられる。

ただし例外がある。二六歳を超えてもリーグ戦の勝ち越しを続けている限り、在籍を延長できるのだ。芦沢氏の描いた「神の悪手」に登場する村尾康生はその条件を辛うじて満たしていた。彼は二九歳になっていよいよ四段に昇格するための最後のチャンスを迎えていた。

退会を強いられると、かなり悲惨である。奨励会のメンバーは殆ど将棋しかやってきていない。だから彼らの殆どは学歴がない。村尾もそうだった。中学を卒業して将棋の世界に飛び込んだ。したがって就職経験もない、中にはアルバイトさえ経験していない者もいる。奨励会を放り出された時、この先どう生きたらいいのかその術を持っていない。

幼少時、なまじ将棋が強くて負けたことがないことで周囲から将棋の才能がある、将来日本の将棋界を背負う人材だ、などとおだてられ、本人も自分は十分将棋で身を立てられると錯覚したときに悲劇が始まる。

つまり奨励会にいる多くの者は二六歳まで将棋以外何も知らないのだ。才能がないと悟った者、あるいは才能を開花するに至らなかった者は、将棋を早く見切ることが大切だ。これが人生の分かれ道であろう。しかしこの見切りが意外と難しい。これまで寝食を忘れて打ち込んできた将棋だからこそ決別することは、打ち込んできた熱量によっていよいよ不可能となる。

村尾康生の場合も同様だった。アパートの家賃を滞納しガス、水道、電気も止められた。親兄弟はあきれ、とうとう彼を見捨てた。そしてついには大家からアパートを追い出され、今はマンスリーマンションの狭い一室でかろうじて逼塞している有様だ。だから、今回の四段昇格の機会を最後と捉えどうしても勝たねばならなかった。彼は二戦を残して一三勝三敗、暫定二位で、もうひとりの棋士・山縣と並んでいる。もう少しだった。出来れば山縣と二人このまま四段になりたい。だから、仮に次の対戦で暫定一位のライバルの宮内が敗れ、さらに最終戦で自分が宮内に勝てば四段昇格が近づく。

宮内は天才といえるだろう。一一歳で将棋を始め、中学高校ではサッカーを楽しみ、奨励会に入ったのは一五歳の時だった。入会後わずか二年という最短記録で三段リーグに駆け上った。まだ一七歳なのだ。今回四段昇格を逃したとしても時間はまだたっぷりと残されている。自分とはまるで違う。

一方、翌日宮内と対戦する岩城啓一は一三歳で奨励会に入った。以後四年半をかけて三段まで昇段したが、それからがよくなかった。八期四年が過ぎても四段へ昇段できなかった。九期目の今期もすでに昇段の可能性はなかった。だから明日宮内に勝っても負けても大した影響はない。その岩城が、突然、村尾から自宅マンスリーマンションに呼び出された。驚いたのは岩城だった。こんなことは当然初めてだった。

村尾は岩城に「どうしても宮内に勝ってほしい。そうでないと困る、そうでないと自分は終わる」と言った。それ

から村尾は秘策を書いた紙切れを岩城に渡した。「このとおりに打てば何とかなる」と言うのだ。そこには宮内との対局の予想手順が書かれていた。これまでに宮内が棋譜に残した多くの対局を徹底的に研究したのだと言う。宮内は必ずこう打ってくる。そうしたらこう打つ。そうすれば宮内はこう返すだろう。綿密な流れが書かれている。行き着くところは結局岩城の勝利となっていた。岩城は思った。冗談じゃない。どうして村尾の言うとおりに打たねばならない？　内心悔しいものを感じたが、とりあえず勝てると言うのなら何でもいいと納得し、その紙をもらって帰宅した。そしてすべての手順を細大漏らさず記憶した。

岩城はここまで四段にこだわる村尾の鬼気せまる顔に恐怖を感じた。何がなんでも勝ちたい。他人の力を利用してでも勝ちたい。彼の人生はまさしく将棋と共にあったという証拠だった。将棋から離れたら村尾には何も残らない。だから当然だった。自分はそこまで徹底できるか？　自分は将棋を甘く見ていたのかもしれない。三段を四年経験してもまだ四段になれない。下手をすると村尾のようになってしまうかもしれない。寒気が岩城を襲った。

翌日、岩城は恐る恐る村尾の考えたとおりの手順で駒を進めた。驚くべきことに宮内は村尾の考えたとおりに駒を打ってきた。つまり宮内は村尾の手のひらの上にあったということだ。それだけ村尾は凄いということだった。こんなことって現実にあるのだろうか。そして最後は本当に天才・宮内に勝ったのだ。これで村尾はついに一歩四段に近づいた。

岩城が宮内に勝利を収めた、その日の午後村尾は対局を予定していた。が、開始時間になっても村尾は会場に現れなかった。こんなことは初めてだった。このままでは不戦敗になる。あり得なかった。不戦敗になればこれまでのすべての努力が水泡に帰してしまう。きっと何かが起きたのだ。奨励会は温情から住所録をもとに村尾の家を訪ねた。しかし大家は、「最近引っ越しましたよ。家賃滞納でね、転居先は聞いていません」と言った。奨励会は村尾のためにもどうしても三段リーグでの対局をさせたかった。彼の苦労を十分すぎるほど知っていたからだ。

奨励会事務局はその後も懸命に村尾の転居先を探した。村尾の負けは確定していたが、その行方を捜した。そして

一週間を要してたどり着いたのが例のマンションだった。管理人の了解を得て部屋に入った事務局の人は驚いた。村尾が床に倒れており、すでに絶命していたのだ。司法解剖が行われた。すると脳挫傷が起きており脳内に血液が溢れていたことが致命傷と分かった。もっと早くに発見されていれば命は助かったかもしれない。脳挫傷は室内で転倒し後頭部を激しく打ち据えたことが原因だった。酒の一升瓶が近くに落ちており、血糊があった。あっけない死だった。

村尾の人生とは一体何だったのか、それはわからない。それでも大好きな将棋に打ち込めたから幸せだったのではないか。村尾とともに暫定二位だった山縣が、天才・宮内と共に四段に昇格した。

人生は実に様々である。が、集中し燃焼し尽くした村尾のような人生も案外悪くはないな、というのが筆者の正直な感想だった。

＊筆者の判断で一部ストーリーを変更しました。興味のある方は原文をお読みください。

倉田百三氏「出家とその弟子」について

これから書く場面は倉田百三氏の大正五年の著作「出家とその弟子」の一節である。したがってこれが事実であったかどうか、甚だ疑問である。何故ならこんな小さな出来事が歴史に残るはずがないからである。多分、倉田氏が親鸞上人の全人格を咀嚼したうえで、上人ならばこうした場面ではかく行動したであろうとの想像の下に書いたと思われる。私の親鸞上人に関する知識は間違いなく乏しい。しかし倉田氏の描写は有り得た事実と確信する。

ある冬の雪が降る寒い深夜のことだった。親鸞上人とその弟子、慈円と良寛の三人は托鉢行脚の途中、峠の山道で道に迷い難儀をしていた。寒さに震えながらいまにもその命の灯が消えようとしていたのである。すると神仏の恩寵なのか、前方に小屋よりは多少大きいがみすぼらしい家が集落を離れてポツンと一軒建っているのが見えた。三人は歓喜し、良寛が家の戸口を叩き一晩の休息を願い出た。出

て来たのは、佐兵衛という元武士の妻でお兼という女だった。佐兵衛は獣の狩人として生計を立てている。お兼は心優しい善良な人で、佐兵衛に逆らえないようだった。彼女は佐兵衛の心がいまやねじ曲がってしまい他人に冷酷に振る舞うところが心配だった。お兼なら是非もなく家の中に三人を引き入れたであろうが、佐兵衛は拒否した。お兼と一緒になったころの佐兵衛は善良温厚な人であったが、世間の荒波に晒され、何回も他人と諍いを繰り返し、また騙されたりするうちに他人が信じられなくなっていた。いまも彼は土地の人々との関係が上手くいっていなかった。お兼はそんな佐兵衛を見て、このままでは人間がだめになってしまうのではないかと心を痛めていた。

「だめだ、だめだ。人を泊めることのできる余裕などない」

佐兵衛は良寛に冷たく言い放った。この言葉が良寛の心に刺さった。

「この寒空ではわれわれ三人はいまにも凍死してしまう。あんたには人としての情けも優しさもないのか」

良寛は一歩前に出て抗議しようとした。が、親鸞上人はこれを制した。

「良寛殿、仕方のないことなのですよ。人はみな己の信ずるところに従って生きているのです。われわれはこの方の言われることに従うしかないのですよ」

「ですが、お師匠さま。われわれは外にいたら凍死するしかありません」

良寛は我慢できなくなっていた。

「あんたは鬼か、われわれを殺す気か」

そう言うと佐兵衛につかみかかろうとした。親鸞上人は良寛の袖をつかみ、さらに制した。ところが、佐兵衛は良寛ではなく、あろうことか親鸞上人を突き飛ばしたのだ。上人は尻もちをついた。良寛は激高した。しかし上人は静かに立ち上がり戸を開けて外に出て行った。良寛も慈円も黙って後に続くしかなかった。夫婦の一〇歳くらいの息子は泣きじゃくっていた。これがのちの唯円であり、親鸞上人に弟子入りする人物となる。その唯円が後に親鸞の言葉としてまとめた書物が、あの「歎異抄」である。

三人が出て行き、残された夫婦は息子を真ん中に挟み床に入った。しばらくして寝静まったが、佐兵衛はどうも落

ち着かない。心が騒いでどうにもならないのである。どうしてなのか考えた。すぐに心がたどり着いたのは、自分が人として間違ったのではないかという心のわだかまりだった。起き上がった佐兵衛はお兼に命じた。

「二人して、あの三人を捜そう。そして家に入ってもらうんだ」

幸い三人はさほど遠くないところにいて、雪降る土の上で横になっていた。その体に雪が少し積もっている。見つけたのはお兼だった。

「お坊様、申し訳ございませんでした。どうぞ、戻っていただいて宅の中にお入りいただきとうございます」。

親鸞上人は心からありがたいと思った。神仏のお導きと感謝した。

「ありがとうございます。それでは有難く申し出をお受けいたします」

佐兵衛は僧というものを馬鹿にしていた。しかしいま、その存在を見直した。親鸞上人たちの人間性を羨ましいとも思った。それは修行の賜物に違いない。そうとわかれば息子を彼らに託してみたい。家を出ていく前に彼らが修行する京の寺院を聞き出した。いずれそこに息子を向かわせ、出来れば自分も同じ道に入りたいとさえ思った。

三人には感謝しかなかった。実はもう少し遅ければ体が冷えきって、三人は危険な状態だったのだ。三人は家に入り、佐兵衛の薪をくべる暖炉のそばで人心地をついた。

佐兵衛は言った。

「俺は坊主なんてものを一切信じていなかった。言いたいことばかりを言うだけで自分から働こうとしない。いい加減な連中と思っていた。だけどあんたは違う。俺はあとで自分が情けを知らない人間と悟った。でもあんたは一切俺を責めようとしなかった。俺は感動したんだ」

親鸞上人はこれに応えた。

「いやいや、ご自分を責める必要はまったくありません。これも運命なのだと私はそのとき思ったのです。これが神仏の私らに与えた試練であるし、私らはそれに従うしかないのです。だから誰も恨むことではないのです」

三人は翌早朝、温かい粥をいただいた後、雪の降り止んだ中、家を出て行った。佐兵衛の心は晴れ、満ち足りた思

いだった。人は誰しも良心というものを持っている。親鸞上人は図らずも佐兵衛の心を動かしたのだった。

私は決して人を責めない親鸞上人の生き方を佐兵衛と同様に羨ましいと思った。ふつうは出来ることではない。

この小説は全編で三章に分かれており、唯円が京の地で恋に苦しむ様子や上人の思うところと異なる心境に陥った上人の息子・善鸞との確執をそれぞれ他の二章で描いている。

台湾の元総統・李登輝氏は生涯にわたる心に残った三つの小説のひとつとして「出家とその弟子」を挙げている。因みに残りの二編はゲーテの「ファウスト」とダンテの「神曲」とのことだった。

（了）

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に二回発行する等の文芸活動を行う。
・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する者とする。
・会員は、年会費千円を負担すること。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
・作品の長さについては特に規定しないが、一回に掲載できる枚数は、原稿用紙で一〇〇枚以内とする。
・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

熱血の蘭医ポンペ ―第3回―

香取 淳

咸臨丸難航図　鈴藤勇次郎原画（横浜開港資料館所蔵）

六、訓練航海で薩摩に

海軍伝習所の分室ともいえる高島秋帆邸跡で近代医学の講義に明け暮れるポンペであったが、春に九州を一周する航海訓練に誘われた。この訓練を企てたのは、新たに伝習所の総監に就任した木村図書（ずしょ）である。それまでの第一次伝習所では多くの生徒が丸山の遊郭に入り浸るなど、風紀が乱れに乱れていた。しかし、前任の総監永井玄蕃守や長崎奉行所も彼らを別格扱いして、特段の取締りは行っていなかった。

そこで図書は、長崎奉行の岡部長常にも協力を求めて、生徒らの風紀の引き締めに取り掛かる。同時に、狭い宿舎に大勢の生徒を押し込めておくことが悪所通いの一因になっていると考え、伝習所の近くにある空き屋敷を借り上げ、生徒らの住環境の改善にも着手した。さらに長崎周辺の狭い海域に限られていた訓練航海を、他藩の港湾をも含めた広い海域で行えるように工作。生徒の目を広い世界に向けさせると共に、操艦技術の向上を目指した。

この図書の企てに江戸幕府も理解を示し、訓練に咸臨丸を使用することを承認。長崎に近い主な藩も、競うように咸臨丸の入港許可を幕府から取り付けていた。

四月下旬に、咸臨丸は矢田堀景蔵（けいぞう）と勝麟太郎の指揮の下に長崎港を出て、最初の寄港地である平戸に向かった。この練習艦にはカッテンディーケをはじめポンペ、松本良順、ハルデス、トローイエンたちも乗り込んでいる。穏やかな海を滑るように北上した艦は、狭い平戸海峡を通り抜けて、島の北端にある田助湾に錨を投じた。

湾と同名の田助村には、湾の周囲を取り囲むように民家が立ち並び、長崎と同じように素晴らしい景色を織りなしている。上陸したポンペたちは、村の至る所で友情に溢れる熱い歓迎を受けた。村人たちは初めて見る蒸気船に湧き立ち、一行の停泊を少しでも快適なものにしようと心憎いほどの〝おもてなし〟をしてくれる。

平戸に上陸したオランダの士官たちには、是非、行ってみたい所があった。それは今から2世紀半前に、最初に来日したオランダ人が住んだ土地と、そこに建てられた商館跡を訪れることである。

ポンペたちは陸路を南に下って、目的の地に歩を進めた。道中の至るところで村人たちの歓迎を受けたが、困ったことに野次馬が多くて、一行を困らせた。途中で歩を休めたとき、下士官の一人が若い娘たちに指輪を与えた。するとその娘たちはあられもない格好で一行の後からついてくる。それも胸を露わにして……である。下士官たちがいちばん美しい娘に、もっともきれいな指輪を与えたことがわかると、何人かの娘は大胆にもそばに寄ってきて、白い胸をはだけ、やわらかい手を触らせ、自分こそが一番美しい指輪を貰う権利がある……と無言のうちに訴えようとしたのである。

平戸の娘に限らず、日本人は人前に裸身を晒すことをためらわないし、恥ずかしいとも思わない。長崎の町中でも風呂屋はどこも混浴であり、人々は熱い湯に長い時間をかけて浸かっている。そして風呂上りには、エビのように赤くなった身体を冷ますためか、男はもとより若い女性であっても裸で

街中を歩いている。その習慣も開国により外国人が増えてくると、少しずつ変わってきたが、男女を問わず裸身で公道を歩くことに抵抗がないようである。

小一時間ほど歩いたところで出会った村人に、２００年前にオランダ人が住んだ場所を尋ねてみた。すると、そこは平戸城の近くであるが、いまは何も残っておらず、青草が茂っていると言う。そのような廃墟は次の機会にして、一行は平戸の城下で古い寺院の参拝などをして引き返した。平戸に二日停泊した訓練艦は田助湾を出て、次の寄港地である下関に向かった。

玄界灘を北東に航行した艦が下関海峡に入ると、両岸に点在する長閑（のどか）な町や村が見えてきた。それらの中で一段と目を引くのは小倉と下関の町である。ブリッジから両岸に目を凝らしていたポンペやカッテンディーケたちは、「ここはトルコ北西部にある海峡とよく似ている……」などと話すうちに、訓練艦は下関の港に入った。港内は活況を呈していて、夥しい数の和船が係留されている。

艦から降りた士官たちは、通称〝オランダ館〟と呼ばれている屋敷に案内された。そこは二世紀以上も前から先輩に当たる商館長たちが江戸参府時に泊まった屋敷だという。ポンペが割り振られた部屋に入ると、扉や柱のあちらこちらに先輩たちが刻んだ刀痕とか名前などが見られた。宿の設備はおおむね良好であったものの、畳の上での暮らしは経験したことがない。そこで、艦から寝具や椅子とテーブルなどを運び入れ、コックや召使にも働いて貰わなければならなかった。

屋敷の主や接客の係たちは一行が快適に過ごせるようにと出来る限りのもてなしをしてくれる。朝食の折に、士官の一人が「お茶に牛乳が入っていない」と注意した。すると奥に入った係は数分後に、「ただいま女が絞ったばかりのものです」とコップ一杯の乳を差し出した。如何様にして入手したかものかは解らないが、その心遣いが士官たちにはうれしく思えた。

下関は人口が４万人ほどの町で、ポンペたちは自由に市街を見物して歩くことが出来た。しかし、平戸のときと同様に、

宿から一歩踏み出すと、またたく間に大勢の野次馬に取り囲まれてしまう。そのため、オランダ人だけで外出することは困難であり、役人たちに前後を警護されての外出となった。一行は阿弥陀寺をはじめ、町の神社仏閣を詣でたが、先輩の商館長が一見の価値ありと記している有名な尼寺は廃墟になっていた。市街地から江戸に続く西国街道(旧山陽道)にも足を延ばしたが、道幅は広く、実に立派な道路である。とくに目を引いたのは田園の美しさ、それに街道の見事な松の並木には感嘆するほかはなかった。

散歩の途中で、江戸に向かう肥後藩主 細川斎護(なりもり)の大名行列に出遭った。噂には聞いていたが、大名行列を実際に見るのは初めてのことである。先頭から槍持ち、鉄砲持ち、供回りの侍、刀持ち、旗持ちに上級武士など、その人数は千を超え、行列の長さは延々半マイル(約8百メートル)にも及んでいる。案内の日本人は、「皆様も土下座を……」と言って地に這いつくばったが、ポンペたちは御免こうむり、道端に立ったまま見物。輿(こし)に乗った肥後公は、髪や目の色が違う異人たちに気がついた時、少しばかり驚いた表情を見せたが、ポンペや士官らが黙礼をすると、愛想よくそれに応えた。

下関に二、三日間滞在した一行は、屋敷のベッドやテーブル・椅子などを艦に戻して、下関港を後にする。次の寄港地は鹿児島で、藩主の島津侯から「是非にも……」と前々から要請を受けていた。訓練艦は黒い煙を吐いて四国と九州のあいだを南下、24時間後に佐多岬の沖で右に旋回し、聳え立つ開聞岳の麓にある山川港に投錨した。

この湾は、規模は小さいものの水深は数百メートルもあった。恐らく噴火口に海水が流入して出来たものと思われる。ポンペやオランダの士官たちは艦を降りて、一時間余り湾の周辺を散策した。美しい渓谷に姿かたちが異なる藪陰や小川、さらにこぎれいな農村が点在し、幽遠な景色を織りなしている。ポンペは、これまでに見たこともない光景に深く心を奪われ、あたかもエデンの園にいるかのような気分に陥った。

煙を吐く訓練艦の来航を見て、この地に別荘を持つ島津侯

の家来が本邸に早馬を走らせた。藩主の島津斉彬（なりあきら）は、早速、使者を艦に遣わし、「殿様は皆さまのご来訪を大変喜んでおられます。明日、艦まで出向くとのことです」と伝言。翌朝の九時には、斉彬侯を乗せた船が山川港に到着。カッテンディーケは矢田堀景蔵と勝麟太郎らと相談して、２１発の礼砲を放った。斉彬は藩主であるばかりか、江戸の徳川家に篤姫（あつひめ）を嫁がせた〝将軍の義父〟でもあったからである。

軍服で盛装したオランダの士官たちは甲板に直立して、藩主の斉彬侯とその家来たちを迎えた。その際に、ポンペたちが驚いたのは、藩主もその部下も衣服が信じられないほど質素であったことである。後で知ったが、斉彬侯は日頃から質素倹約を信条として、贅沢を最も忌み嫌ったという。

斉彬侯は艦内を心いくまで視察した後に、船室でオランダの士官たちと食事を共にした。侯の希望は、「貴賓用の特別食ではなく、普段の食事を試食させてくれ」ということなので、いつもの昼食を準備。オランダ士官と共にテーブルを囲んだ斉彬侯は、その食事に大変満足の様子である。

斉彬侯の後ろには重臣たちが控えていて、ポンペらに矢継ぎ早の質問を浴びせかけてくる。中でも、坊主頭の松木弘庵（こうあん）医師は自然科学の理論にも実用面にも長けていて、質疑応答をしていると多くの学問を積んでいることがよく分かった。弘庵はオランダ語の教師兼翻訳者であり、流暢な会話は別として、オランダ語の読み書きは舌を巻くほど堪能かつ正確であった。

斉彬侯は船内の至る所を熱心に見学していたが、夕刻、艦を去る際に「我が居城にも二、三日滞留しては如何か」と一行を招待する。それは願ってもないことなので、実質的な艦長であるカッテンディーケは「喜んでお伺いしましょう」と応えた。

翌朝、山川港を出た艦は、昼過ぎに鹿児島港に到着。その港は規模が大きく、大型船も接岸することができる。湾内には多くの船舶が停泊し、石材製の埠頭には大勢の人々が行き来していた。塁壁に囲まれた街の防備は堅固で、無数の銃眼が見られたし、二、三の堡塁（ほうるい）には１５０ポンド砲が備えられ

ている。オランダの士官たちは小さな田舎町と思っていたが、予想をはるかに超えた大きな町で、人口は５０万人にも及ぶという。

上陸した一行は、出迎えた藩の役人の先導で宿舎に向かった。しかし、夥しい数の野次馬が一行を取り囲み、埠頭から幾らも進まないうちに身動きが取れなくなった。ポンペらがもみくちゃにされていると、妙なものが頭上をかすめてゆく。それは草履（ぞうり）であったり、生きたウナギであったり。日本の野次馬には慣れてきたものの、鹿児島の民衆は役人の指図を無視して暴徒化している。それでもオランダの士官たちは腹を立てず、「これは歓迎の印に違いない」と悠長に構えていた。

翌日は、騒ぎが大きくなり事故などに繋がらないようにと藩はポンペらに外出を控えさせ、一行を小型の船舶に乗せた。その船は、全長１５メートルほどの銅張の木造船で、蒸気機関が装備されている。これは医師の松本弘庵が、オランダ語の書籍に載っていた図面だけを頼りに設計して建造したものであるという。初めての和製蒸気船と言えるが、蒸気機関に欠陥があるため、本来であれば１２馬力は出る筈であるが、ほんの二、三馬力しか出ない〝のろのろ船〟であった。

その和製蒸気船で、役人は一行を「半月砲台」と呼ばれる土盛りの表面を石で固めた砲台に案内。そこには各種各様の大砲が砲架に載っていたが、特に１５０ポンド砲の出来栄えは素晴らしく、日本人が短い間に鋳造（ちゅうぞう）技術を完成させたことにオランダの士官たちは舌を巻いた。

一行は小型船に戻って鹿児島の市街地から離れ、郊外にある広い工場を見学。その工場は藩候が自ら建てた工場で、大仕掛けにいろいろな工業が営まれていた。先ず、目を引いたのは、裏山を流れる小川から引き込んだ用水で回転する夥しい数の水車。この水車を動力源に用いて、ガラス工場（そこでは多種多様なガラスを吹いたり磨き上げたり）、高炉のある鎔鉱炉、これに連絡する鋳造工場、大砲や銃器を製造する特別の部門などがフルに稼働していた。

とりわけポンペが注目をしたのは、実物大の木製蒸気機関を作る工場であった。技術者にその使い道を尋ねると、完

成品を鋳型にして、金属で鋳込むのだと言う。専門の士官ハルデスが製作中の機関を見て色々とアドバイスをしたが、工場の技術者たちは彼の忠告を一言たりとも聞き逃すまいと耳をそばだてる。そして、この工場の目的を問うと、蒸気機関等の試作や実験を何度も繰り返しながら、外国に依存することなく、独力でヨーロッパの科学技術レベルに到達したい……と責任者は目を輝かせた。

自ら案内役を買って出た工場長の家老や医師の松木弘庵からの情報によると、この2千人もの人が働く大工場の建設は、出島の医師ブルックに負うところが大きいという。第一次海軍伝習所に訓練生として派遣された松木弘庵らは、ポンペの前任者であるブルックから最新の科学知識や技術、とりわけ蒸気機関の原理や構造を詳しく学んだ。さらに、近代的な工場建設に必要となる情報や知識も聴取して、それを基本に帰藩後は蘭書だけを頼りにこの大規模な工場を作ったのである。

その一方で、出島におけるブルックの立場は微妙なものになっていた。言うまでもなく、海軍伝習所は幕府が海軍を創設するために幕臣を教育する場であった。その伝習所には他藩の希望者も特別に許されて、松木弘庵らは参加をしていた。前述したように、ブルックは医学には殆ど興味はなく、もっぱら物理や機械学の教育に熱心である。ところが、江戸から来た幕臣たちは〝箔をつけるため長崎にやってきた〟という輩が多く、学習意欲は極めて低かった。軍艦の操舵や大砲の打ち方以外の物事にはまったく興味を示さない。その結果、ブルックの講義に参加するのは、薩摩藩や鍋島藩など、幕臣以外の生徒だけに限られた。集まった他藩の生徒らは熱心に講義を聴き、講師のブルックも生徒たちの熱意につられて日々講義に熱を入れてゆく。

そのようなブルックの取り組みに、隊長のハルデスや商館長であったクルチウスは眉をひそめた。海軍伝習所の主たる目的は、幕臣の海軍教育である。ところが、医師のブルックは他藩の生徒を相手に、科学や機械学の教育に情熱を傾けている。この実態が江戸幕府にまで知れ渡ると、日蘭関係に

悪影響を及ぼし兼ねない。そこで、隊長のハルデスは「他藩の生徒だけを相手にした講義は止めるように」と忠告をした。ところがブルックは、「西洋の近代科学を教えて、日本を早く鎖国から目覚めさせよう」というオランダの国是に自分は最も適ったことをしていると主張する。ハルデスで駄目なら最高責任者のクルチウスから……と注意を繰り返すが、ブルックの信念は固く、揺らぐことはなかった。

かくしてブルックと隊長、商館長との関係は悪化の一途を辿り、ポンペが来日したときには険悪な関係に陥っていた。医師のブルックは、薩摩藩にとっては大恩人であっても、第一次海軍伝習所の内部においては困った存在になっていたのである。ポンペは、来日時にブルックが示した頑なな態度を思い出しながら、目の前の工場をこれほどまでに到達させた功績の大半はブルックにあると思った。そして、一行がここ数日の間に実見したことから、次のような予言ができると考えた。

――この藩は、日本が国運を高めていく源となるものを創出し、自力で技術革新に取り組む名君のもとで、燦然（さんぜん）たる頂に到達することが出来るであろう。さらに開国直後の混乱が収まり、ヨーロッパ人と自由な交流が始まれば、日本のうちで最も強力かつ繁栄した藩になることは間違いないし、その予言はすでに実現しつつある……。

この期待を込めた予言に反して、一行が去った三ヶ月後に、薩摩藩では大きな政変が起こった。藩主の島津斉彬侯がコレラに倒れて急逝してしまうのである。藩侯ひとりに限らず、その妻子までもが後を追って急死したことから、そこには何らかの犯罪が存在したのではないか……、とポンペらは疑念を抱かざるを得なかった。

七、コレラとの戦い

訓練航海から帰って来たポンペには、再び多忙な日々が待っていた。彼が、日本人の患者を直接診察できるようになると、診察を望む者が加速度的に増えてきた。人口６万人の長

崎の民衆だけでなく、九州や日本中から沢山の患者が押し寄せてくる。加えて、遠方の藩からも手紙で依頼が来るので、それらには手紙で返事を書かなければならない。さらに、長崎港に入ってきた外国船の怪我人や病人もポンペに診療を依頼してきた。

中でも目立つのは、六月中旬に寄港したロシアの戦艦アスコルド号のケースである。この戦艦は下田に向かっていたが、乗組員およそ５００人のうちの２５名ほどが体調不良や関節痛を訴えたため病兵は長崎で下船、近くの寺に収容されてポンペの診察を仰いだ。その結果、船乗りに特有な壊血病と診断され、ポンペの適切な治療で回復している。

翌七月に、今度はペリー艦隊の一つであるミシシッピー号がシナから日本にコレラを持ち込んできた。日本におけるコレラの流行は、文政五年の山陰・山陽、畿内における流行以来３６年ぶりである。文政五年のときは、どこから侵入したものか解らなかったが、今回はポンペが侵入・流行を予見した。彼は、上海から届いた新聞で〝シナでコレラ流行〟のニュースを読み、日本におけるコレラの大流行をいち早く予測したのである。

鬱陶（うっとう）しい梅雨空が続くある日、講義を終えたポンペが良順に話しかけた。

「先ごろ、上海でコレラが大流行したという話を新聞で読んだが、早晩、日本にもやってくるだろう。日本ではこれに対処できる用意があるのか？」

良順はその病気の症状―激しい下痢と嘔吐、痙攣（けいれん）等と数日以内の急死―を詳しく聞いて、口を開いた。

「それは日の本では、三日古呂利（ころり）とか霍乱（かくらん）と言われたものでござろう」

その場にたまたま居合わせた通詞の吉雄圭斎が続けた。

「何十年か前に九州から大坂にかけて流行った三日トンコロという疫病があり申す」

「恐らく、それらはコレラ病に違いない。もし、今日明日にでも長崎に侵入してくるようであれば、危険極まりないことになる！」

「ポンペ先生、何か打つ手があり申すのか？」
「松本君、ここで議論をしている場合ではない。講義は一両日中取り止めとし、明日からは君も我家に来てくれ。この病気の治療や流行防止の策を練ろう！」
翌日、松本良順は約束通りに出島のポンペ邸を訪ねた。ポンペは良順を図書室に誘い、独仏英語の医学書を書棚から取り出す。そして、コレラに関連した個所をノートに書き出し、良順にも意見を求めた。しかし、オランダ語に訳された医学書の記述はどれも似通っていて、治療法が曖昧であるばかりか、その根拠も乏しかった。
「この英書に載っているイギリスのウンドルリフの論文だけだね、信用できるのは」
二日目の午後になって、ポンペは〝結論が出た〟という表情を浮かべて良順に言った。
「この本の著者は、英領インドの病院長を長く務めた医師だから、コレラ患者に接する機会が多かったのだろう。病院や病床で観察した様々なことを詳細に書き記している。正直で飾り気のない文章も信用に値するね」
良順は、ポンペの淡々とした言葉に何度も頷いた。いままでヨーロッパの書物であればすべて正しいものと鵜呑みにしてきたが、実際は違うようである。医学書を読む際には、その著者の人となりや経歴をよく吟味したうえで読むこと。一人の医師が世界中の病気を診察し、治療することは不可能なので、先人の説に従わざるを得ないが、ポンペはその際の心得を示唆している……。それに気付いた良順は、改めて師としてのポンペに敬服の念を抱いた。
ポンペの予見はものの見事に的中して、七月に入って間もなく恐ろしいコレラ病は長崎の町に侵入してきた。ポンペは、先日の医学書を参考に、マラリアに効くキニーネと麻薬の阿片を同時に投与、さらに入浴で体を温める治療法を編み出し、医学伝習所に押し寄せてくる患者に試していく。そして、生の魚や野菜などの摂取を禁じるコレラの予防策を明確に示して、長崎奉行所に次のような書状を送り付けた。
――この両３日中に出島及び市中に、激しい下痢と嘔吐を

同時に訴える患者が多発し、昨一二日だけでも３０人もの発病があった。さらにアメリカの蒸気船ミシシッピー号においても類似した腹病が多数発生していることから、右の病気は極めて流行性が高く危険なものと推定される。なお、この病気は他国においても多発しており、隣国のシナではアジア・コレラという腹病が流行し、多くの患者が出ている模様である……。

ポンペが警告したように、この病気は患者数が二、三日のあいだに急増し、医師の手には負えなくなるほど感染力が強かった。また、多量の水様便と嘔吐を特徴とする病状から、ポンペはいち早くこれを世界的に流行している『コレラ』と診断したのである。

一方、通報を受けた長崎奉行の岡部長常もポンペの警告を躊躇なく受け入れ、コレラ対策に取り組んだ。半年前には天然痘を予防する牛種痘の製造や全国への頒布で大成功を収めているので、奉行のポンペに対する信頼は揺るぎないほどに高まっている。長常は、ポンペの警告や忠告に従って、コレラの治療と予防に関する触書（ふれがき）を作成し、長崎市街と領内の代官所に布告をした。触書の中身は、近頃流行っている病気は症状が急で、通常の医療では手遅れになる。大村町の医学伝習所には専門の医師が詰めているので、明日より昼夜を問わず申し出れば、医師が往診に出向く。ただし、病状が軽い場合には、病人が自ら伝習所に出向いて治療を受けること……といったものである。また、ポンペの指示に従って、食べてはならない食品としてイワシ、サバ、タコなどの魚類とカボチャ、キュウリ、ナスなどの野菜類を挙げ、さらに菓子や鳥肉、豚肉などを明示した。そして、医学伝習所の治療を受けて全治した者は後日、その旨を奉行所に届け出るようにとも命じている。

ポンペは、長崎奉行所の迅速な対応に驚嘆したが、それを褒（ほ）めたり驚いたりしている余裕はなかった。医学伝習所には助けを求める病人たちが次々に訪れ、ポンペはその対応にきりきり舞い。６万人の市民の中にあってコレラ病の専門家はポンペただ一人。誰もがみなポンペに助けを求めてくるが、

悲しいことに身体は一つ、一度に2軒以上の患家を往診することは出来ない。しかも、夏の真っ盛りのことである。寒暖計の目盛は体温に近い高さまで上昇し、汗が止むことは一時もなかった。加えて長崎は港のすぐ近くまで山稜が迫っていて、平地はほとんど無いに等しい。急坂や石段が多い町なので馬車は役に立たず、ポンペは馬か輿、あるいは徒歩で往診することになった。

その一方で、医学伝習所にも軽症患者が診察を求めて押し寄せて来る。ポンペは伝習所の敷地の隅に〝仮診療所〟を設けて対応するが、自ら診察をする余裕はまったくなかった。そこで、伝習所の生徒たちを集め、コレラ病の特徴と治療法を丁寧に教え込む。その教えにもとづいて、生徒らは患者の治療に没頭したが、ときには生徒の手に負えない患者も現れる。そのようなケースでは、ポンペが往診の合間に生徒たちの手助けをすることも少なくなかった。

休む間もない過酷な日々を送るうちに、今度は、ポンペ自身がコレラで倒れた。多忙な診療に区切りをつけて自宅に戻り、ベッドで泥のように眠っていた真夜中のことである。腹痛と便意で目が覚め、トイレに駆け込むと、激しい下痢便が続く。ふらつく身体でベッドに戻り、眠ろうとしたものの、すぐにまた便意に駆られてトイレに駆け込む。吐き気も強く、やがて下痢と共に嘔吐も始まった。ポンペはコレラ病に罹ったことを自覚して、キニーネや阿片を服用。ベッドに横たわるが、症状は一向に治まらない。

「このまま一人、異国の地で死んでしまうのか……」

その思いが脳裏をかすめたとき、玄関のドアが開き、人が入ってくる気配がする。いつの間にか夜は明けて、かなり時間が経っていた。

「ポンペ先生、大事ないですか！」

松本良順が声を掛けてくる。その後ろから何人かの生徒たちも声を掛けてきた。

「うむ、夜中の三時頃から下痢が……。どうやらコレラにやられたようだ」

力なく応えるポンペの腕に触れて脈を取りながら、良順は

ほかの弟子たちに指図をした。
「先生の体が冷え切っている。風呂を焚いて、湯船に熱い湯を満たせ」
「ありがとう良順。それから水が欲しい。出来れば湯冷ましの暖かいものを」
掠(かす)れ声のポンペの指示に従い、良順と数人の弟子たちは懸命な治療と看護に心血を注いだ。その甲斐があってか、ポンペの病状は徐々に回復に向かい、重湯や粥が食べられるようになってきた。朦朧としていた意識もしっかりしてきたが、そうなると、今度は自責の念が彼を苦しめる。
――自分の力が最も求められ必要とされるときに、よりによって重病を患い、ベッドから起き上がることすら出来ない。コレラなんぞに蝕まれたこの弱虫、役立たずが！
己の弱さ、不甲斐なさに心まで落ち込んでいた彼の邸宅に多くの人が駆け付けてきた。伝習所の生徒はもとより出島に住むオランダの同胞、奉行所の役人までもが治療や看病、支援に力を貸してくれる。
ポンペは、「相済まぬ」という気持ちに苛(さいな)まれながら、多くの人の援助で快方に向かっていく。そして、ベッドから起き上がり、ついに日常生活を取り戻す日がやってきた。彼はこのときの人々の友情、いや愛情のこもった援助に感激し、これまで日本でやってきたことが決して無駄ではなかった……という感慨をしみじみと味わっている。
ポンペは病魔に倒れてから13日後に起き上がり、再び乞われた患者の家に出向いていく。まだ身体はふらつき、体調は十分でなかったが、馬や輿に乗って診療に向かった。そうこうするうちにポンペの相棒で一番弟子でもある松本良順がコレラに罹ってしまう。激しい下痢と嘔吐に襲われ、良順は喘(あえ)ぎあえぎ師のポンペに往診を頼んだ。今度は元気になったポンペとその弟子たちが良順の寝所に駆け付け、懸命な治療と看護によって彼の命を救った。
ペリー艦隊に属するミシシッピー号が入港した直後に始

まったコレラの流行は凄まじい勢いで拡大し、一ヶ月後には大坂や江戸にまで広がっていく。この病気に罹ると激しい嘔吐、下痢が突然始まり、数日で死に至るため、民衆は頓死を表す「コロリ」と呼んで恐れ戦いた。

人々は僧侶や神主に頼んで加持祈禱や厄払いを行う、あるいは疫病退散のお札を戸口に貼って家に閉じこもる。逆にある者は街頭に出て神輿を担ぎ、鐘や太鼓を打ち鳴らすなどの大騒ぎをして病気を追い払おうとした。しかし、そのような行為が役立つわけはなく、流行が著しい江戸の死者は3～4万人にも及んだ。大量の死者により、〝焼場〟の前には棺桶の行列が出来て、辺りには異臭が充満、阿鼻叫喚地獄の様相を呈した。

畿内や江戸を越えて東北にまで広がった疫病は一向に収まる気配がない。それを聞いたポンペは、自ら行っているコレラ治療の指針を『ポンペ口述』として解説書に著した。これを松本良順らが日本語に翻訳し、幕府の後押しにより日本全国に頒布される。前述のキニーネと阿片の同時服用に温浴で体を温めるやり方である。この解説書は多くの医師の注目を集め、コレラ治療の手本となったが、予期せぬ事態を引き起こす。

江戸の民衆を恐怖に陥れたコレラの流行は大坂でも猛威を振るい、一万人をも超える死者が出た。しかし、コレラについての予備知識も治療経験もない医師たちは為すすべもなく狼狽えた。そこに『ポンペ口述』が頒布されたため、医師たちは競ってキニーネなどの薬を購入する。そのためキニーネは品薄となり、価格も高騰、またたく間に市場から姿を消してしまった。ポンペの治療法を踏襲したくても、薬剤が手に入らない。医師たちは、再びコレラの患者を目の前にしながら、匙を投げるほかはない状況へと追い込まれた。

この惨状を見るに見かねて果敢に立ち向った医師がいた。大坂で適塾を開いていた緒方洪庵である。彼は書斎に引きこもり、コレラに関するヨーロッパの医学書を手当たり次第に読み解き、数日後に『虎狼痢治準』という著書を緊急出版する。そして、薬不足を嘆く近隣の医師たちに無料で配布して、

ポンペの治療法が唯一無二のものではない……と警告を発した。

この出版に異を唱えたのは松本良順である。西洋の最新の医学を貶(けな)すものとして猛烈に緒方洪庵に抗議した。加えて、おなかの中で虎や狼が暴れるような激しい下痢を表す〝虎狼痢〟という表題は医師らしからぬ……という批判も洪庵の弟子たちから持ち上がる。それに対して洪庵は、急な出版のために説明不足があった旨を率直に詫び、自著の改訂に当たった。その中身を概説すると、コレラには3つ以上の病期があり、夫々の病期によって治療法や薬剤が異なってくる。冷えた体を暖めたり水分を補給したりする病期とそうではない時期、さらに薬剤も制吐薬や下痢止め、痙攣の薬などがあり、たとえキニーネが手に入らなくても治療法は幾つもあることを説いた。

洪庵は自著の中でポンペの治療法も病期によっては有効であることを示しており、決してポンペを軽視したわけではない。後年、適塾の塾頭であった長与専斎(ながよせんさい)が修学後に江戸に行きたいと言った時、洪庵は「江戸で学べるものは何もない、もっと勉強をしたいのであれば長崎のポンペに学ぶべし」と勧めたほど、ポンペを高く評価していたのである。

上海から長崎に侵入したコレラの流行は、七月下旬に下火となり、秋には沈静化をみた。しかし、翌年の夏に、長崎でも再びコレラ流行の兆しが現れた。４０年ものあいだ影を潜めていた〝コロリ〟が2年も続けて流行したことに民衆は動揺し、「外国人が井戸に毒物を投げ込んだのだ」というデマが行き交った。その容貌から一目で外国人と分かるポンペも、民衆の冷たい目に晒される。彼は食事をとる暇(いとま)もなく、身を粉にしてコレラの患者を診ていたが、命を救えない患者が続出することもある。そのような場合には、「医者は患者が治らない方が儲かるから直さない」とか、「奉行所が行っている衛生処置が間違っていて、かえって病気を蔓延させているのだ」と声高に非難する者が現れる。さらに興奮した民衆は、神輿や色々な神を担いで街中を練り歩くが、その行列に出くわす

ことは、外国人にとって危険を伴う。ポンペはそのような場面に2回も出くわしたが、幸いなことに群衆の中に知人(かつて往診して命を助けた患者)がいて、危機的な状況から逃れることが出来た。

一方、ミシシッピー号が長崎にコレラを持ち込む直前に、日米修好通商条約が、次いで蘭露英仏との条約が締結されている(安政5ヵ国条約)。その結果、多くの外国人が一斉に日本に入って来たが、それは奇しくもコレラの大流行と時期が重なった。そのため、「コロリの流行は日本が開国したせいだ」と吹聴する者が後を絶たず、外国人に嫌疑の目が向けられてゆく。さらに、この機に乗じ外国人を排斥しようとする攘夷運動の煽りを受けて、ポンペに対する風当たりは一段と激しさを増していく。

そのような逆境にあっても、ポンペは猛暑に汗を流しながら患者の家を次々に訪ね、その合間に大村町の仮診療所の医師たちを助けた。ところが、その道すがら出会う人々の目は冷たく、治療の甲斐なく患者が死亡した場合には怒声を浴びせられることもある。そんなとき、ポンペは救いようもない孤独と寂寥とに襲われた。

――遠い異国の地にあって、助けてくれる同僚もいなければ相談できる人もいない。そんなとき人間はどんな気持ちに陥るか、誰も分かってはくれないし、理解もできないであろう……。

それでも彼は挫けずに〝ただ自分に課された義務を果たすだけ〟と自らを励まし続ける。当時の集計によると、ポンペと彼の弟子たちが治療したコレラ患者の治療成績と、日本の医師たちの治療成績とのあいだには大きな差があった(死亡率36．8%に対し55．6%)。その卓越した成果を心の拠り所に、ポンペは自ら考え、行っている医療に揺るぎない自信と誇りを持って耐え抜く。

また、得体の知れない未知の疫病が流行った際に、民衆はどのような状況に陥り易いものであるか、ポンペには十分な予備知識があった。ヨーロッパでは原因不明の疫病が流行る度に、それを治せない医師たちは民衆の非難の的にされてき

た。その社会現象はどこの国においても共通であり、とくに大都会において著しくなる。実際に、四半世紀前のパリにおいては、数名の医師たちがセーヌ川に投げ込まれるという暴挙に晒された。そのような文明国における理不尽で常軌を逸した行動に比べれば、日本の民衆の反応の方が、まだ冷静さを失っていないとも言えた。

さらに、医学伝習所の学生たちの熱心な援助もポンペの心の支えになった。前年の流行で治療や予防の手立てを身に着けた学生たちは、身を粉にしてコレラ患者の治療に立ち向かって行く。そして、ポンペから適切な指導を受けながら、精一杯の努力を傾けたのである。

やがて、コレラの患者は減少し終息に向かっていくが、治療に没頭していたポンペは、民衆の感情が一変したことを不思議に思った。外国人を夷狄（いてき）と呼んで憎み蔑（さげす）んでいた人々が、急に穏やかな表情に変わり、道で出会うとポンペに会釈をする人も出てきた。どうやら恐ろしい疫病の終息によって、人々は冷静さを取り戻したようである。そして、以前の興奮や狂乱沙汰を反省し、実にばからしいことをしたものだと悟ったのであろう。

その後も、民衆は日を増すごとにポンペに友愛と感謝のまなざしを向けるようになっていく。それは長崎とその周辺にとどまらず、日本中の識者や医師たちにも広がり、深い情愛と感謝の誠をポンペに示すまでになった。そして、二回にわたる流行が全国的に終息した後には、将軍からポンペに恩賞として日本刀が一振り下賜されることになる。〝身に余る栄誉〟とポンペは喜んで恩賞を拝受したが、他にも多くの大名から高価な品々が贈られてきた。

幕府が、オランダの医師ポンペに恩賞を与えたということは、我が国の医学史において刮目（かつもく）すべき出来事と言える。何故なら、幕府は奥医師として漢方を偏重し、蘭方は原則として認めていなかった。それどころか、嘉永二年（１８４９）以降は、外科と眼科を除いて、蘭学そのものを禁止してきた（蘭方禁止令）。そのような幕府の締め付けに対し、安政五年の春には蘭方医８３名が出資をして〝お玉が池種痘所〟を開設。

次いで、将軍家定が危篤状態に陥った七月には、蘭方医の伊東玄朴が将軍の病床に呼ばれるという椿事が起こった。事業家としても有能な玄朴は、「私一人だけで将軍を診る訳には参りませぬ」と蘭方医の戸塚静海、脚気の治療に長じた青木春岱、遠田澄庵を江戸城に呼び寄せ、一気に4名を奥医師に認めさせた。その後も数名の蘭方医を奥医師に推挙して、漢方医が独占してきた幕府の奥医師に数多くの蘭方医を参入させている。

恐らく、ポンペに与えられた恩賞も、伊東玄朴らの進言に依るものに違いない。ポンペの先輩医師ともいえるシーボルトの弟子であった玄朴らは若いポンペを高く評価していて、玄朴は養子の〝玄伯〟を、林洞海は子息の〝研海〟をポンペの許に留学させているほどである。

八、死体解剖

コレラの大流行により、医学伝習所における講義は暫くのあいだ中断せざるを得なくなった。ポンペは、乞われるままに患者の家を訪問し、伝習所に帰ってくると仮診療所で治療に携わる医師たちを手助けする。食事も満足にとれない日々が続いたが、生徒の中には講義の継続を望む者もいた。そのような生徒に対して、ポンペは「講義や学問より、患者を救うことの方が優先するのだ」と強く言い聞かせる。

暑い夏が過ぎ、コレラの流行が一段落すると、ポンペは再び講義を開始した。開講当初の物理化学や、幕府から要請があった鉱物学・採鉱学の短期講義も終了し、繃帯学（ほうたいがく）に関する教育もほぼ終わりに近づいている。この繃帯学に、学生たちは大変興味を示したが、その理由はポンペが外科医として実際に使っている繃帯を準備したためである。とりわけ、〝糊付き繃帯〟および〝ギブス〟を初めて目にした生徒らは驚愕の表情で講義を聞き、具体的な使い方を熱心に学んだ。さらにポンペは、外科治療に用いる多種多様の繃帯具一式を教壇に並べて、その使途を詳しく伝授してゆく。熱心に聞き入る生徒たちの真剣な表情を見ながら、教師のポンペもまた確

かな手応えを掴んでいた。長丁場の医学伝習、それも基礎の自然科学からの積み重ねにおいて、生徒は理論だけでは興味を失いがちになるが、この実際面に即した繃帯学の授業は、生徒の外科医学への熱意を高めるのには大変効果があることを確信したからである。

それとは逆に、授業の進行を阻み、ポンペを困らせている科目があった。彼は、解剖学を特に重視し、伝習所が開設された当初から週に3回、火・木・土の午前にその講義を行ってきた(伝習所における暦は陽暦が用いられた)。その解剖学の教育においては〝死体解剖の実習〟が極めて重要になるが、開講から長い月日が経っても、未だに実施されていないのである。

この〝死体解剖〟については、ポンペが日本に着任した当初から、出島の商館長であったドンケル・クルチウスを通して長崎奉行や幕府に申請をしてきた。解剖実習の必要性を説いて、死体の提供を再三再四、要望し続けたのである。その努力が実を結んで、申請から1年近くが経過した安政五年の八月に朗報が届いた。長崎奉行所から「江戸からついに腑分けの許可が下りましたぞ」という連絡があったのである。ポンペは大喜びをしたものの、それも束の間。いくら待っても次のステップ、具体的な実施日や場所については何の沙汰もないのである。ポンペが、幾ら催促をしても、奉行所は煮え切らない返事を繰り返す。「また、日本の役人特有の有言不実行か」とその都度、憤慨してきたが、ポンペの焦燥は日を追う毎に募るばかり。

そのような焦燥を抱えながらも、ポンペは解剖学の教育を疎(おろそ)かにしたり、手抜きをしたりすることはなかった。講義に必要な解剖学の医学書や掛図は、オランダから十分に持ってきている。さらに、着任した後にも、パリから紙製の精巧な人体模型である『キュンストレーキ』を取り寄せた。この模型は、外側から紙を剥がしていくと筋肉や内臓が現れる仕組みになっていて、人体の構造を知るには実に都合が良くできていた。しかし、この人体模型がいかに優れたものであっても、生徒がこの模型だけで解剖学を習得することは無理なこ

とである。

――人体各器官の構成について優れた、かつ純粋な概念を得るためには、実物をよく見なければならない。そうしなければ、生徒の医学知識はいつまでたっても不十分なものとなってしまう……。

そう思うポンペは、死体解剖の実現を求めて、講義の合間に何度も長崎奉行所の西役所に足を運んだ。そして、ポンペをよく理解し、協力を惜しまない奉行の岡部長常に直訴する。

「お奉行殿、このままでは日本に一人前の医師は育ちません。とくに外科は死体解剖の修練なしでは手術が出来ない医者になってしまいます」

「ポンペ殿、辛辣なことを申されるな。ワシとて貴殿の役に立つようにと、精いっぱい努力をしておるのじゃ」

「しかし、私どもに死体が提供される話は未だにありません。去年、幕府が腑分けをしても良いと許可したのは、口先だけのことですか？」

「いや、世相が悪いのじゃ。外国から来られた貴殿が、日本人の死体にメスを入れることに強い反発があり申してな」

「そんなことを気に掛けてはなりません！　何処の国でも、新しいことをしようとすれば必ず民衆は反対するものです」

「貴殿がそう申されても、騒擾（そうじょう）になれば黙って見過ごすわけにもいかぬし……」

「何を躊躇（ためら）っておられるか！　後日、医学伝習所の生徒が一人前の医師になれなかったと批判されても、私の責任ではありませんからね」

ポンペは、奉行や役人と面会するたびに強引ともとれる言葉で死体の提供を催促する。

また、相棒の松本良順も、江戸における親しい医師や有力者に文を送って、死体解剖の実現に向けた工作を繰り返していた。名目上の許可だけでなく、実際に死体が提供されるようにと、幕府への働き掛けを強めていたのである。

ところで、幕府が何故、ポンペの死体解剖に難色を示しているのか、その理由を探ってみよう。周知のようにポンペが来日した翌年に米国、次いで蘭露英仏との修好通商条約が結

ばれる。その中身は、外国の武力に恐れをなした幕府が、帝の勅許を得ないままに締結した不平等条約であった。これに対し、幕府の独断専行や弱腰外交を批判する運動が盛り上がり、国内は外国人を排斥する攘夷論で沸き上がっている。その騒然とした世相の真っただ中で、たとえ罪人の死体であっても、野蛮な外国人に腑分けをされることは容認できない、日本古来の習慣や宗教上の理由からしても許されることではない……という国民感情が津々浦々にまで蔓延していた。

ポンペが奉行所に足繁く通い、死体解剖を繰り返し要求しても、役人たちが明言を避け、実施を認めようとしなかった裏には、この攘夷運動の高まりにあったと言えよう。

夏が過ぎ、涼しい秋風が吹き始めたある日、思わぬ情報がもたらされた。ポンペが解剖学の講義を終えて教材を片付けていた時のことである。何人かの弟子たちがポンペのそばに寄って来て、そっと耳打ちをする。

「先生、数日後の八月一三日に、死刑がある模様です」

「それがどうした、死刑は何時だってあるであろう」

「ところが、今回は解剖の許可が出そうなんですよ」

「えッ、本当か？　しかし、何故、私のところに話が来ないのだ？」

「多分、話が漏れると大騒ぎになることを恐れているのではないかと……。ですから、この話は内々に願います」

「分かった。後で松本君から話を聞こう」

ポンペは、当事者の自分に連絡が無いことに不満を抱いたが、きっと複雑な事情があるに違いないと考え、平静な態度を保った。

その日の夕方、松本良順が息を切らせてポンペの家にやってきた。良順が言うには、数日前に奉行所の永井という役人から、「近日中に、斬に処せられる罪人があり、無籍者であるため、願い出があれば腑分けも可なり」という書面が届いた。良順は、その永井という役人に面会を求め、今日やっと会うことができたという。

――斬首の刑に処せられるのは、下役人の屋敷で働く平三

郎という使用人。主人の預かり金をくすねた罪による刑で、前科者でもある。刑の執行は八月一三日(陽暦九月九日)で、腑分けについてはお奉行様も仔細ご承知である故、願い書を出すように……。

詳しい話を聞いた良順は、嬉々として西役所を飛び出し、その足でポンペの許に駆け付けてきた。ポンペも、熱望し続けた解剖実習がいよいよ実現することを知り、喜びを隠すことが出来ない。

ポンペと良順は、早速、地元の医師や通詞たちを呼び寄せ、来るべき死体解剖の準備を進めた。解剖の場所は西坂近くの、海に突き出た岩場の上に決め、そこに8メートル四方の解剖室を設置。医師以外のものは立ち入りが出来ないように周辺を防備し、水や火も使えるようにする……。その構想に沿って解剖小屋の設営を始めると、奉行所の下役人たちが騒ぎ出した。

異を唱えたのは、ごく一部の役人であったが、なかには街頭に出て腑分けの情報を流す者も出てきた。良順は、死体解剖の阻止にとどまらず、ポンペの身に危険が及ぶことを危惧して、その旨をポンペに直接伝えた。

「松本君、私はどんな妨害に遭ったとしても挫けはしないぞ。反対する群衆を掻き分けてでも解剖所に向かい、断行する所存でおる」

「ご決意はよく解っておりまする。されど、先生には出来るだけ目立った動きをなさらぬようにお願いしたい」

「であれば、如何に振舞えばよいのだ?」

「先生にはご自宅に留まっていただき、街なかには出ないことです」

「それで、解剖の当日は?」

「死体が手に入りましたら、すぐにお知らせに上がります。先生は何も知らぬ顔で、解剖場に真直ぐ向かってくだされ」

「うむ。もし、行く手を阻む者が現れたらどうする?」

「その時は、私は将軍家の依頼で医学を伝授しに来たものである。医学を学ぶものは書物だけに頼っていてはならぬ、解剖なくして医学教育などあり得ない。もし我が行く手を阻む

者があれば、奉行に直接会って報告をする。後で如何なるお咎めを受けても知らぬぞと、大声で言ってやりなさい」
「わかった。君が言うようにしよう」
ポンペの了承を取り付けた良順は踝(くびす)を返し西役所に続く石段を一気に駆け上った。
「お奉行様、ポンペ殿には自宅謹慎をお頼み申し上げ、先刻、了承を取り付けました」
「ご苦労であった。ワシからは、〝腑分けの場所には誰も入れてはならぬ。もし、立ち入らんと望む者は松本良順の許可を得るように〟と警護の者たちに命じておく」

陽暦九月九日の早朝、桜町の獄舎で斬首に処せられた遺体が棺桶に入れられ、数名の獄吏に護られて西坂に向かった。解剖小屋が建てられた岩場の周りには１５０名ほどの役人たちが配備され、警固が厳重な出入り口では許可書がない者の立ち入りは一切認められなかった。
ポンペは、準備万端調ったとの知らせを受けて、朝の七時に自宅を出た。愛馬に跨(またが)って解剖所に向かったが、街路に人影はまだ疎らで、行く手を阻む者も現れない。ただ、解剖小屋に近づいたとき、武具に身を固めた警備の人群れが目に飛び込んできた。ポンペは何も知らされていなかったので、〝これは自分に対する嫌がらせに違いない〟と受け止めた。解剖に異を唱える者たちが束になって、「死体解剖は今すぐに取止めよ！」と抗議しているように映ったのである。もちろん、それはポンペの誤解に過ぎなかったが、日本人の心情や攘夷思想をよく理解できない彼にとっては、すべてが死体解剖に反対する動きに見えたのである。
心穏やかならぬものがあったが、ポンペは怯むことなく馬から降りて、にわか作りの解剖室に入った。その中央に設置された解剖台には、斬首に処された囚人の体部と頭部が並べられ、その周りを生徒や地元の医師たちが取り巻いている。近くにいた生徒に訊ねると、見学者は全部で４５名であるという。午前八時頃に、術衣に着替えたポンペは解剖台の脇に立って、見学者一同に話しかけた。

「解剖実習では、その目的とするところを一時たりとも忘れてはなりません。心に銘記すべきは、死体は科学的研究のために供されたものであり、真面目な態度で実見し、実習に当たらなければなりません。冗談や無作法な振舞いは死者を冒涜するばかりか、医師の品位を落とす行為であります」

この言葉は、生徒たちの心の奥に突き刺さり、私語や雑談をするものは一人もいない。見学者が固唾を呑んで見守る中、ポンペは死体の胸部と腹部を一気に切り開いた。そして、胸部の心臓と肺、横隔膜で仕切られた胃と腸、肝臓などの位置とそれらの相互関係を丁寧に説いていく。次いで肺を切り出して全員に見せた後、生徒らに触らせて、その感触や質感を確かめさせた。

胸部が済むと胃や肝臓、脾臓、すい臓へと切開を進める。その途中で質問が出ると、ポンペは生徒が納得するまで丁寧に教えていく。ポンペは、これが最初で最後の解剖になるかも知れないという思いでメスを握っていたのである。

胸部と腹部が終わると、ポンペは右腕の解剖に取り掛かった。筋と関節とを繋ぐ腱、動脈と静脈の走行などを見せた後、志願する生徒に左腕の切開を指示。初めて死体にメスを入れる生徒たちは戸惑うこともなく、与えられた腕を切り開いていく。２年近くもの講義を通して習得した知識がここで大いに役立ったのである。

実はこの時の解剖が、日本における〝医師の手による死体解剖〟の始まりであった。記録では１７５４年に京都で山脇東洋が、１７７１年には杉田玄白らが江戸府下の小塚原で腑分けをしたとされる。しかし、実際に執刀したのは斬首刑の執行人であり、医師たちは処刑人が腑分けをするのを実見して、中医(中国医学)の五臓六腑説やオランダ書籍の解体図が正しいか否かを確かめたに過ぎない。

熱のこもったメス捌きと丁寧な説明のため、時間はまたたく間に過ぎて夕暮れが迫ってきた。暗闇の中では解剖が出来ないので、松本良順らが西役所に走った。死刑囚はその日のうちに埋葬する決まりであったが、それを1日だけ延長してくれるようにと奉行に請願したのである。

翌朝の死体解剖は、足部から開始された。ポンペは鼠径部（そけいぶ）にメスを入れ、大腿部から下肢、さらに足首から足指へと開いていく。片足を解剖した後は、前日と同じように志願する医師たちに対側の足を切開するように命じた。この日も瞬く間に時は過ぎて、頭部を切り開いて幾らも経たないうちに時間切れとなった。ポンペは、脳と目や耳の解剖を取り止め、それらをアルコール漬にして医学伝習所に持ち帰ることにした。

解剖を終えた遺体は、夕方の六時頃に荼毘（だび）に付され、拾われた遺骨は骨壺と木箱に納められた。翌日、西坂に近い本蓮寺で僧の読経と戒名を授け、さらに建碑と永代供養の手続きが執り行われる。通常、刑に処せられた死体は、読経などの葬式もなく、町外れの墓地にひっそり埋葬される。しかし、今回の罪人の場合は、従来のしきたりを破って丁寧な読経と埋葬が執り行われ、戒名まで与えられたのである。

その陰では、松本良順と長崎奉行の岡部長常が必要な手を打っていた。牢屋の番人を通して、死刑囚に死後の手厚い葬儀と埋葬の話を言い聞かせ、静かに刑に服すように仕向けたのである。同時に、その様子を他の囚人たちに伝えて、殺気立った囚人たちの心を静めさせた。さらに、死刑執行後は罪人の戒名を大書して獄舎内に張り出し、受刑者との生前の約束を履行したことを明示する。長崎奉行長常の聡明な処置により、騒動を起こしかけた囚人たちは己の行いを反省し、それ以後は献体を遺言する死刑囚も現れるようになったという。

２回目の死体解剖は、それから２ヶ月後の陽暦一一月七日に行われる。その時の見学者は６０名を超えていたが、ひときわ目を引いたのは紅一点、女医が参加していたことである。その女医とは、シーボルトの娘〝お稲〟であり、彼女は３ヶ月前に罪が解かれて再来日した父シーボルトの仲介で解剖実習への参加が認められた。お稲はポンペの解剖を熱心に観察し、メスを握る実習にも志願する。その途中で鋭い質問を幾つかポンペに投げ掛けてきたが、彼女の聡明さがよく伝わってくる応答であった。

その後も死体解剖は続けられたが、解剖が可能な死刑囚の数には限りがある。そこでポンペとその生徒たちは代用の牛の頭を西洋人の肉屋から買ってきて、目や耳などを切開する。その際、牛の脳は屠殺時に破壊されて役に立たないので、犬や猫などを用いた解剖が繰り返された。

ポンペは医学伝習所も後半に差し掛かった外科学の実習で多くの生徒に手術をやらせたが、その中で唯一人、ポンペが舌を巻くほど腕の立つ外科医がいた。それは佐藤尚中（たかなか）、松本良順の義兄であり、お茶の水の順天堂医院の初代院長となる生徒である。ポンペは、尚中の非の打ち所のない手術振りを目にして、彼は恐らく数えきれないほど多くの犬や猫を見えないところで解剖して腕を磨いたに違いない……と推測している。

九、盟友を見送り、日本に残留

二回目の死体解剖を終えたポンペは、愛馬の手綱を握って出島の邸宅に戻って来た。しかし、その出島には、二年と二ヵ月ものあいだ苦楽を共にしてきた第二次派遣隊の仲間たちは居なかった。ポンペが、西坂の解剖所でメスを握った日の三日前に、海軍伝習所の教師団は、その役目を終えて帰国の途に就いたのである。隊長のカッテンディーケをはじめトローイエン、ヴィッヘルスらの将校、下士官、水兵らは商船ポスチロン号に乗って長崎港を後にした。安政六年十月十日（陽暦十一月四日）のことである。

第二次派遣隊が母国に引き上げた後も、ポンペは医学教育を続けるため、日本に残ることを決意。ほかには飽の浦（あくうら）鉄工所の建設を進めていたヘンドリック・ハルデスと部下の技術員、警備員が長崎に留まり、製鉄工場の建設を続けることになった。日本残留を決めた四人は、第二次派遣隊との別れを惜しんで咸臨丸に乗り込み、大勢の伝習生たちとともにポスチロン号の後を追った。そして、バタビア経由でオランダに向かう第二次派遣隊を港外まで見送り、7発の礼砲を放って一行の平安な航海を祈った。

この第二次派遣隊の突然の帰国は、幕府から海軍伝習所の継続を強く要望されていたオランダにとっては寝耳に水のような話であった。では、何故、海軍伝習所は閉鎖されることとなり、第二次派遣隊は母国に引き上げることになったのであろうか？

話は、カッテンディーケが率いる第二次派遣隊がオランダに引き上げた前年のことに遡る。オランダの弁務官ドンケル・クルチウスは日蘭通商条約を結ぶため、駐留地の長崎を発って江戸に赴いた。そこでクルチウスは、三年前に開設した長崎の海軍伝習所から教師団を引き上げた方がよいのではないか……という考えを幕府に提起する。その要旨は、日本が鎖国を解いて米国、次いで露英仏と修好通商条約を結ぶことになれば、日蘭関係も以前のようにはいかなくなる。とりわけ、オランダが「海軍伝習」と称して日本人に軍事教育を施しているのは〝日本をけしかけて敵対行為を取らせるためである〟と英米その他の国から誤解されている。このまま海軍伝習所を存続させれば、日本と諸外国の関係はますます険悪なものになるばかりか、オランダにとっても由々しき問題を引き起こすことにもなりかねない。その様な懸念があるため、海軍伝習の教育団派遣は取り止めて、〝有志による篤志参加〟としてはどうか……と献策をしたのである。

提言を受けた幕府は、クルチウスの申し出を無下には断れず、協議が続いた。その協議では、「提案を受け容れるほかはなかろう」という意見が大半を占めたが、財政のひっ迫問題も抱えていたので、大勢は次第に〝海軍伝習所は廃止〟という方向に傾いていく。

他方、クルチウスも日蘭通商条約締結後に長崎に戻り、隊長のカッテンディーケや将校などの幹部を集めて幕府との会談の模様を報告する。クルチウスは、日本の開国とその後の通商条約締結を見越して、オランダ政府が日本に送り込んだ優秀な外交官である。そのクルチウスは、ペリーの武力による開国の強行と、その後の不平等条約の締結、さらに追随する英露仏などの動きを見て、海軍伝習所の廃止を幕府に提案したのである。しかし、その複雑な国際情勢と急激な環境

変化を、長崎に留まる派遣隊幹部はよく理解できないでいた。クルチウスが幾ら丁寧に説明をしても、幹部たちの理解は上辺だけで、納得のいくものではなかった。まして、下司官や水夫に至っては海軍伝習所の閉鎖は想像もつかぬことであり、日々訓練に励む伝習生たちにとっても同じでことである。

隊長のカッテンディーケや将校たちは、今後の海軍伝習所の在り方について戸惑い、何度も協議を重ねた。しかし、簡単に結論が出せるような問題ではない。そこで、隊長のカッテンディーケはバタビアに宛てて日本の現況や複雑化した国際情勢を伝え、総督府からの指示を仰ぐことにした。

オランダ船が数多く入港する夏を迎えたが、総督府からの指示文書は中々送られては来ない。海軍伝習所の今後に不安を抱えながらも、第二次教師団は流れる汗を拭いながら、何時ものように生徒を指導していた。その奉行所西役所に突然、長崎奉行の岡部長常が数人の部下を伴ってやってきた。奉行の長常らは、諏訪神社に隣り合った立山御役所からやって来たのである。そして、その場に居合わせた隊長のカッテンディーケや将校たちを教官室に集め、硬い表情で口を開いた。

――貴国のご助力のお陰で、我が国の蒸気船の操縦技術も格段の進歩を遂げていると思われ、ここに厚く感謝を申し述べる。左様に成果は上がっているものの、諸般の事情から伝習生一同を近々江戸に引き揚げさせねばならぬことと相成った。貴国の教官殿もまた、オランダに帰国して頂かねばならぬこととなり申した。ただし、咸臨丸の修繕、製鉄所の建設、医学の教授等については、江戸から何分の沙汰があるまでは、これまでと同様に続行せられても構いませぬ……。

海軍伝習所の誰もが想像もしなかったこの通告に、教師団の面々は一様に不快感を抱いた。伝習生の技量は向上したし、何でも自力でやらなければ気が済まないという日本人の通性から、「もうオランダ人の援助も教育も要らないから引き上げてくれ……」と身勝手に契約解除をしてきたと推測したのである。それに加えて、幕府の財政がひっ迫している折に、長崎での海軍伝習が莫大な費用を要するため、この唐突な決定がなされたと考える教官もいた。さらに、事態を察知した

伝習生の中には、「これはきっと大老井伊直弼（なおすけ）の差し金であろう」と怒りをぶちまける生徒も出てきた。井伊直弼は保守派の領袖（りょうしゅう）であり、日本人が西欧の文化になじみ、染まっていくのを快く思っていなかったからである。

海軍伝習所の教官や生徒らの憶測は、大筋において間違ってはいなかった。幕府は二年前に、江戸の築地講武所の中に軍艦教授所（後の軍艦操練所）を開設している。その総監には第一次海軍伝習所の目付であった永井尚志が就き、そのとき伝習所で教育を受けた生徒を教官に仕立てている。この和製海軍伝習所の創設については、オランダに事前の相談や連絡もなく、いわば秘密裏に事を運んだ経緯がある。その狡猾ともとれる幕府のやり方は、オランダ側に江戸幕府への不信感を抱かせた。そして、今回の海軍伝習所の突然の廃止と第二次派遣隊への契約解除の帰国要請も前例と同様に、否、それ以上にオランダ側に不信を募らせた。

長崎奉行の岡部長常から海軍伝習所の廃止通告があってしばらくの後に、バタビアからの船が長崎に入港。その船で届いた総督府からの指示は、「海軍伝習を即刻廃止し、契約期間満了を待たずに、第二次教師団は引き上げること」であり、次の内容が付記されていた。

――幕府の求めに応じて残留しようとする有志がいれば、その者はもう一年日本に留まっていてもよろしい。ただし、本国の海軍大臣より、何らかの命令が下ったときには、直ちに命に従わなければならない……。

総督府からの指示を受けて、隊長のカッテンディーケらはそれまでの海軍伝習を取り止め、帰国の準備に入った。余りにも突然、かつ伝習途中での廃止通告であったため、派遣隊のメンバーは落胆し、腑に落ちない面持ちで帰国の準備を調える。そして、たまたま長崎に寄港していた商船ポスチロン号に乗り込んでオランダに引き揚げていった。

その一方で、ポンペが教育を続ける医学伝習所は、長崎奉行の岡部長常の尽力もあって、そのまま継続することが決まった。医学伝習所の生徒たちは、夫々が所属する藩主の許可を得て居残るが、ここで問題となったのは、ポンペの片腕と

なって医学伝習所を切り盛りしてきた松本良順の処遇である。海軍伝習に加わった幕臣の勝麟太郎や榎本武揚らは江戸に戻るが、松本良順もまた幕臣の一人である。海軍伝習所の閉鎖により長崎に留まる理由がなくなり、経済的な後ろ盾も失う。そこで、長崎奉行の長常は嘆願書などの策を講じ、良順が医学伝習所には欠かせない人物であることを江戸幕府に訴求して、大老の井伊直弼から次のような指示を取り付けることに成功する。

——大老の職にある者が医学生一人の処置を忘れたとて、法的に何の問題があろうか。留学費やその他一切を従前の通りとせよ……。

保守派で、西洋の文化や学問を嫌っていると思われた井伊直弼が、松本良順の長崎留学については黙認をしたのである。かくして、西洋の文化や科学技術を積極的に取り込もうとする長崎奉行岡部長常の努力は報いられ、医学伝習所は何事もなかったかのように存続することになった。

ポンペを支えてきた松本良順が医学伝習所に留まることが決まり、ポンペはホッと胸を撫で下ろす。しかし、オランダから共にやってきた気の置けない仲間たちはもう出島にはおらず、彼の身辺は急に寂しいものになった。母国から遠く離れた異国の地に一人でいれば郷愁の念に駆られることも少なくはない。そのようなとき、ポンペは共に長崎に留まっているハルデスに会って、懐かしい郷里の思い出や互いの仕事についてよく話すようになっていく。

幕府からの要請があったとはいえ、二人が自ら日本に残ることを志願し、仕事を続けるからには、それ相当の事業や任務があった筈である。ポンペの場合は、ヨーロッパの進んだ医学を日本人に伝えることであるが、技術将校のハルデスの場合は一体、何を為そうとしていたのであろうか。

ハルデスが取り組んでいたのは、大型船舶の点検や補修、その際に必要な部品等を製造することができる製鉄工場の建設であった。そのような工場建設の計画は、第一次派遣隊の伝習時に持ち上がり、実施は後を継ぐ第二次派遣隊に引き継がれる。計画を託された後任の隊長カッテンディーケは、

工場の建設を担える人材を探して、技術将校のハルデスに白羽の矢を立てた。もちろん、ハルデスは隊長からの要請を快く引き受け、ポンペらと共にオランダを発った。そして、ヤパン号が日本に到着すると、休む間もなく工場建設に着工。我が国で初めてとなる製鉄工場の建設は、開明的な考えの持ち主である長崎奉行岡部長常の主導で開始されることになる。

ハルデスは、真っ先に港湾内を詳しく調査して、浦上村の飽の浦に目を付けた。そこの沼地を干し上げて整地し、軟弱な地中に数千本の杭柱を打ち込んでいく。基礎工事が完了すると、彼はそこに蒸気機関と製造工業のための工場をうち建てた。建屋の構築と同時に、ハルデスはオランダから最新の工作機材を取り寄せ、独力でそれらを組み立てていく。その途中で、第二次派遣隊は引き上げるが、その後に完成した工場にはナズミス社製の蒸気ハンマーが絶え間なく動いている。〝ナズミス〟とは、スコットランドの技術者の名で、彼は１８３４年にマンチェスターに工場を創設、３９年に蒸気ハンマーを発明後、平削盤、杭打機械など数多くの発明で知られる人物である。

最新の工作機械に加え、ハルデスの工場には１２基もの大鍛治場があって、鎔鉱炉は始終稼働している。ドロドロに熔けた金属を鋳型（いがた）に流し込んで、様々な器物を創り出す鋳造（ちゅうぞう）の全過程も、この作業場を見れば一目瞭然。さらに旋盤や鋳造品を円錐形に切り出す新式の工作機も蒸気の力で回転している。この工場では、蒸気力を備えた器械や重々しい鉄の部品は何でも作り出せたし、高圧に耐える蒸気罐（じょうきかま）（ボイラー）さえもが造られていた。

ハルデスは鉄工所の建設に留まらず、日本人技術者の養成も怠ることはなかった。幾ら優秀な工場を打ち建てても、それを動かす〝人〟がいなければ意味をなさない。幕府もその辺は心得ていて、ロシアのプチャーチンのために西洋式帆船の戸田（へだ）号を造り出した船大工の上田寅吉らを海軍伝習所に送り込んでいる。しかし、船大工といっても、蒸気機関の構造や仕組みについては何も知らず、蒸気の力で動く器械や、

それらを造り出す工作機械も見たことがない。ハルデスは無知同然の船大工や鍛冶職人たちを相手に、理論的かつ実際的な教育を工事の合間に授けていく。その地道な取り組みにより、彼は長崎に優れた技術家集団を育て上げ、日本人による蒸気船の運航に留まらず、点検・補修などのメンテナンスをも可能にしていった。

ハルデスと共に日本に残ったポンペは、後に多くの国から来た技師たちを連れて、この飽の浦鉄工所を訪問している。それらの技師たちは、誰もがみな口を揃えて「ここに最新式の工場設備があるとはただただ驚くほかはなく、これ等のすべては巨人が成し遂げた事業である」と称賛の声を上げた。ポンペは日本に滞在しているあいだ、ハルデスの仕事ぶりに目を見張り、彼に対する尊敬の念を抱き続けた。そして、日本に最新の製鉄工場を建設する指導者として、「彼に勝る教師は他にいない」と絶賛の言葉を惜しまなかった。

製鉄工場がほぼ完成に近づくと、今度は埠頭の必要が生じてきた。貨物や石炭を積み込むため、また船体の修理のために、大型船が接岸できる埠頭である。しかし、そのためには１０メートル以上の水深が求められ、その深さに達するためには６０～９０メートルの突堤を湾内に建造しなければならない。ハルデスはこの大きな仕事をも自ら果敢に手掛けていく。埠頭の造成に取り掛かると、彼は数ヶ月のあいだ潜水函に身を潜めて長い時間を過ごし、ある時は水中に潜って、重い石の沈下粗朶(そだ)をその場に沈めて突堤の基礎を作り上げた。ハルデスが長崎港内に造設したこの製鉄工場と埠頭、それらを動かす技術者の養成は極めて大きな事業であり、日本にとって記念すべきものとなった（明治維新後、飽の浦鉄工所は長崎造船所に改名、その後は岩崎弥太郎に払い下げられ、三菱重工業長崎造船所へと発展する）。

飽の浦製鉄所は着工から3年と少しで竣工したが、軍艦や商船を持つ国々にとって、この工場は重大な意義を持つものとなった。それまでは、修理のためにヨーロッパまで帰らなければならなかった船が、日本の長崎で、数週間も経ない

ちに完全に修理が出来るようになったのである。そうなれば、長崎港に寄港する船は必然的に増えてくる。加えて、工場には貯炭所も併設されていたので、石炭の入手も可能となった。その石炭の価格は、シナで買うイギリス炭の3分の1であったため、シナ海を横断する汽船は競うように長崎に寄港して、廉価な石炭を買い求める。中には、破損した船体の修理を目的に、長崎にやって来る船舶もあった。

外国船の寄港や修理目的の滞在が増えると、ポンペの身辺も一段と慌ただしくなってきた。外国船が入港するたびに、怪我をした船員や病人たちがポンペのもとにやってくる。また、米英露などの国々は、日本に外交官や軍人などを送りこんでも、医師の派遣までは手が回らない。そこで、江戸や横浜で大怪我をしたり重い病気にかかったりすると、ポンペを頼って、はるばる長崎にまでやってくる。さらに、噂は海外にまで広がって、上海から到着した船に、ポンペの診察を目的に乗り込んできた患者も現れた。

ハルデスが造成した飽の浦鉄工所の影響を受け、ポンペの毎日は息をつく暇もないほど忙しくなっていた。百名以上もの生徒たちに医学教育を伝授するかたわら、外国人はもとより、日本人の患者も身分や貧富の分け隔てなく診察する。さらに、船体の修理で長期滞在をしていたロシア軍艦の水兵たちが引き起こした問題行動への対処についても、長崎奉行の長常から相談を受けて適切に対応。若いポンペは持ち前の情熱とバイタリティーを存分に発揮して、解決へと導いていく。

〈以下、次号〉

この前・この間 ―第７回―

いんば華子

離れの入り口近くに、使い古したリュックが一つ置かれている。二日前から伊藤が荷造りを始めたからだ。そんなにたくさん荷物はないが、二カ月の間に買った下着やＴシャツが入っている。伊藤が出ていくことを決めた時そのままあげられる鞄か何かないかと探すと、大学時代に使っていたリュックが押し入れの奥から出てきた。目立つ汚れはないので、少しかび臭いがそのまま持たせることにした。

この後町内会の集まりで両親が家を空ける時間に、伊藤を実家に送り返す。ここまで来たら最後まで隠し通して何もなかったと装えるだろう。家族経営しながらも適度にある距離感が、ことを静かに終わらせてくれようとしていた。

日が落ちるのも早くなっている。秋の日はつるべ落としという言葉が相応しい。夕方六時からの集会には隣町までバスで向かう。集合時間にはまだ明るさが残った空も、町内会の面々が出発する頃には明かりが灯る。主人がいなくなり、どの家も静まり返るだろう。

未だに、伊藤を調理場に引き込み、一緒に過ごした理由が

自分の中ではっきりとしない。
反射的にというほど切羽詰まった状況でもなく、困っている人がいたら、助けるものだという善意で動いたわけでもない。影の中にいる相手が伊藤だとわかって、やはり魔が差したのだ。虐められていた同級生の現在の姿を少し見たかっただけなのだ。噂で聞くことができないことは、この目で見るしかない。わざわざ調べるほど興味がないことでも、目の前にあれば見てみたくなるものだ。そのくらいの軽い好奇心と、やはり人として見るに堪えない姿だったことで少し同情した。疲れ切って、ズタボロになって帰ってきた自分の姿を重ねた。そのあたりの気持ちが複雑に絡まって、この期間の行動を作っているような気がした。
「これも持ってっていいの？」
伊藤は、まだおろしていない新品の三組の靴下を持って言った。男物の靴下だから十分自分の靴下として使えるが、これも餞別だと思って持たせた。
「持って帰れよ。他に靴下三つしか残ってないだろ」
「ありがとう」
ここまで素直なやつだっただろうか。今後は会ったとしても偶然ショッピングセンターやスーパーですれ違うくらいだろう。次はいつ会おうなんて話は、どちらもしない。この期間が特殊だっただけだ。
「もう少しで、親父たちは家を空けるから、その時行こう。家の近くまで送ろうか？　歩いたら一時間はかかるだろうし、その時に誰かとすれ違うかも」
「どうせ家に帰ったら、いろいろ聞かれるし、警察に行くことにもなると思う。この地区から出られれば、同級生だからって翼や五十嵐さんにも迷惑かけないと思うし」
「……五十嵐さんって、紅美のことか。親戚なんだってな」
「だいぶ遠い親戚だけどね。嫌だよね。いつまでもこういう関係が付きまとうんだ。五十嵐さんだって、学校じゃ全然関係ない人だったし、成人式も行ってないから、どんな顔なのかも知らない」
「ま、そうだよな。じゃあ、荷物確認しとけよ」

「家まで送らなくていいよ。ここから歩いて帰るくらい一人で行けるから」
母屋の様子を確認するために、土間の扉を開けると、今扉を叩こうと手を丸めた紅美が立っていた。
「え？」
びっくりして履いたサンダルが少し滑った。
「ごめん。町内会の集まりの前に。この前お野菜もらっちゃったから、筑前煮持ってけって言われちゃって。翼の夕飯にって……」
紅美の瞳孔が開いて、何を見たのか察するのは容易だった。どうすりゃいいんだよこれ。諦めの方が先に来る。頼むから大声出すのは辞めてくれよと思い、次の動きを見る。紅美は口が開いたかと思うと、タッパーに入れた山盛りの筑前煮を忘れたみたいに指を差そうとするので、代わりに底を両手で支えた。
「どういうことなの？　だって、そこにいるの伊藤君でしょ？」
流れで受け取ったタッパーを畳みの上に置く。説明はこれからだって大丈夫だ。自分にも落ち着くように言い聞かせる。本当に、事を大きくだけはしたくない。
「えっと、その……」
それでも続きが出てこない。友達でもなかった、いじめの当事者でもなかった、何かあれば関係性を伝えられるが、俺たちはクラスメイトだったわけでも部活のメンバーであったわけでもない。
「ねえ、行方不明だったって、知ってたでしょ？」
紅美が眉間に皺を寄せて、胸倉を掴んでくる。思わず降参のポーズで、視線を逸らしてしまった。落ち度が自分にあるような姿をしてしまう。
「どうして言ってくれないの？　いつからいるのよ。何なの？」
前後に二回揺すられた後、胸倉を掴んでいた腕が離れた。
「紅美、とりあえず、扉閉めさして。親も知らないんだ」
扉を閉めようと腕を伸ばすと、背後で動く足音がした。

「伊藤？」
呼びかけを無視して、開いていた扉から黒いスウェットの男が飛び出した。夜帰る時目立たないように、着替えていた寝間着だ。
「どこ行くんだよ」
飛び出した伊藤は、庭でスニーカーを履き、家の前の道を左に曲がっていった。もう外は泥を被ったように全体が黒ずんでいる。今は視認できるが、時間が遅くなると見つけられなくなってしまう。
「紅美、悪いほんと。俺、追いかけなきゃ」
「ねえ、私だって心配したんだよ。親戚って名前知っていた子が中学でいじめられてて、先生のお通夜で姿見て、その後伊藤君の家族も必死に探して……なんで翼の家にいるの？」
紅美は目尻から流れた涙を拭った。
「ごめん、混乱しちゃって。一生懸命探していたのも、私じゃなくて伊藤君の家族なのに……私は、また何もしてない」
「……紅美、今度伊藤がここにいた間のこと話すよ。俺も、紅美と一緒だ。伊藤に、何もしてない。でも心配したりはしたんだから、忘れているやつらや心配もしてないやつらよりは、きっといい人だ。いい人だから……」
「何もしてないのと同じじゃない」
紅美は力の抜けたパンチを、俺の左胸に一発決めた。何もしていないのは、きっと違う。俺たちは、中学時代のことを後悔したし、今だって伊藤が死ぬことを望んでない。
死ぬ？　伊藤が？　なんで走っていったんだ？　紅美に見つかったから？　俺以外に存在がバレたから？
「俺、行くわ。暗いし慣れた道でも、勢いで走って行ったし」
用水路に落ちて死んでいた男のことが脳裏に浮かぶ。結び付けるな。伊藤は、前向きに帰ろうと決めたじゃないか。そうわかっていても、万が一ということもある。こんな短期間一緒にいた相手のことなんか、ほとんど知らないのと同じだ。
「絶対話すから。親父たちまだ母屋にいるからさ、叔母さんからの筑前煮渡してやって。あと、伊藤のことは……」
「わかってる」

残りの涙を拭ききると、紅美はタッパーを持って立ち上がった。

俺もスニーカーを履いて、スマホと犬の散歩用の懐中電灯も取り出す。暗くて伊藤が見つけづらいかもしれない。

「翼、ありがとう。伊藤君見つけてきて」

手を上げて挨拶すると、紅美は母屋へ、俺は伊藤の向かった方向へ走った。見つけた訳ではないことも、初めは自分もよくわからないまま引き入れたことを話そう。これ以上自分に惨めになる必要はないんだから。

伊藤が曲がった方向は、犬の散歩コースの定番だ。右に周ることもあるが、大体は左に曲がってあぜ道を一周する。伊藤に初めに教えた散歩コースだ。慣れているから、暗い田んぼ道で転んでいることはないはずだ。あとは、散歩道を外れていないことを祈るしかない。街灯が少ない所に行かれては、懐中電灯でも見つけるのが難しい。

気持ちが逸り、小走りになる。道の色が灰色から黒に変わり、しっかりと走れるのは街灯の下の道が照らされている二、三メートルだけだ。数分前に走り出したから影や足音がわかったっていい。遮るものがない谷津の暗さは、底なし沼の最深部みたいに音まで飲み込んでいるようだ。自分の靴とアスファルトの間で擦られる砂の音しかしない。ぽつぽつと、ぼおっと光る漁火の下に、せめて人影が見えないか注視しながら、前に進む。

普段の散歩なら右に曲がる地点で足を止めて、目前の広い水田が集まるエリアを見つめる。区画整理される前からの田んぼもあり、周辺から集まったあぜ道が五差路になって交わっている。散歩の分岐点は人家を離れ、一際広い道が用水路の隣を平行に走っている。その先にある沼土手までせいぜい八百メートルくらいの窪んだ土地とわかっていても、無限に広がっているように感じる。百メートルくらい先の一か所に欄干付きの橋が架かり、大きなオレンジ色の外灯が辺りを照らしている。その下には、この前死体が見つかった用水路が直角に交わっている。

「せめてそろそろ姿だけでも見せてくれよ」

ボソッと零した声に応えるように、オレンジ色の光の下にぼんやりした人影が現れた。一瞬動きが止まったかと思うと、欄干に手を伸ばし欄干をよじ登るような動作を始めた。

「伊藤！！」

本気のダッシュも、腹の底から叫ぶのも、もしかしたら中学の部活以来かもしれない。久しぶりの動きに、身体も脳も混乱する。足は縺れてついてこないし、思い切り振る腕も背中の方に動かない。もっと早く動け！　と命令してもどこかで邪魔されて指示が届かない。もっと日頃から動いているべきなんだ。三十代は若いと言っても、十代、二十代とは違う。健康に気を使い始める歳でもあるし、いざという時に走れないと、こんな風に困るんじゃないか。

普段の自分の生活を責めてもしょうがない。今は、あの明るい所にいる人影を、伊藤を止めたい。そのためにはあと何秒ある？　この距離をこのスピードで足りるのか、橋の下は何メートルあるのか、水は流れているのか……この状況の顛末が、少しでも少しでも、どうかマシなものであって欲しい。

体に力を入れすぎるな。力むな。じゃないとせっかく追いついても次のプレーにつなげられなくなってしまう。足首と膝を柔らかく使って、今度はこっちの攻撃に切り替える。試合の流れを感じて、メンバーの士気を高めて、リングを狙え！

「伊藤！！！」

スウェットの上着を思い切り引いた。欄干の上に立っていた黒い人影は、簡単に倒れてきた。勢いに合わせて自分も地面に倒れる。受け身は取ったけれども、左の掌を強くアスファルトに打ち付けた。火傷したように掌が熱くなる。引き倒したスウェットの男は、やはり伊藤だった。俺の上に倒れてきたので、頭や背中は打ってなさそうだ。

久しぶりの全力疾走で、息が戻らない。伊藤は驚いて伸びたままだ。

「あっ、あっ、はあ、危ないだろ。ここ、結構高いぞ」

俺だとわかると、伊藤が自分の上で力を抜いたのがわかった。

「俺、別になんかしようとしたわけじゃなくて……少しだけ、ここで死んだ人のこと考えていただけなんだ」
「ど、同情だか何だか知らないけど、橋の上に立つのは危ないだろ」
伊藤の下から抜け出して、欄干を支えに立ち上がった。酸素はまだ足りない。立ち眩みと最後のダッシュをきめたせいで、額から全身から汗が噴き出てくる
「周りから見ればそうだよね。さっきはビックリして走ってきちゃって、なんかこの辺まで来たら落ち着いてさ。あーそういえばと思って橋から用水路見ていただけ。そしたらちょっと高いほうがいいかと思って、欄干乗っていただけで」
欄干を背もたれにして空を仰いでいると、見えない所で「ごめん」と謝る声が聞こえた。
余裕がなくて、片手を挙げて聞こえたことに反応する。こいつ今、初めて俺に謝ったかも。
「何で上から見てたの？」
伊藤視点を確かめようと身体を回して橋の下を見る。用水路の役目が終わった秋となると、水量がだいぶ減って背の高い雑草の方が目立つ。高さは二メートルくらいか。打ちどころ悪ければという心配もあるけれど、落ちたとしても足をくじく程度だっただろう。ここで亡くなった人は、この状況だけで言うと、運が悪かった……病気や他の理由があるとすると、そうは片付けられないが。
「あの人は、自分だったかもしれないと思うと、やっぱり他人事とは思えなくてさ」
ドキリとして隣を見ると、伊藤も欄干によりかかりながら下を見つめる。死体が見つかった時は、こいつを家に帰す口実にしようとしていた。今は伊藤と同じだ。何か失敗して、暗闇の中を歩くことになった時、何かのきっかけで、いつ用水路から上がる死体になるかわからない。生きること自体が本当はいろんな危険と隣り合わせなのだ。
ここはどこかに似ている。何もかもから拒絶された、道しるべも出口もない暗闇だ。
伊藤の暗闇の中は、きっと中学のいじめの時からあって、

俺はあの先輩とのカフェが失敗した時期だった。俺たちは同じ色の暗闇にいたわけではない。けれども歩いてきた場所は、きっとこの橋にたどり着くまでと同じ、どこまで広がっているかわからない、暗く冷たい、沼の底だ。

そしてこんな橋を見つけては、少し休んで、自分たちよりも深い闇に落ちた人に思いを馳せる。そうして安心する人もいれば、同情する人もいる。孤独で、慈悲のない作業だ。それを今、俺と伊藤は一緒にやっている。まったく縁のない間柄でも、ここでは隣にいることができる。

「さっき紅美が来た時……ああ、誰にも言わないようには言ってある」

「うん。なんだか恥ずかしくなっちゃってさ。もう十分年取ったはずなのに、伊藤君は……っていろんな人に思われてんだろうなって。なあ、俺だって恥ずかしいと思うことあるし、普通の人のようにしていたかったよ。友達とか、作ってさ。でも俺はそうなれなかったんだよな」

伊藤も同じ距離を走ってきた。ひょろひょろの身体は、欄干に立つのもやっとだっただろう。所々息切れが混ざる。

友達もできず、そのまま学生生活を続けた伊藤は、佐伯先生とはどんな関係だったんだろう。お通夜に来るには、それなりの理由があったはずだ。数か月一緒にいても振る機会がなかった。伊藤と俺の一番の共通点なのかもしれない。

「伊藤は、佐伯先生と卒業後も親交あったのか？　ほら、紅美が姿見たのもお通夜の時だったし」

最後の機会だと思い、伊藤と佐伯先生のことについて尋ねた。もう会うこともない、だったらそのお通夜の後にどうして行方を眩ましたか、俺には聞く権利だってあるだろう。

伊藤は少し考えた後、話し始めた。

「佐伯先生っていい先生だっただろう？　少なくとも、翼や他の人たちにとっては。俺も面倒見てもらった。だけど……翼が思うようないい先生ではないかもしれない」

伊藤がゲイであることを知っている身としては、その話しぶりを聞いて胸が騒めく。やめてくれ、聞きたくない。尊敬できる人を潰さないでくれ。

「ああ、ちがうよ。先生はゲイじゃないし、別に先生は俺をそういう目で見ていたわけじゃない。でも、今まで通りの佐伯先生ではなくなるかもしれない。俺が知っている佐伯先生の話をするだけだから」

進路指導室に呼ばれたのは、その日が二回目だった。進路指導室は、実際進路相談に使われることはほとんどなくて、こういう問題を起こす生徒が呼ばれて、先生と話し合いをする場所だ。初めて呼ばれたのは、派手にいじめられた日。トイレでバケツの水を上から被せられた。いじめの発端は、清水という学年のムードメーカーだったが、水を被せられたとき清水はトイレの入り口の方にいて、実行したのは、隣のクラスのお調子者だった。もう名前も覚えていない。けれども、そいつが俺の名前を呼んでにんまりと笑い、バケツの汚れた水をありったけの力でぶちまけてきたときの記憶は、今でも残っている。

この後は、むしろ清水も、やりすぎだろ、片付け誰やるんだよ、といじめっ子とは思えない真っ当なことを言っていた。これだけ派手にやれば、先生も気づく。そこを少しでもうまくやるのが主犯格だ。

保健室のバスタオルを被せられ、進路指導室に入れられた。バケツの水を被せた犯人の方は、担任の先生が職員室に連れて行ったらしい。

二回目は、両親も含めた謝罪の機会を設けた後のことだ。どうやら、その後もいじめは続いていると気づいた佐伯先生が、放課後進路指導室に来るようスケジュールを組んできた。生徒指導担当をしていたから、話を聞く先生として選ばれたのだろう。

進路指導室は清掃担当を振り分けられていないせいか、他の部屋より埃っぽく感じた。高校受験の過去問題集や学習用の雑多なテキストが壁にひしめくように置かれ、教室の真ん中は二分するように金属製の本棚で仕切られていた。入る扉が前か後ろかで、用途が分かれている。向こう側は完全な資

料室で、先生が座って待っているこちら側には、灰色の背の高い本棚以外に長机とパイプ椅子が置かれている。保護者も含めて話し合いができるように、自分の側には三脚詰めて置いてある。

「座って」

先生が促す。早く終わらせて、帰りたいのだろう。いじめっ子にしろいじめられる側にしろ、先生にとっては〝問題のある生徒〟であることに変わりはない。

おとなしく言うことを聞いて、パイプ椅子を引いて座った。静かに床を滑らせて、ドカッと音を立てて座るような態度の悪い真似はしない。先生だけじゃなくて、俺だって早く帰りたい。いちいち指摘されるような態度をとらないこともやり過ごすには気遣う点だ。学校に引き留められるより家に早く帰れる方がましだ。母親が農作業やパートから戻れば夕飯は作ってくれるし、父親が仕事から戻るのは八時過ぎだ。祖母は畑が終わり夕飯を食べるとすぐに寝てしまう。みんな日々のことで精いっぱいで、俺のことはほっといてくれる。犬の散歩にでも行っておけば、問題なく明日になる。

「大人気ないこと言って申し訳ないけど……」

先生の第一声は意外だった。大人気ないこと？　俺は、最近はクラスメイトや友達とうまくやっているか？　とその辺の無難で無意味な質問から始まると思った。ああ、はい。別に。という頷きを繰り返し、問題がないと言っておけば、干渉はなくなっていくだろうと思っていた。さすがにもうバケツの水を被せられるような生活に影響することはないから、シカトや嘲笑は無視すればいい。自分に降りかかるものは、それでほとんど解決できる。余計なことはしないで欲しい。

先生と視線を合わせると、この間も自分のことを観察していたのだとわかった。続きを話していいものか確かめているようだった。

「学校の先生になる人は、子どもの時勉強のできるいわゆる良い子が多いもんだから、君のような生徒を目の前にすると、どうしたらいいかわからないんだ」

余りに率直な言葉に、どう反応してよいかわからない。いじめられているのか？　と初めて聞いてきた担任は、必死に親身になって話を聞こうとしていた。問題を解決しようと、俺よりも真剣に悩んでいた。それでいながら、派手な一発だけを見て解決した気になっている。本質を見抜けない大人たちが、周りには大勢いる。自分の家が生活にも困る配管・鉄鋼工場で、学校の成績だって下から数えたほうが早くても、薄っぺらい人間を見抜く直観がある人間の方が、強い。

佐伯先生は冷静であると同時に、瞳の奥は冷たかった。言葉の通り、関わろうとする気がないように見える。

「今回のこともね、正直見ないでいた先生が多かっただろうね。伊藤君の学校生活の問題は、あれで解決したと思いたいんだ。先生だけじゃない。大人たちは真剣に真正面から君を相手にしていると、仕事が滞ったり家事が進まなかったりしてしまうから、細かいところまで見ないようにしているんだ。そういうトレーニングを積んでいるんだよ」

先生は一度話を止めて、反応を見ていた。やる気がなさそうに肘を机について、顔をその上に乗せた。

「うん。さらに困ることは、君くらいの年齢の子は、先生がこんな冷たいことを話すと、ショックを受けたり傷ついたりするものなんだけどね。もう素直な子どもじゃないんだよね」

何か言い返そうと思っても、言葉が出てこない。それのどこがいけないのかと反発したい気持ちもあるが、佐伯先生がどう感じて考えているということに無関心でもある。

「今はまだ、返せる言葉がないだろうけど、大人の本音はこうなんだ。君は扱いにくい生徒ですと言う方が的確かな。たとえこちらが本当に君の気持ちを聞きたくても、なかなか大人には教えてくれなさそうだ」

反論できないことに悔しさを感じ、睨むように佐伯先生を見てしまった。勝てない大人が目の前にいた。手に負えないと持て余されているはずなのに、こちらにも向こうにも、相手を何とかコントロールしてやろうという気持ちがない。水の流れを読み合うだけで掴みどころがない。

「まあ、大人は細かい所までは見てないけれど、近くにいる

ことだけはわかってもらえればいいか。それと、約束しよう。君が卒業するまで、月に一回、こうやって話をしないか。来たくない日は来なくたっていい。君に必要なのは、これからも孤独で一人で生きていく強さを持つことだ。まだまだ足りないのは、子どもだからね。偏屈さはこのまま変えられそうもないから、君はもっと強くなったほうがいい」

「俺と先生が繋がったのはこれがきっかけだったんだ。さすがに月一は行かなかったけど、これが中学に通えていた仕組みなんだ」

「佐伯先生、そんなこと言っていたのか？　そんなストレートに中学生に言うなんて……俺たちへのバスケの指導の仕方とは正反対というか、決めつけるような言い方……」

佐伯先生の指導は、生活も部活も自分から動くがモットーだった。だから、優弥が顧問であり職場の同僚でもあった佐伯先生を尊敬していたのだ。自主や自律を教えて、中学生でも対等な一人として相手をしてくれた。佐伯先生の伊藤への態度は知らない。高圧的でも暴力的でもないけれど、相手に合わせたというには教育者らしくない。

「先生は、最近どんないじめをされたか、授業で何を間違えて笑われたか、どんな時無視されたかを聞いてきたよ。答えると、ふうんとか言いながら、どう思ったかどんな態度をとったか聞いてくるんだ。その後、もっといい考え方や言い返し方を教えてくれるんだ」

「中学生に？　教えるのか？」

俺は初めての種類の驚きを隠せなかった。絶対優弥はやらないだろう。何かで明るみに出たら、教師は問題になりかねないんじゃないか。

「はは。そんな真面目に聞くなよ。……俺の唯一の笑える話なんだから」

「いや……」

今度は逆に重い。伊藤の一つ一つのエピソードが重い。同じようなことを繰り返して、経験している俺とは違うんだ。

「先生面白かったよ。言わなくても、頭の中で言い負かしてやったり相手の矛盾をついたりさ。話すのは苦手だったから、言い返し方は全然使えなかったんだけどね」
「伊藤って、なんか適わないな。そういう所知らなかったし、強いんだな」
俺は伊藤の努力を労った。俺が同じ立場だったら……学校に通っている自信はない。人生の初めの方を既定のルートには乗れていただけで、自分本来の強さは伊藤の方が何倍もある。
「もともと偏屈だっただけだよ。佐伯先生は、俺に一番いい方法を選んでくれた。中学卒業後は今までみたいにはいかないけど、時々会ってまた同じように話をしていたよ。いつからかは俺の方がクソみたいな論理思いつくようになったけどね」
「ハハハッ」
うまく笑えたかはわからないが、伊藤は満足そうだった。
「……先生のお通夜に行って、悲しかったしショックだった。あと、皆の知らない先生の一面を知っている優越感があった。なのに、皆が知っている先生を知らない自分がいるんだ。お通夜に行ったあと、俺はどうしてもそれに耐えられなかったんだ」
欄干の先に肘から先を出したまま、伊藤が空を仰ぎ見る。
「それだけのことって思うだろ。俺もそう思った。当たり前だけど、何もみんな一人の人のすべてを知ることができるわけじゃない。ただへえって思うだけでいいのに。俺だけが特別な生徒じゃないとわかっていたし。けれどもどうしても超えられない一線が俺の前には引かれているんだ。先生はそれを超えようとしなくていいし、より鮮明に一線を引いて関わらない方法を教えてくれたけど、目の前に超えられないものがあることだけは、どうしても変えられないんだ」
俺は欄干の先に出ている伊藤の手を握った。一瞬びくりと反応した後、ゆっくりと握り返してきた。
今ここに、寂しさがある。孤独がある。心の中を映す暗闇がある。同じ場所にいる時くらい、その寂しさを紛らわすだ

けでもいい。手を握ることくらいなら、俺にだってできる。
伊藤の手は、湿っているような冷たいような不思議な肌触りがした。ここまで同じ距離を全力で走ってきた、人の手だ。同じ深淵の中にいる相手だとわかって、やっと握れた手がある。それだけのことをどうして二十年前にはしてやれなかったのだろう。ただ人の手を握るだけのことが、どうしてできないのだろうか。
「帰るか」
声をかけると伊藤は頷いた。もう一度力を込めて握ったあとゆっくり離した。
自分が先頭になって、伊藤は3歩ぐらい遅れて自宅へ歩いた。十代、二十代なら俺たちは友達になったかもしれない。また遊びに来いよとか言いながら、しばらく遊び相手として過ごしただろう。でも、俺たちの出会い直しは少々時間が経ち過ぎている。俺には、働いて返さないといけない借金や生きるために店を続けていく責任がある。うちで働けなんて言えるような余裕はない。伊藤、応援しているから自分で頑張れなんて言えるような立派な立場でもない。本当に言葉が意味をなさなくて、だから手を握ることしかできなかった。自分の範疇を超えた先にいた同級生にできることはこれくらいなのかもしれない。
自宅に戻ると、既に母屋には誰もいなかった。伊藤はリュックを受け取ると、ありがとうと言って再び暗いあぜ道に戻っていった。少し寂しいような気がしたが、日常に戻っただけだった。紅美からもらった筑前煮は相変わらずおいしかった。もしかしたら親戚だという伊藤の家でも、同じ味を食べているのかもしれない。

伊藤と数カ月ぶりに会ったのは、店舗近くの下水道管工事があった時だ。周辺店舗や住宅に影響がある可能性があり、市役所の職員や業者等が店舗にやってきた。昼営業と夜営業の間の作業で影響は殆どない。確認のための立会で協力するような形だ。店内の配管の不具合もあり、一緒に来る業者に

見てもらえるよう調整した。市役所から来た二人と業者三人の作業着の男たちの中に、力のなさそうな見覚えのある男がいた。

「今日は店舗の中の配管もお願いいたします。休憩や荷物置きに店舗の中を使っていただいて大丈夫なので」

伊藤に挨拶しようとすると、ふいっと視線を逸らされた。

「どうも。ありがとうございます」

知り合いと悟られたくないのか、まったく取り付く島もなかった。

「あれ、ＳＮＳやってるんですか？」

業者の一人が入り口に貼られたチラシを見て尋ねる。

「はい。先月から始めてまだまだなんですが、二十代の人や地元以外の人も時々来てくれるようになって、やってよかったなあと思いますよ」

「後で登録させてください」

「ありがとうございます」

先月子どもが生まれたと優弥が報告に来た。休みを合わせられなくて、営業中の店舗に連れてきた。育休も取り、しばらくは子どもの面倒を見たいそうだ。学校現場の忙しさもさることながら育児もハードワークだと、疲れた顔で幸せに相好を崩した。近況を話しながら、ＳＮＳを使ったプロモーションを勉強している教え子から、ゼミに協力してくれる店舗を探しているとの連絡を受けたという。条件はＳＮＳを利用していない飲食店ということで、そっちに全く手を付けていなかった中華料理店が候補に上がったというわけだ。技術や知識はある。しかし自分から踏み切れなかったのは、あの失敗があったからだろう。地道に、地元に愛される店舗で十分だと思っていたが、宣伝をしなければ客足は減る一方だ。

ゼミ学習の一環で行うので代行運用は無料、写真の提供や最終的な監修を引き受けて運用を始めた。軽い気持ちで引き受けてみたが、学生たちは真剣だった。中華料理四川のプロモーションを続けてくれて、着実に客足が伸びている。この学生たちの中から、学生時代に出会った先輩のような起業家も現れるんだなと思うと、楽しみになった。自分は見ること

のできなかった広い世界を見られる可能性があるのだ。そういう将来がある若者たちは、小さな中華料理店のＳＮＳ一つにもひたむきになってくれるのだ。

紅美も忘れずに店へやってきた。空いている時間に来られて、伊藤といた時のことをみっちり聞かれた。ただ何となく、心配だったからというと、大人になっても助けられない人っているから翼らしいと言われた。そんな立派な理由でもなく、ほとんどは残ったご飯を食べさせていただけだ。紅美も親戚で同級生で、中学生の時の態度が棘のように刺さっていたのだろう。家に帰ってきたとなれば、親戚付き合いだって続くはずだ。

成人の行方不明、伊藤という人物のせいか、行方不明者発見は地元の話題にはならなかった。紅美に伊藤とゲームしたり犬の散歩を頼んだりしたことは話したが、佐伯先生の一面と伊藤の手を握ったことは言わなかった。ただ一緒に生活していた時期があっただけ。中学生のとき消化不良を起こした出来事が、何かの拍子に飛んできた。地元にいればそういうことだってある。

「うちの伊藤ってこの辺の出身なんだけど、知ってる？」

休憩に使ってくれと店舗を開けて、お茶をカウンターに並べておいた。伊藤だけ姿が見えないまま、作業着の男たちが椅子や小上がりのふちに腰かける。

「さあ。ちょうど店長さんと同じぐらいかなとは思うけど、二人は顔見知りじゃないみたいだね。さっき挨拶していたけど、学年は違うのかな」

「あーちょっとわからないですね。学年違うとだいぶ」

あまり会話に加わりたくなくて、厨房に留まる。伊藤はどこにいるんだ？

「伊藤ってやつは変わったやつでさ、会社でも浮いてるんだよね。余計な事はしないからいいけれど、あのしれっとした態度でベテラン勢からだいぶ反感かっているんだ。あまり人もいないから、一緒に現場行きたくないって言われちゃうと困っちゃってもう。しかも、ホモだって噂」

「うわ～気色悪いな」

「え、初めて聞きました。いるんだ」
「この辺の会社を渡り歩いていたやつで、知り合いがいたんだよ。ホモだかゲイだか知らないけど、そんなのと一緒に仕事してみろよ。脳と身体が違っている？　病気だとか生まれつきだとかテレビなんかじゃ言っているけどさ、本物は気持ちが悪い。鳥肌が立つよ。社長に慣れるまで面倒見てやれって言われる身にもなって欲しいね」
伊藤の噂話は、俺の居心地を悪くした。
俺は、伊藤に向けられてきた言葉の暴力性を知っている。差別的な言葉であること。気丈にしていても、心のどこかからかは、血が流れていること。それでも、伊藤は最大限気にしないよう自分自身にも、他人にも振舞っている。佐伯先生とクソみたいな理論を話し合った？　なんで伊藤はそんなことをしなきゃいけなかったんだ？　嫌みったらしい言葉を聞き慣れるような人間になることを、受け入れるしかなかった。だから伊藤には、ずっとずっと超えられない世界との一線が横たわっているんだ。
あの日、伊藤を追いかけて必死になった紛れもない事実が、俺にはある。
『その汚い口を今すぐ塞げ。お前たちに吸われる空気さえ、もったいない。卑しい言葉で俺の店を汚すな』
ゲイが嫌いなら勝手に気持ち悪がっていればよいだけのことだろ。伊藤だって誰かれ構わず、好意を持つわけではない。俺はこの二人よりも本当の伊藤を知っている。ゲイでもない、虐められた同級生じゃない、暗闇の中を一生懸命走った同じ孤独の中にいた伊藤を知っている。
俺は今ここで、二人に反論することだってできる。伊藤とは初対面だと偽っているし、こいつは他愛のない会話でも差別的な思考を許さない、生意気な若造、くらいにしか思われないだろう。この場にいる人も調子のよかった会話の流れを止められたことに気を悪くするだけで、一時間後にはどんな話をしたかさえも忘れているだろう。
なんだ、俺は、冷静に自分の立場をよく理解しているじゃないか。伊藤に対してだけじゃない。人権や人の気持ちとい

った立場から、彼らの態度に怒りを覚えたのだ。社会に出て仕事をするなら、その場にいる人が不快に思う言動を控えることくらい当たり前だろ。俺は、もう、誰かを孤独にする一人にはなりたくないんだ。

それでも、自分の口からは、なんの言葉も出てこなかった。伊藤を守ったり、下種な会話を咎めたりできるセリフが、身体のどこにもなかった。あの夜の伊藤との出来事が、ただ胸中でぐるぐると渦巻いていた。

「岩井さん、こちらいいですか」

厨房の奥から伊藤の声がする。蚊が鳴くよりも大きいが、客席には聞こえない。

矛盾や葛藤を抱えたまま、沸騰した頭で見る景色は、霞み、淀んで見える。申し訳なくて、伊藤がいる方向に視線が向けられない。伊藤を直視できないのは、俺が、今も間違っているからだ。

「岩井さん、店の配管の繋がりのことで、図面とパイプを確認していただきたいのですが」

厨房の中で、パイプの中を覗き込んでいた伊藤が立ち上がり視線を合わせた。

「はい。今行きます」

声が震える。俺の喉と胸のあたりは、熱湯を飲み込んで火傷したみたいに熱い。客席の会話は、厨房の奥まで届く。他に客がいなければ尚更だ。あいつは、会話の内容を分かっていながら、無表情のまま俺を呼んだのだ。

「おっと。呼ばれちゃったね。後ろに気をつけろよ、岩井君」

俺をからかいつつ、笑わせようとする冗談。それは、俺を普通の人間と、そっち側の人間じゃないと認める証明だ。その一言の意味に気づかないふりをして、“足元に気をつけろ”と勝手に言い換えた。顔の皮膚の余計な部分が引きつらないように最大の注意を払い、はい、と答えておいた。胸の内はさらに激しく動揺した。客席の人間に対する怒りと伊藤に対する罪悪感がせめぎ合い、俺は俺自身の味方になれなか

った。

伊藤の側を覗くと、伊藤の視線は地面を這うパイプに戻っていて、うまく表情を読み取ることができなかった。ずっと下を向いて作業をしていたせいだろう。顔に血が集まって、帽子の下のわずかに見える額に汗をかいていた。ふと天井を仰ぎ、軍手をつけたままの手で額をぬぐった。その姿は、淡々と仕事をこなす、ただの一人の技師だった。だから、近づいていく俺の姿なんか、視界に入っていない。

伊藤の隣で膝を付いた。隣にしゃがむ男を見ずに、水が染みて灰色を濃くしたコンクリートの地面と向かい合った。

伊藤、今が最高の機会だ。俺の息の根を止めるつもりで睨んでくれ。最低の人間だと蔑んでくれ。結局は体裁だけを気にするやつだと。言葉にしなくていいから、俺はその一瞥で、すべてを理解するから。

俺はあの人たちに、お前が中学の同級生だったとは言わない。一緒に過ごした時間で、友達になれるかもと思ったことも言わない。そうやって俺は、当事者から外れていくんだ。

二人で覗き込んだ配管の中は、辺りのどこよりも深く暗く、あの日の夜が流れ出てくるようだった。

〈了〉

【編集後記】

■「日本の美しい四季」は、地球温暖化の影響で形骸化し、最近では「二季」という言葉がよく聞かれる。とくに今年は、六月から九月まで最高気温が三五度を超える猛暑日が延々と続き、短い秋を挟んで、すぐに寒波が押し寄せてきた。さらに異常気象は生物の生態系にも影響を及ぼし、漁港で水揚げされる魚の種類が変わったり、山中で生きられなくなった熊が市街地に出没したりする異常事態が起こっている。

■人の世もまた、気象と同様に混乱と混迷のさ中にある。ウクライナや中東における紛争は解決の目途が立たず、トランプ関税に加えて低賃金に物価高。日本初の女性総理誕生は良いニュースとしても、少数与党と野党との駆け引きで揺れ動く政局からは一時も目が離せない。

■その混迷した世相の中で、『文芸草の丘』は第二九号を予定通りに発行する運びとなった。今回のコンテンツは詩とエッセイおよび連載小説が夫々二つ、合計六編である。詩とエッセイについては、力の籠った作品に仕上がっているものの、若干、マンネリ化の傾向は否めないように思われる。

■その中で、いんば華子の小説『この前・この間』は7回目の今号で完結を見た。小説は、一気に通読しないと批評は難しいので、改めて作者がいじめ問題を取り上げた動機や意図、タイトルなどについて聞いてみたい。

〈香取　記〉

【会員と連絡先】

安達　真魚　kiyonori.s@gmail.com
いんば　華子　bach.goldberg-variationen@hotmail.com
香取　淳　katorijun27@gmail.com
中川　とら　nakagawatora1@gmail.com
ねこまくら　nekomakkura@gmail.com
畑中　康郎　ktakasug@am.em-net.ne.jp

草の丘　第二九号

発行　二〇二五年　十二月二一日
編集兼発行人　印旛文学の会　香取　淳
連絡先(携帯)とメール　080-5533-1002
katorijun27@gmail.com
URL　http//bungeikusano-oka.raindrop.jp